

宗方小太郎日記、明治 22 ～ 25 年

大里 浩 秋

はじめに

本所報 No.37 に筆者が「上海歴史研究所所蔵宗方小太郎資料について」と題した一文を載せたのは、もう 3 年前のことになった。その文では、上海社会科学院歴史研究所に所蔵されている宗方関連文書のあらましを紹介したあと、その文書中で最もまとまった形で保存されている彼の一連の日記のうち、最初期のものと思しき明治 21 (1888) 年度分のそのまた中国滞在時期のみを解説して載せ、結びとしては、今後日記を読み進めることから宗方研究をスタートさせたいと書いた。しかし、その作業は遅々として進まないまま時間が経ってしまった。そこで今回は、その作業を再開してどうやら解説できた明治 22 年から 25 年までの日記を載せることにした。

ここで、すでに書いたことと一部だぶるけれども、宗方小太郎の経歴を簡単にまとめておく(注)。宗方は、元治元 (1864) 年肥後宇土 (今の熊本県) に生まれ、大正 12 (1923) 年上海で亡くなった。佐々友房が創立した熊本の済々黷に入って中国語を学び、明治 17 年清仏戦争の折に佐々に従って上海に渡って以降、その生涯の大部分を中国の地で送った。その間荒尾精が主宰する漢口楽善堂グループの活動に参加して彼らが考えるところの「世界人類のために第一着に支那を改造すること」を目指し (といってもこれだけでは何をしようとしているかが分からないが、筆者の理解するところによれば、日本が主導権を握り中国を糾合して西欧列強のアジア侵略行為を阻止しなければならず、そのためにさしあたっては中国各地の概況を調査し、協力できる人材の確保に当たるべきだとして)、グループで議論決定した任務分担に従って宗方は北京支部を作るべく活動し (明治

21 ～ 22 年)、そうしたグループ員の実践半ばにして荒尾が方針転換して作った上海における日清貿易研究所の運営にも参加 (23 ～ 26 年)、日清戦争直前には海軍の情報収集活動にもっぱら従事して清朝側官憲の追及を危機一髪で逃れたことがあった (27 年)。その後 29 年には漢口で中国語新聞『漢報』を発行し、31 年には東亜同文会の結成に参加、37、8 年の日露戦争でも情報収集に従事、さらに大正 3 年に上海に東方通信社を作って亡くなるまでその責任者の地位にあった。日清戦争後の 28 年 12 月から亡くなる直前の大正 12 年 1 月まではその時々中国情報を海軍司令部宛に送っていて、全部で 628 篇に及ぶ報告の大部分が今に残っている。それらの報告によって宗方の中国理解の中身を窺うことが出来るはずだが、それに加えて上記報告を書き始める以前から死に至るまで日記を書いていてやはりその大部分を今に読むことが出来るのは、報告には触れていない宗方自身の普段の生活ぶりや考え方を知る上で役に立つものである。

総じて、宗方小太郎は明治 20 年前後から大正 12 年に亡くなるまでの間、弱体である中国を日本が救いそうすることで両国が共同して西欧列強の侵略を防ぐ条件を作ることを大義名分としつつ、実際には日本が西欧列強に学んで中国への侵略を強めていく過程に身を置き、一貫してチャイナウオッチを任務として中国と密接に関わってきた人物だといえるのである。以下、便宜的に 2 つの時期に分けそれぞれに若干の解題を付した上で明治 22 年から 25 年までの日記を読んでいただくことにする。

(注) これまで筆者が宗方について書いたものとして、上記の本所報 No.37「上海歴史研究所

蔵宗方小太郎資料について」がある他、「漢口楽善堂の歴史」(上)(神奈川大学『人文研究』第155集)がある。

1. 明治22年1月～23年1月の日記

宗方は明治21(1888)年9月4日に上海から海路天津に向かい、10日に天津に上陸、数日をそこで過ごした後、馬車で北京に着いたのは17日のこと。それから23年1月24日までの1年5ヶ月近くは、一時的に旅に出る以外は北京に滞在しており、その間毎日欠かさず日記を記している。但し、そのうちの21年の分はその年を通して「往返日誌」と題するひとまとめにしており、22年1月から23年1月24日までの分をのちに本人が「燕京日誌」(燕京は北京の別称)と総称しているのである。

北京に到着してからの21年の日記は本所報No.37を読んでいただくことにして、ここでは22年の内容につなげるべく最小限の事実を抑えておく。宗方は北京に着くと、その頃科挙の試験に集まっていた受験生に参考書を売るために琉璃廠に臨時で開いていた楽善堂書房(そこで働いていたのは吉田清揚で、店を引き上げた後には上海の楽善堂に移って働いている)に仮寓しながら、薬、本その他雑貨を扱う「積善堂」と称する店を開設すべく動き始めており、外国人は店を営営できない規則に従って名義人となってくれる中国人を探し、更に店として使える家屋を見つけて開店にこぎつけたのは11月1日だった。こうした北京到着直後の宗方の動きは、21年前半漢口楽善堂で討議決定した北京支部を設けることの具体的実践であり、22年はその続きの動きとして見ていくことになる。以下、「燕京日誌」を読んで興味を覚えた内容を四つに絞って見ていく。

一つは、漢口楽善堂の活動についての様々な情報が記されている点である。それは漢口楽善堂現地の情報であったり、任務分担した先々でのグループ員の様子であったり、宗方個人に関わる任務のことであったりするけれども、従来ほとんど明らかになっていなかったグループの活動状況が、彼の日記を追うことで垣間見えてくるのである。これがこの時期の日記を読んで筆者が最も興味を

引きつけられた点であり、その詳細については稿を改めて論じたいと考えているが、ここでは日記の時間順にいくつかを取り出してみる。2月2日の日記によると、広岡、大屋、藤嶋、松田らメンバーが、前年中に辺境地帯に調査に出かけていたのが漢口に戻り、再び別の場所に向かおうとしている様子を伝える。また4月20日には、浦と藤嶋が3月に漢口からイリ地方に向かったことを伝える(その続きとして、12月10日には2人のうち1人は殺され、1人は逃げたとのうわさがあることを伝えている)。4月21日と24日には、宗方本人が蒙古で遊牧を始めることを真剣に考えていることが書かれており、「北部計略の爲め」「本年九月該地に赴き実況を視察し、直に適当な地を選び開墾牧畜に着手することを決す」とある。さらに、6月3日には中西正樹、仲中尉らが天津に薬店を開いたことを伝えている。そのうち中西はまもなく帰国、仲が引き続き店を開いていることがわかる。以上は、いずれも前年荒尾のリーダーシップの下漢口楽善堂の行動方針として決定したことに基づく動きといつてよい。

しかし、当の荒尾は3月中旬に帰国して、新たな方向即ちそれまでの中国の数箇所に支部を置き各地の調査に従事するとの方針を転換して、中国との貿易を重視しそのための人材を育てる学校組織を作ることを目指して動き出しつつあり(この動きは、後述するように翌年に「日清貿易研究所」として実現を見る)、そのことは5月30日、6月4日に具体的ではないが触れていて、宗方も反対はしていないのである。そして9月17日には、漢口楽善堂は「数十名の同志各意見を抱」いてまとまらず、「衰退危急」の状態にある、との漢口からの手紙を紹介し、10月21日には荒尾からの手紙で「運動の方針を一転」し「北京店引き上げ」「在京同志来年二三月迄上海に会集する」ことを相談してきたと記し、さらに翌年1月には、荒尾は「漢口本部」を撤収しようと考えており、財政逼迫をしのぐためにグループ員が各地で薬や書籍を売りさばくことに力を入れていることを伝えている。以前に決めた行動方針実施半ばにして、全体の確認を経ないで荒尾が新しい方向へとどんどん動き出したことへのグループ員のとま

どいが感じられる情報である。時間が前後するが、中国の秘密結社と連絡を取ろうとしていることを証明する記述もある。8月2日と25日の日記によると、福州の哥老会員鈕叔平に「今後気脈を通じて事を挙げ、亜細亜の大勢を作興せん事を謀る」と手紙に書き、漢口の同志には「今後我党の取て以て進むべき事業の目的方針」としては「先づ不平党を籠絡して我用と為すべき」と書いたとあり、秘密結社の力を利用して腐敗堕落した清朝政権を打倒すべきだと考えていたことが推量されるのである。

なお、北京で付き合っている人物として日記に出てくるのは、山口外三、荒賀直順、北御門松次郎、河原格二郎、井手三郎、天野恭太郎、吉田清揚、横田二郎、宮嶋大八等であるが、この中で漢口楽善堂のメンバーであるのは、荒賀、北御門、河原、井手で、山口は漢口には行かなかったものの「我党」の同志であり、吉田は前述のごとく楽善堂で働いていてこれまた同志であったと思われる。宮嶋は当時武漢に留学していて、宗方とは漢口でも北京でも（後には上海でも）親しく行き来しているが、同志とまではいかないようである。他に公使館関係者や軍関係者との行き来があり、軍関係では河原彦太郎陸軍中尉（本名、石川）、邦山海軍中佐（本名、新納時亮）、仲中尉（本名、小沢）、世良田海軍少佐がいる。

二つに、宗方の北京における任務に絞って日記を見ると次のようなことが分かる。前年11月に開店した積善堂で扱う商品は、薬や書籍類は東京楽善堂本店や上海の楽善堂から送ってもらったものであるのは当然として、日本人が経営する天津の武甕号からも種々の雑貨を取り寄せており、それらを自ら売るだけでなく他の店にも卸している。また、店には中国人の店員を置いているものの日本人の出入りが多いことから、近所の中国人が外国人の店であることに気づいて不都合が生じていること（7月27日）や、8月25日から9月半ばにかけては最下等の商人のやることだと嘆きつつ店員も動員して崇文門外の路傍で書籍売りをしているのは、片や中国人の経営を装った活動としては警戒心が足りず、片や店の売り上げも順調でないことを示していると思われる。そして前述

のごとく、10月に荒尾から従来の方針を変えて北京店を引き上げることを相談してきたことによるのであろう、「店中を改良」し「燕京維持の基礎確定」して（12月6日）、完全に店を閉じるのではなくその運営を当初から雇っていた中国人店員汪緝甫に任せることにして、北京を離れる間際の23年1月下旬に全権を汪に委譲している。

三つに、これもまた北京における宗方の任務の一とっていいだろうが、北京城の内外を問わず、いろいろな場所に出向いてはその観察記録を日記中に書いている点である。例えば、城内の各役所、皇居、複数の城門の様子を見に行っているし、軍の演習があればそれを見に出かけ、皇帝が天壇における祈りの儀式を執り行うとなればそれに注目し、廟の祭りの雑踏にも出かけているのである。これらの動きは単なる好奇心に発しているのでは無論なく、首都の主だった場所や行事をじかに見て回ることによって仲間にその情報を提供しつつ、今後の観察や状況判断にも生かそうとしているのであろう。この点は、城外に出かけてあちこちと観光して回るときにも同様であり、城内よりもいっそう詳しく周りの様子を描写している。例えば、9月に八達嶺から十三陵を回った際も、11月に西山、円明園を観光した際も、1つの集落からもう1つの集落までの距離やかかった時間、そこで雇った馬の値段、通り過ぎる途中の景色や寺や泊まった宿の様子を事細かに書いていて、この記録を頼りにすれば初めての人でも安心してその道を歩けるほどに行き届いた説明になっている。また西山、円明園では、その近くにある水師学堂や西山機器局、八旗兵の駐屯のことなどについてもメモをしているのである。各地を回っては必ずその地の地理や産業、学校などに関する情報を書き留めるのは、宗方の習い性になっていることを思わせるところである。

四つに、時々簡単に「終日在家」「何々省の紀行を写す」と書いてある点に注目したい。これは、宗方が明治20年4月から12月までかけて江蘇、山東、直隸、盛京、山西、河南、湖北と回り、通る先々で詳細な観察メモをとったものを、他人に読ませるような記録とすべく整理している作業を指しているのである。この手間隙のかかったであ

ろう作業をいつ終えたかは確認できないが、その後宗方が上海に滞在して日清貿易研究所の仕事に従事していた24、5年時にそこに在籍していた複数の生徒を動員して清書させ、おそらくは25年初めまでには公開できる形を成したのではないと思われる。「北支那漫遊記」と題して今上海歴史研究所に保存されている分厚いひと綴じが、まさに清書し終えた形のこの紀行文であるが、清書を手伝った者の名前が担当した省ごとに目立たない形で書いてあるので24、5年頃に生徒に清書させたことがわかり、更には、25年6月10日の日記に研究所に「予の旅行記を売り」200円を得たとあるところからは、それまでには清書を完成させて、日清貿易研究所が同年中に『清国通商総覧』全3巻を出版する際の前稿の1部として提供して稿料を得たのではないかと推量されるのである。しかしこの点は、上海にある原本と『清国通商総覧』を照らし合わせて中身を比較検討すべきことであり、今後の課題として残したい。

さて、明治23年1月25日に北京を発ってからは陸路漢口に向かって移動して、行く先々の見聞を詳細にメモしてそれがかなりの量に達していたが、湖北襄陽に着いた際に紛失してそれまでに書いた27日間の記録がふいになった。そのためしばらくして帰国してから、記憶を頼りに補ったと自ら語っていて、今は1月25日から30日までの6日分を読むことが出来る。そのうち25日から29日までの記録は非常に詳しいもので、これを記憶のみで書いたとすれば驚くべき記憶力というしかない。しかし、それ以降について同様に記憶を再現したものかどうかは不明であり、また襄陽から漢口に着くまでの数日間は書いたのかも不明である。更に、3月3日に漢口に着いてから7月31日までの分は、日本の国会図書館憲政資料室に保存されて見ることが出来る（神谷正男編『宗方小太郎文書』続、原書房、昭和52年に収録されている）けれども、それ以後24年4月17日までの1年3ヶ月余は、書かれたと思われるが、所在は不明である。

ここで23年3月3日から7月31日の日記の

内容に簡単に触れておくと、宗方が漢口に到着した翌日3月4日に漢口楽善堂のメンバーの1人石川伍一が湖南から戻ってきて再会、一緒に帰国することにして上海経由で16日に長崎に着き、そのまま東京に向かった。東京では、宗方は荒尾が進めていた日清貿易研究所を上海に開設するための準備に加わり、生徒募集の段階から入学試験まで忙しく手伝っている様子が毎日のように記されている。この期間の日記を見る限り、宗方は研究所開設前の日本において取り組むべき最も基本的な準備といえる生徒募集の最終段階で帰国してその作業に参加したのであり、その後、『対支回顧録』下巻「宗方小太郎」（再刊本、原書房、昭和43年）によれば、入学を許可した150名を引率する側の一員として9月初めには上海に向かったことがわかるのだが、8月以降しばらくの動きを確認できる資料、とりわけ日記を欠いているのは残念である。

以下に、明治22年1月初から23年1月末までの日記を載せる。のちの2に載せる24年と25年分の日記とあわせて、記載の要領についていくつかのおことわりをする。原文はカタカナ交じりであるが、ここではひらがなに改め、漢字の旧字体は人名を除いて新字体に改めた。文中、宗方が書き忘れたと思える欠字が散見するが、そのままにした。固有名詞、主に人名の記載は当て字になったり誤字になったりしていることが多いが、これもそのままにした（例えば、伊地知一伊知地、本島一元島、三木一三個木等）。解読できない字は□で示した。また上海歴史研究所図書館の製本の仕方が原因で読めない箇所は、一行分不明とか□□□…などとした。解読できない字や読めない箇所については、今後可能な限り欠落を埋めるべく努めたい。なお、日記の解読と入力作業については本学中国言語文化修士課程終了の佐々木恵子さん、増子直美さんに手伝ってもらった。

燕京日誌

長嘯亭主人

明治二十二年正月元日 夜、雪。朝天野を出でて、共に公使館に抵り賀正す。下午荒賀氏と共に帰

寓。北御門生亦来る。此日熊本諸友に新年の賀状を認む。即ち佐々、浅山、内藤、西川、岡本源二、岡村正夫、井芹、熊谷、脇山、佐野、山田等なり。外に英国に在る品川久太郎に与ふる書を認む。

正月初二日 好天。下午、荒君と出でて、公館に至り芳谷氏を訪ふ。河原、宮嶋両子亦来る。横田を訪ふ、在らず。去て天野恭を叩く。北御門、横田、塩田、吉田諸子会飲す。下午、予は荒賀、北御門等と山口外三を訪ふ、在らず。去て六条胡同に至る。北御門、荒賀二子と談話、四更に至て寝に就く。

正月初三日 朝、横田、山口二子来る。下午、北御門、荒賀と出でて、天野恭太郎を訪ふ。予は止りて晚餐し、終に此に宿す。朔風凜烈飛雪撩乱指墮耳飛んと欲す。是日より北御門は天野の寓に移住せしなり。

正月初四日 寒威凜然、小午、天野氏より帰る。

正月初五日 終日在家。

正月六日 下午、荒賀氏と出でて、天野氏を訪ひ晚餐し、終に止宿す。此日、漢口荒尾氏の信至る。北御門等の旅行費二十五円を匯送し来る。且つ北御門等に北京を發し、河南黄河の決口を視察し、湖北襄陽に出で、明年清曆二月浦敬一と襄郡に会合し、再び伊犁に向ふの議に決せしを告ぐ。又大屋、藤嶋等は西安樂安に遲滞し終に蘭州に出づるの期に後れ、八月二十日西安を發して蘭州に向へりと云ふ。

正月七日 好天。朝天野氏より公館に至り為替銀を受取り、帰宅す。下午又た出でて公館に至り、漢口荒尾氏に復する書状を附郵す。即ち伊犁行の事に付き資金及び人物を撰むことと、言語に通ずる人を添すべき事を言ひ送れり。晡時帰寓。

正月八日 下午公使府に至り菅谷氏を訪ひ、去て横田三郎を訪ひ晚餐し、佐野直喜に寄するの書状を附郵す。蓋し本日上海邦山少佐の書信至り、今春満州旅行を試みるに付き一人の書生を要する事を告げ、予に同行を望む切なりと雖、予は別に負担の事勢有れば到底同行を得ず。故に佐野直喜氏をして之に代らしめんと欲し、急に渡来を促せしなり。夜天野氏に至る。宮嶋、北御

門、河原、塩田、吉田の諸子会飲す。少焉、諸子散去。予は荒賀氏と共に止宿。

正月九日 朝帰宅。中餐後荒賀氏と共に出て北御門を訪ひ、共に六条に至り河原彦太郎を訪ひ河原格二郎の帰るを待つ。少焉、帰来。曰く、天津行を明後日に延せりと。此夜北御門、河原等は中嶋氏に招かれて赴く。予は荒賀氏と河原氏に止て晚餐の饗を受け洋牌を闘はして夜更に至る。蓋し予本月初めて此遊を学び得たり。

正月十日 六条を辞し、帰途山口外三子を訪ふ。河原格二郎在焉。予は独り去て北御門子を訪ひ中餐し、下午共に公館に至り中嶋子を叩き金を借らんとす。無し。横田に就て之を借らんとす。又た無し。蓋し明朝河原子の旅資なければなり。予は大に困す。已むを得ず空手六条胡同に抵り、河原彦太郎氏に就て之を借るを得たり。夜河原彦子、河原の天津行を送別す。会者北御門、荒賀、吉田、宮嶋、山口、河原、及び予なり。

正月十一日 風大。朝、河原格二郎驢に騎て天津に赴く。予、徳丸策三、森田熊之助二子に致書す。北御門、吉田、荒賀三子と共に帰る。夜上海樂善堂に寄するの書を認む。明春恩試の事を報じ、並に書籍領収書二通を送る。

正月十二日 終日在家。

正月十三日 雪。午前北御門を訪ひ、下午帰り吃飯後又た北御門等を訪ひ、終に止て晩食し夜此に宿す。

正月十四日 飛雪撩乱。午前天野氏を辞て公使府に至り、鄭永昌氏を訪ひ洋銀七十弗を借るを約す。晌午帰寓す。夜宮嶋氏来宿す。積雪三寸許。

正月十五日 朝荒賀氏と出でて公館に至り、鄭氏を訪ひ銀七十弗を借る。晌午去て六条胡同に抵り河原彦太郎氏を訪ひ、前借の銀六弗を返却し小談。驢に騎て帰る途天野氏を叩き、暮時帰寓す。

正月十六日 終日在家。夜荒子と出で宮嶋氏を天興客店に訪ひ、九時帰寓す。

正月十七日 好天。下午荒氏と出でて公館に抵り、山内崑氏に寄するの書を附郵す。此日皇居内太和門失火烧失。荒氏と往見。

正月十八日 下午出でて北御門氏を訪ひ、晡時共

に公館に至り横田三郎を訪ふ。止て晩食し洗濯して、天野氏に帰り宿す。此日公館に鄭氏を叩き小談。

正月十九日 好天。朝天野氏を辞し、帰途前門大街に至り市を見る。魚鳥及び兎鹿の類甚だ夥し。蒙古より来るものなりと云ふ。鹿は其腸を抜出せしのみにて其肉は全く凍結せり。数月を閲するも腐敗せずと云ふ。

正月二十日 好天。早起前門大街に抵り臘市を観る。中食後出て北御門を訪ひ、共に六条胡同に抵り河原中尉を訪ひ、夜蕎麦の饗を受く。帰途公館に抵り、横田三郎を訪ひ止寓。

正月二十一日 好天。朝横田より帰る。中餐後荒賀氏と順治門内を経て公館に抵る。此日山内崑の信到る。暮時帰寓。

正月二十二日 晴。終日在家。晡時北御門子来る。宮嶋子亦来訪。

正月二十三日 晴。下午荒賀子と出て公館に抵り、菅谷を訪ひ小談。帰寓。

正月二十四日 晴。晩荒賀子と出て天野氏に抵り、夜公館に抵り洗濯す。天野氏に宿す。

正月二十五日 晴。終日在家。芝罘迄の紀行を写し了る。

正月二十六日 晴。気春の如し。早起進城、北御門子を誘て六条に至り、河原氏を訪ひ、中食し隣邦兵備略を借て帰る。

正月二十七日 晴。早起公館に抵り、横田三郎を訪ひ、公使に就き漫遊聞見録を借らんとす、無し。晌午帰寓。

正月二十八日 晴 下午北御門氏を訪ひ小談。帰寓。

正月二十九日 晴

正月三十日 好天。晡時宮嶋氏来る。夜出でて大街を散歩す。是日陰曆大晦日に当るを以て街燈整点雑踏殊に甚し。宮嶋氏に至りて再び吃食し、吉田氏と共に宿す。三更後爆竹声宿に轟然たり。

正月三十一日 晴。此日清曆元旦たり。朝餐後宮崎、吉田二子と出でんとす、山口外三来る。共に出でて積善堂に帰り、荒賀氏を訪ひ、中餐後行て戯を見る。

二月一日 朝北御門氏来る。共に出六条胡同に至

り、河原氏を訪ひ兵備略を返し、午時天野氏に帰りて中餐し、帰寓。宮嶋子在り焉。北御門氏亦た来る（此日より煙を吸て□□）。

二月二日 好天。朝出でて北御門子を誘ひ、去て公館に抵る。是日より北御門子再び六条胡同に移転すと云ふ。天野氏の処にて中餐の饗を受く。是日漢口井手、片山、緒方、井深、大屋半一郎、広岡安太諸子の信至る。広岡氏は北京を發してより山西、陝西、甘肅、四川、雲南、貴州等の地を旅行し、過日漢に着し、今度又た書籍を送りて四川高橋生の支店に至り暫らく高橋を助力し、雲南苗子の実況視察の爲め出發すと云ふ。又大屋、藤嶋二人は蘭州より無事帰漢せし由。松田満雄は吉沢生の蹤跡探りの爲め雲南地方に向ふ筈なりと。荒尾精氏は今度帰国の途次井深を從て北京に来ると云ふ。晡時天野を辞し、帰途宮嶋大八を訪ひ広岡生の書状を交し、又た山口氏に白井新太郎と井深彦二子の書を交し小談、帰寓す。

二月三日 好天、日曜日。朝荒賀子と出つ。是日天子天壇に幸す。往来の通行を禁ず。天子の過ぎ去るを待て公館に至り、横田を訪ふ。宮嶋子亦在焉。北御門、田中二子亦来る。中餐の饗を受く。晡時帰寓。

二月四日 好天。朝出でて順治門を入り六条胡同に抵り、北御門を訪ひ小談、帰寓す。是日路上めがねを看る□□当るべからず。是日漢口荒尾子の賀年書至る。

二月五日 好天。中餐後荒賀子と出でて琉璃廠に抵り、火神廟の祭を見る。頗る雑踏。帰途前門大街を散歩して帰る。是日通信を認む。

二月六日 好天。荒君と公館に抵り、熊本に寄するの通信一封を附郵して帰る。夜宮嶋氏を西河沿の天興客店に訪ふ。

二月七日 好天。下午前門大街に遊ぶ。雑踏織るが如し。

二月八日 陰天、大雪。小午荒賀氏と六条胡同に抵り北御門を訪ひ、中餐後共に出でて山口外三を訪ふ、在らず。公館に抵り横田三郎を訪ひ小談、帰寓。北御門生亦来る。晚餐後荒賀氏と公館に抵り、横田を訪ひ洗濯し終に横田氏に宿す。

二月九日 雪。下午出でて公使府に至り、喬文彬を訪ひ銀十余両を暫借せし事を約し、前門大街を遊歩して帰る。

二月十日 好天。午前公使館に抵り喬氏を訪ひ銀□□拾両を借り、去て横田を訪ふ。宮嶋氏亦在焉。小談。荒賀、宮嶋二子と前門を出で、折れて琉璃廠に抵る。福神廟の祭日にて雑踏織るが如し。遊覧帰寓。

二月十一日 好天。是日芝罘領事館書記生田辺熊三郎氏の信至る。

二月十二日 好天。下午宮崎氏来る。共に出でて小栄椿戯館に赴き戯を見る。山口外三亦来る。暮時帰る。聞く、昨日日本に在りて憲法を国中に発布せりと云ふ。夜北御門生来り宿す。

二月十三日 好天。終日在家、紀行を作る。

二月十四日 好天。下午宮嶋君来訪、一昨十二日紀元節の日森文部大臣有礼氏刺客の為に殺さると。電文筒にして其詳を知らず。山口外三亦来る。荒賀、山口二子と出でて、公館を経て四牌路に至り灯市を見る。雑踏織るが如し。茶葉店、点心舗、重もに画燈、琉燈、彩燈を点ず。其数無慮一百個あり、一百四五十個に至る、甚だ盛況なり。帰る。夜更爆竹の声絶へず。此夜清曆正月十五日たり。

二月十五日 好天。朝餐後荒賀氏と六条を辞し、六部衙門を一覧して帰る。工部衙門は彩燈画燈の裝飾最も盛にして其数幾百千なるを知らず。又た門内処々福德正神を祭る。清人の怪を望む、解すべからず。閑人の混入縦覧を許す。雑踏殊に甚し。宮嶋氏来訪。

二月十六日 好天。終日在家。紀行を作る。午時北御門生来る。宮嶋氏亦来。夜宿す。

二月十七日 好天。是日漢口荒尾氏の信至る。下午宮嶋、荒賀の両子と四喜班に至り戯を見る。絶世美童二三を見たり。技芸熟達神妙感ずべし。手術転倒の妙殊に人をして喝采せしめたり。

二月十八日 好天。早起紀行を作る。下午荒賀氏と公館に抵り、予は中嶋氏を訪て一統志直隸の部を借りて帰る。夜山東省紀行を終はる。

二月十九日 放晴。朝邦山順氏の使来る。芝罘より陸路を取り昨日六条胡同に来着せりと云ふ。下午予、吉田氏と共に六条に赴き国山氏を問う。

昨日天津より来着せしと。午下吉田氏と共に邦山氏を誘ひ皇城東華門、地安門附近を巡覧し、六条に帰り止りて晚餐し、邦山、河原等の諸氏と清国の事情を詳談し快殊に甚し。深更河原氏に宿す。

二月二十日 快晴。朝邦山、吉田両氏と六部衙門を巡覧し、前門を出でて積善堂へ帰り共に中餐す。宮嶋、天野両氏在焉。食後又た邦山海軍少佐（本名新納時亮）、吉田清揚二子と永定門内の天壇、先農壇を一覧し、前門に至りて邦山に分れ帰る。此日新聞着す。

二月二十一日 陰天。下午出でて六条胡同に至り邦山少佐を訪ふ。今朝西山に赴けりと云ふ。河原大尉を訪ひ小談。帰る途中公使府に立寄り、横田三郎を叩き小談帰寓。

二月二十二日 朝小雪。下午出でて六条胡同に抵り邦山氏を訪ふ、在らず。暮時河原氏と共に帰来、夜会食す。吉田、山口、北御門、及び予と邦山、河原の六人なり。

二月二十三日 晴。早朝河原、吉田の二子と邦山少佐を送る。予は独り驢に騎して邦山と共にし、石路を行く二十五里にして三間房を過ぎ（□□□□）、又た七里にして八里橋を渡る。此地乃ち英仏同盟軍の時僧格琳沁が一と支へせし所なり。一小流の上に駕す石造の鼓橋にして堅牢の所なり。是より八里にして通州の西門を入り、東門内の恒茂客店に投じ中餐し邦山氏と談話、久之車馬東西に分袂す。邦山氏は天津を経て陸路山海関を出でて牛莊に至り、水路芝罘に帰り朝鮮を経て帰朝すと云ふ。予は独り驢に鞭て北京に帰る。暮時齊化門を入り六条胡同に着す。驢錢帰回四吊文なり。公館横田の処にて晚餐し、菅谷を訪て一宿す。

二月二十四日 大雪。朝横田に至る。宮嶋、荒賀、北御門の諸子来る。小談、帰寓す。此日上海山内氏の信来る。近々書籍を送致すべしと云ふ。

二月二十五日 好天。朝出でて公館に至り鄭氏を訪ふ、在らず。横田に抵り小談、一書を鄭氏に留めて帰寓。下午出でて前門に至り皇后の送嫁装を見んとす。兵士の呵制厳にして之を見るを得ず。去て北御河橋に至り天幕の隙より之を見るを得たり。晡時帰寓す。

二月二十六日 好天。是日清暦正月二十七日にして清帝大婚の期日たり。是日漢口荒尾、及び浦敬一より書状到る。伊犁行の事に付き北御門、河原二子の違約を咎め来れり。下午荒賀氏と出でて六条胡同に抵り北御門生を問ふ。門閉せるを以て其不在を知り叩かずして、河原氏に抵り小談。辞帰途山口外三氏を同仁医院に訪ふ、在らず。之を待つ、晡時帰来す。北御門生亦来る。曰く今日は終日在宿にて外に出でざりしと云ふ。晚餐後荒賀は公館に抵る。予は北御門と共に山口に宿す。

二月二十七日 好天。朝北御門と共に帰寓。中餐後荒賀、北御門二子と出でて天野恭太郎と西守衛に訪ひ談話。移時帰寓。夜荒賀氏と宮嶋生を訪ふ、在らず。

二月二十八日 好天。是日天津河原格二郎に書を寄せ西行の意見を訪ひ、漢口浦、荒尾二子の書を転送す。天津河原格二郎の書到る。来三月初より天津を去ると云ふ。下午荒氏と公館に抵り横田を訪ふ、在らず。菅谷を訪て小談、帰寓。夜宮嶋氏来訪（是日輪船天津に至る）

三月一日 陰天。是日熊本より新聞到る。北御門来り中餐して去る。下午荒賀と出でて公館に抵る。宮嶋氏在焉。天野亦来る、小談即帰る。

三月二日 好天。下午出でて六条胡同に抵り、白米五十斤（二円五十銭）を買ひ車に乗じて帰る。

三月三日 好天。午前北御門来り中餐して去る。終日在家、紀行を作り北京迄を終る。

三月四日 晴天。是日上海山内、岸田吟香両氏の書状到る。書籍三箱、薬一箱を送れりと云ふ。即ち開河第一の輪船に托せしものなり。下午宮嶋氏来る。晩飯後荒賀氏と出でて公館に抵り、横田三郎を訪ひ談話し菅谷氏に宿す。今日新聞来る。森文部大臣を暗殺せしは山口人西野文太郎氏なり。其主意は、森氏伊勢神廟に不敬の事ありしを惡み忠憤の余此挙に及びたと云ふ。中道の士にあらずと雖、方今将薄の世尚此の壯士ある、国の祥と云ふべきなり。

三月五日 快晴。早朝菅谷氏より帰る。終日在家、紀行を作る。

三月六日 快晴。終在家、紀行を作る。晩北御門

生来る。

三月七日 快晴。終日在家、紀行を作る。是日日本より新聞及び佐野直喜氏の信至る。今暫く渡清する能はずと云ふ。外に天津河原格二郎氏の書状到る。

三月八日 積陰、晩雪降る。晡時宮嶋氏来る。北御門氏亦た来り共に晚餐して去る。紀行を作り深更寝に就く。直隸の部を了りて山海関に至る。

三月九日 積雪。是日直隸省の紀事を終る。終日在家。

三月十日 陰天。下午荒賀氏と出でて公使府に至り、鄭氏を訪ひ借金返期の猶予を請ひ、横田に抵り小談。予は去りて山口氏を訪ふ。宮嶋氏亦来る。北御門氏本日西單牌楼にて大酔を極めしと云ふ。夜宮嶋氏と共に宿す。

三月十一日 陰天。朝宮嶋氏と山口氏を辞し宮嶋氏の寓に帰り、下午四喜班に至り戯を聴き、夜宮嶋氏に至り宿す。

三月十二日 好晴。朝帰寓す。下午出でて公使府に抵り、上海山内崑に一封及び永原壮二郎、鐘ヶ江、糸川諸子、及び小浜為五郎に一封を寄す。是日漢口荒尾、井深、井手、緒方、浅野の諸君より書状来る。荒尾、井深は三月中旬に帰国し、井手は四月下旬より安徽、山東を経て北京来ると云ふ。緒方は近々荊州の沙市へ赴く由。

三月十三日 陰。終日在家、地誌を編ず。晡時宮嶋子来る。

三月十四日 好天。下午公使府に至り源流考を返附し新聞及び弟光彦の書状を受取りて帰る。家弟は本年正月三重より帰国せりと云ふ。帰りて家弟に復するの書信を認め、林田道利、矢島篤政等の諸生に同く与ふ。外に野添氏の一封を出す。晩宮嶋氏来る。

三月十五日 好天。朝公使府に至り家信を出し、一統志錦州の部を借りて帰る。

三月十六日 好天。是日山内崑氏上海よりの信来る。書籍二箱を送りしと云ふ。外に糸川、奥村、永原、鐘ヶ江、藤森茂一郎氏の信来る。藤森は近々来滬せし者にて熊本済々黌の者なりと云ふ。朝北御門松二郎来り、終に宿す。是日芝罘白須氏に一封を寄せ、同地駐在の安原氏に永原

壮二郎子を托せん事を囑す外に、天津の松添洋行に一封を寄せ急に書葉箱を送らん事を促す。

三月十七日 好天。日曜日、朝荒賀氏と公館に至り横田を訪ひ、予は独り帰る。是日盛京迄の紀事を畢る。北御門子止りて晚餐し、夜帰る。

三月十八日 好天。晌午宮嶋氏を訪ひ、晡時帰寓す。

三月十九日 好天。朝荒賀君と天野恭氏を訪ひ、天津紀実一冊を借りて帰る。帰途公使館に至り新聞及び山内崑、鐘ヶ江等の書信を受取り来る。鐘ヶ江は五六日頃本地に来ると云ふ。又た山内より支店規則を送り来れり。

三月二十日 好天、和暖。下午荒賀子と天壇に遊ぶ。

三月二十一日 陰天、下午小雨。午前公館に至り直に帰る。

三月二十二日 晴天。下午出でて宮嶋氏を訪ひ、荒賀氏と三人出でて戲館に至り演戲を見る。相公の尤物甚だ多し。

三月二十三日 半晴。午前北御門子来る。下午宮嶋氏と共に行て戲を見る。技術絶佳、最も転倒及び揮劍の技に長ず、人をして驚かしむ。夜北子宿す。

二十四日 雪花粉飛。晌午宮嶋、吉田二子と徳広楼に至り四喜班の演戲を見る。暮時帰寓す。

三月二十五日 好天。夜出でて宮嶋氏を訪ひ、三更帰寓す。

三月二十六日 好天。朝荒賀子と出でて彰義門を出て西漢門に入りて帰る。紀行を草す。

三月二十七日 好天。早朝公館に至り天津松添洋行の書籍の送致を促す。書一封と東京井深、荒尾二氏へ一封を出す。荒尾子には急に我が家に金十五円を送らん事を托せり。是日盛京省の紀行を草し終る。

三月二十八日 好天。下午宮嶋氏と四喜班の戲を見る。夜宮嶋氏に至り宿す。雑事を暢談して終宵眠らず。

三月二十九日 好天。朝宮嶋氏より帰り、小午又た同氏を訪ひ共に公館に至り、横田氏を訪て中食し、下午宮嶋氏と徳広楼に至り四喜班の戲を聴き帰る。

三月三十日 好天。終日在家。暮時北御門氏来り

宿す。

三月三十一日 好天。朝上海樂善堂に送書し、天津より来た荷物を送らざる由を告げたり。下午荒賀氏と出でて天野を訪ふ、在らず帰る。山口外三来訪。晡時天津松添の信来る。書箱五個と葉箱二個本月二十七日水路より転送せりと云ふ。夜北御門子帰る。

四月初一日 晴。晌午宮嶋氏来り看戲を誘ふ、行かず。荒賀氏と共に天野を訪ひ、帰途菅谷五郎の□□□ねて帰る。夜宮嶋氏を訪ふ、在らず。是日熊本浅山知定氏に書を寄せ、家弟光彦身上の事を托し、且つ今後清国に遊ぶ者の覚悟とすべき事数則を申送れり。外に桜井謹純、秋山儀太郎、飯田勝雄の三友に一書を送る。

四月初二日 陰天。下午宮嶋氏と公館に赴き熊本浅山氏に寄するの書状を附郵し、帰りて四喜班の戲を聞く。夜宮嶋氏来り宿す。

四月三日 陰天。早朝北御門来る。是日家信あり云々を報ず。家信を得る毎に眉を閉じざるの時なし。是れ愁ふべく、亦た笑うべきなり。

四月四日 好天。朝宮嶋氏来訪。終日在家、天津聞見録を写す。夜宮嶋氏を訪ひ宿泊す。僅かに一睡せしのみ。

四月五日 好天。朝宮嶋氏より帰る。下午宮嶋と慶和園に赴き四喜班の戲を見る。恰雲の美魚転た人を悩殺せり。如此の美少年実には天下無双と謂ふべし。宮嶋と哈撻門を出で、山口外三を同仁医院に訪ひ宿す。

四月六日 朝宮嶋と山口氏を辞し、帰りて天津事跡を写し了り北京及び盛京の紀事を謄写し、晩之を終る。夜北御門来り宿す。

四月初七日 好天。日曜日、終日在家。是日熊本より新聞達す。聞く、天津の河原格二郎は帰国せりと。

四月初八日 好天。早朝公使館に抵り上海山内崑に与ふるの書を出す。会試失敗の事を報じ天津の荷物未だ到着せざる事を告げ、鄭氏よりの借銀七十弗を急に送致せん事を托せり。

四月初九日 好天。早朝公使館に至り漢口白井新太郎に送書し、銀五十乃至三十弗を送致せんことを囑せり。此日鄭氏の催促に従ひ上海山内に電報し、急に銀子の送付を促す。鄭氏に返す者

なればなり。北御門氏六条に至りて糧尽き援絶へしを聞く。即ち米一箱を送る。夜大清一統志直隸統部の抜粋を了る。

四月初十日 好天。下午宮嶋氏を訪て小談。去て公館に至り郵便を受取る。上海岸田吟香、山内崑二氏の信至る。夜荒賀氏と城壁外に散歩し、宮嶋を訪て、帰る。

四月十一日 雨天。朝上海樂善堂藤田捨二郎に与ふるの書を認む。蓋し山内崑は出遊の由にて藤田氏其後を□けたるなり。又た漢口白井氏に送書し、鄭氏の借銀七十弗を送らんことを促せり。又た上海在留の熊本人七名に致書し今後の目的を略述して諸氏の注意を牽けり。北御門子来る。

四月十二日 好天。終日在家。暮時山口外三来り小談□去る。夜宮嶋氏来り宿す。

四月十三日 陰天。朝吉田清揚氏と京を距る二十五里の芦溝橋に至り、地図を作りて帰る。時に四時半也。帰りて地図を清写す。

四月十四日 日曜日。朝荒賀氏と山口外三を訪ふ。宮嶋氏在焉。晌午荒君と共に帰寓す。下午鄭、塩田孝の二氏来る。

四月十五日 微陰。晌午永定門外に散歩す。昨日同門内の崔姓煙舗に薬品の寄售を約せしを以て行て見たるなり。終日在家。天津積慶堂に寄するの一封を認む。但し該堂より発せし書薬七箱、二十日を経るも到着せざるを以て再び之を照会せしなり。又た天津野間生へ一書を寄せ、天津德州間運河の船価を問い合せ報道せん事を托す。

四月十六日 好天。朝公館に至り天津松添洋行に寄するの書を附郵し帰る。下午宮嶋氏来り、山口氏亦た来る。

四月十七日 陰天。下午荒賀氏と六条胡同に至り天野、北御門二氏を訪ひ天野氏に晚餐し、夜河原氏に至り製図法を問ひ、北御門に宿す。

四月十八日 好天。早起六条より帰る。終日在家。下午塩田孝氏来る。晩宮嶋、北御門両氏亦来り宿す。

四月十九日 好天。終日在家、日記を作り、直隸省第二獲鹿迄を終はる。宮嶋は下午帰り、北御門氏又宿す。

四月二十日 好天。是日漢口白井氏及び井手氏の信至る。井手は四月二日の夜漢口を發せりと云ふ。浦、藤嶋は三月漢口を發して伊犁に向へり。今度実地視察の旅と為せりと云ふ。四川高橋榮吉の信至る。昨年清十月間重慶に開店し、成都、涪州に托売所を置けりと云ふ。又た上海奥村金の信来る。中西正樹も一回荒尾氏等と上海に来れりと云ふ。山内、鐘ヶ江等は上海を發し内地に入り、新來の高田寛太郎は大坂新聞社の通信を受合ひ漢口に上り、土屋某は三井物産会社に入るの予定なりと云ふ。下午山口外三来る。看戲を誘はる。荒賀、吉田の諸子と小栄椿の戲を見る。宮嶋氏亦来る。此日上海奥村に復するの書を認む。外に永原、糸川二子に致書し、荒尾精氏に寄するの転書を与へ、荒氏が上海に帰着一日面交を托す。蓋し二子の身を托するなり。此日直隸省第二の紀事を終る。

四月二十一日 好天。荒賀氏と公館に抵り、中嶋氏を訪ひ一統志山西部を借り、宮嶋氏と共に帰り、吉田子を誘て広徳樓に至り四喜班の戲を見る。夜宮嶋氏宿す。夜蒙古遊牧の事を思量して深更に至り、心私かに本年九月該地に赴き実況を視察し、直に適當の地を選び開墾牧畜に着手する事に決す。晡時雷雨。

四月二十二日 好天。朝永定門外に散歩す。下午公館に至り公信の到るを待つ。晡時去て山口外三を訪ふ、在らず、直に帰る。

四月二十三日 好天。是日天津より發せし書箱五個着す。余哈嚕門税局へ赴き受取り□□□□□□□□に至り天津松添洋行に寄するの信を出す。荷物送致の手續及び税金、船価等天津に払ひし金額の報明を催したり。薬箱二個は今尚ほ通州に在りて到らず。晡時宮嶋氏来る、夜宿す。是日より店伴汪姓帰來。上海岸田吟香の信到る。北京薬店の景況を報ずる事を嘱す。

四月二十四日 朝來、新來の書籍を査して暮に至る。夜荒尾精氏に東京に寄するの書を作る。北部計略の爲め蒙古は牧畜場を開く事を照量し、且つ方今資本乏しき時可成要地を選んで手を着くべき事と人物を練る事を告げ、三更写し了る。

四月二十五日 好天。終日家に在り。

四月二十六日 風大。下午公使館に至り東京荒尾精に与ふるの書状を附郵し、帰途骨董商林忠正氏を李飯館に誘ひ談話。時を移して帰る。

四月二十七日 好天。是日上海楽善堂藤田捨次郎氏の信到る。七里恭支店調査委員として近々来京すと云ふ。是日晋記書莊に托し上海楽善堂に送書し、三場一貫大成の事を申送れり。夜北御門氏来り宿す。

四月二十八日 好天。日曜日。終日在家。

四月二十九日 好天。下午林忠正を訪ひ洋銀七十弗を借る。同氏が俄国漫遊中の経歴を叩き、暮時去て公館に至り菅谷五郎を訪ひ、酒を飲み終に宿す。

四月三十日 朝雨。鄭永昌氏を訪ひ銀七十弗を返却して帰る。下午通州三聚永の回信到り、通州にて税金十九兩二錢を払へりと云ふ。尚ほ哈噠門にて七兩上下を払はざる可からずと云ふ。急に送書して暫く送致を止め法を設て受取らんとす。林忠正氏を訪ひ嘱を受けし広治平略、八大家、文章軌範等の書を渡し、時事を暢談して帰る。同氏は予初て見るの時一俗商と為す。而して愈談する愈久ふして其議論の純正にして博く内外の事情に通じ卓見あるを悦ぶ。暮時帰寓す。

五月初一日 好天。下午公使館に至り、天津松添に送書し荷物手数の詳報を促し、且つ七里恭に書を与へて、其の北京に来るの途次通州三聚永に立寄り二個の薬箱を受取り来らん事を托す。又た在京岸田吟香氏に送書し売買の景況を報じ、北京中にて好銷の薬品十一種を買送すべきを報ず。暮時宮嶋氏来る。是日天津野間良太郎の信到る。余が曾て天津德州間の船価運賃等の間に答へし者なり。

五月初二日 好天。下午荒子と宮嶋を訪ひ小談。去て公使府へ至る。漢口中野二郎の信来る。曾て催促せし銀子の本月下旬にあらざれば送る能はずと云ふ。帰りて中野二郎に寄するの信を認め明日附郵せんとす。外に四川高橋榮吉に寄するの書を作り漢口より転致を請ふ。

五月初三日 雨天。終日在家。朝北御門子来り、宿夜。

五月四日 陰天。下午公館に至り菅谷氏を訪ひ小

談、帰寓す。是日東京電報社武田賢三に与ふるの書を認む。東京各新聞社の通信を周旋し呉れん事を托す。

五月五日 天。日曜日。終日在家。是日筑後久留米鹿野淳二、江頭鴻、樋口勇夫の三氏に寄するの書を認む。蓋し鐘ヶ江源二郎近々着京の筈に付き、同人の学資三四十円を送致せん事を告ぐ。

五月六日 好天。下午上海楽善堂の七里恭来着す。糸川、深水二生の信を携へ来る。此日又た芝罘の白須直の信到る。曾て嘱托せし永原壮二郎身上の件に付き謝絶し来れり。夜七里、吉田、荒三氏と宮嶋を訪ひ二更帰寓。

五月七日 陰天。下午荒賀氏と公館に至り、菅谷、横田二氏を訪ふ。帰途林忠正を叩く、將に他出せんとす。直に帰る。是朝北御門氏来る。

五月八日 好天。下午吉田、七里二子と公使館に至り横田、菅谷二子を訪ひ、帰途林忠正を叩き借銀五十五文（本と七十元を借る。内十五元は同氏買書の金を差引けり）は上海楽善堂より受取らん事を請ふ。晡時林等と出て積善堂に來り、又た出でて骨董店に赴き、暮時別れ帰る。晚餐後北御門氏辞帰す。

五月九日 好天。下午公館へ赴き横田、菅谷二子を訪ひ、帰途林忠正を訪ふ、在らず。直に帰る。是日久留米鹿野淳二、江頭鴻、樋口勇夫の三子に送書し鐘ヶ江の学資を送らん事を促す。外に関常吉及び該地の同志会員諸氏に一封を寄す。

五月十日 終日在家。山東、直隸の図を作る。

五月十一日 好天。朝塩田公使の訃至る。今朝七時死去せりと云ふ。下午荒賀、七里の二氏と公館に至り吊す。

五月十二日 好天。朝北御門氏来る。午前林忠正を訪ひ、談時を移して帰る。是日詩一首を作る。夜荒賀氏と城壁外に散歩す。

五月十三日 好天。終日在家。

五月十四日 好天。下午公館に至り横田三郎を訪ひ小談、帰寓。上海沈文藻、川島浪速に寄するの信を認む。近作の古詩一首を二子に寄す。

五月十五日 陰。下午公館に至り塩田孝、菅谷二氏を訪ひ、岸田吟香氏に寄するの信を菅谷の帰国に托す。燕店の図面一紙を封送せり。井手理

七郎氏及び家弟の信来る。是日柴田常三郎、村松岩彦、守田愿二氏に寄するの信を認む。

五月十六日 好天。午前公館に至り菅谷五郎、塩田孝太郎二氏を訪ひ、別を序す。二子は明日を以て帰国する者なり。帰途新来の日本医生と共に寓に帰る。下午鐘ヶ江源二郎陸路上海より到着す。宮嶋子送り来る。七里氏と共に鐘ヶ江を送りて上車六条胡同に至る。晚北御門、七里、鐘ヶ江来、飲む。終に宿す。

五月十七日 好天。朝七里子と六条を辞し、途山口外三を訪ふ、在らず、直に帰る。是日塩田公使の棺を日本に送る護送の日本人不体裁の事甚だ多く、棺のみを先に送り彼等の飯店に抵□□□□□□無かりし由、途中一洋人何人の棺かと問われたる由。

五月十八日 好天。朝鐘ヶ江君来る。石見某来る。共に漆店に至り漆を買ひ、帰りて中餐す。宮嶋氏来る。共に出て四喜班の戯を見る。夜宮氏宿す。

五月十九日 好天。朝漢口白井新太郎、前田彪、片山敏彦の三子に寄するの信を認む。不日宮嶋氏の南行に托せんとす。下午公使館に至り中嶋雄氏を訪ひ、鐘ヶ江生を六条旧公館に寓せしむる事を談じ、直に帰寓す。七里、荒賀、宮嶋の三子と広徳楼に至り四喜班の戯を見る。

五月二十日 好天。終日在家。夜北御門氏来宿す。

五月二十一日 小雨。下午公館へ至り郵便を受取り帰る。暮時北御門子と出でて六条胡同に至り宿す。夜天津の陸軍大尉豫鉄雄に一封を寄せ、同氏が海州を経て朝鮮を貫き帰朝するを以て告別し、外に海軍少佐世良田亮に一封を寄す。

五月二十二日 好天。朝七里恭、宮嶋大八二氏来る。牛を割き酒を酌む。下午鐘ヶ江生と出で山口外三を訪ふ、在らず。待つ少時にして帰寓す。

五月二十三日 好天。朝出でて宮嶋氏を訪ひ中餐し、去りて林忠正を訪ひ同氏を送るの詩一章を送り、帰りて又た宮嶋氏を訪ひ、七里氏と三人出でて、四喜班の戯を見て帰る。漢口より井手三郎氏来着し居れり。互に久闊を叙し快殊に甚し。安慶より四十九日を経て着せりと云ふ。

五月二十四日 好天。朝吉田清揚氏の南帰を送らんとす。俄かに明日に延せり。熊本原田愿、津野一雄二子に送書し、舍第身上の事を托す。外に沈文藻、河嶋浪速、藤田捨二郎、牧五郎、二口義久の数氏に寄するの書を出す。共に吉田氏の上海に帰るに托するなり。又た同氏の帰国を送るの詩一章を送る。山口外三氏来訪。夜北御門氏来宿す。

五月二十五日 好天。朝出でて吉田清揚氏を送り、交民巷に至る。下午井手三郎、北御門と出で上車六条胡同に至り晚餐し、驢に騎して帰寓す。

二十六日 好天。朝宮嶋氏を訪ひ、下午井手、荒賀、七里三氏と出でて六条に至る。途中井手と山口外三を訪ひ小談、去りて朝陽門を出で牛肉を求む、得ず。城壁に上りて一望し、下りて六条胡同に至り、家鶏を割て飲む。居する者は河原彦太郎（本名石川陸軍中尉）、井手三郎、荒賀直順、北御門、七里、鐘ヶ江、山口、及び予なり。深更寝に就く。是日河原氏の代理木村某（軍人）来着。東京荒尾義行氏の書及び前田彪、白須直三氏の書を携へ送らる。

五月二十七日 好天。朝六条より帰り、宮嶋氏に至る。今日出発漢口に向ふと云ふ。七里恭氏も亦た事を以て天津に至る。二氏を送りて帰る。漢口白井新太郎、前田彪、片山敏彦、中野初二郎四氏に与ふるの書を宮嶋氏に托す。

五月二十八日 好天。下午井手、荒賀二氏と出で戯を看んとす、無し。去て公使館に至り、中島を訪ひ小談。又た今立書記官を訪ふ、談話。時を移して帰る。是日漢口片山敏彦の書信到る。

五月二十九日 好天。下午井手三郎、荒賀二氏と広徳楼に至り四喜班の戯を見る。夜北御門氏来る。

五月三十日 好天。下午騎驢陌六条胡同に至り河原彦太郎氏を訪ひ、同氏が帰国を送るの詩一絶を贈る。曰く、正是黄梅五月天、東阡南陌望茫然、燕門策馬君何去、遼水韓雲道八千。横田三郎来る。今日天津より帰来せりと云ふ。同人の話に、嚮きに荒賀と共に帰国せし中西正樹なる者同志三人と天津へ来り、予の下津を待つ事を議せんと。横田と共に上車公使館に帰り、中西生の書信を閲す。荒尾精氏東京よりの信も同封

にて来れり。荒氏が東京にて計画の事大に朝野の賛成を得て都合甚だ宜しと云ふ。小談、去りて山口外三を訪ひ晩食して、共に公使府に至る。日暮帰寓せんとす。城門閉じて出づるを得ず。雨を衝又た公使館に帰り横田の処に宿す。

五月三十一日 好天。朝公使館より帰る。下午井手、荒賀二氏と出て、公館へ至り横田三郎を訪ひ、去て山口外三に至り銀二十余弗を借らんとす、得ず。已むを得ず横田に就き銀十弗を借り。晡時井手と六条胡同に至り河原彦太郎を訪ひ、山口、北御門、横田の諸氏と晚餐の饗を受く。終に河原氏に宿す。

六月初一日 好天。是日三成一貫大成四十分を長順普書房に退回す。朝河原氏に辞別し井手と帰寓。結束して道に上る。前門外より騎驢、崇文門に至り沙窩門を出で驢を雇て張家湾に向ふ。六十里の驢錢を十三錢に定む。行く二十五里千家園を過ぎ、三十里張家湾へ下り、更に驢を雇て馬頭に向ふ。途中河原亮太郎の天津に下るに会す。子は今後朝鮮海州を経て帰朝する者也。三十里馬頭を過ぎ、又た十八里にして安平に至り客店に投宿す。宿料飯錢共に十二錢五厘（蒜肉湯。兩碗面。半斤□。二兩酒）。行程百〇八里

六月二日 晴天。朝安平を發し、行く八里にして驢を雇て楊村に向ふ。十里河西務を過ぐ。兵三亮子を屯す。又行く三十五里奏村に至る。初め驢を雇ふの時楊村に至るの驢錢二十一錢五厘を給す。趕驟の途中より来らず。驢足為めに遅く殆んど行くべからず。因て驢を下り自ら之を牽て蔡村に至り店へ投じて打尖。驢を換て楊村へ向ふ。二十五里にして達す。雲字馬隊一營を屯す。是より歩行三十里にして浦江に達し投店す。行程百里。

六月三日 朝馬車に賃して西沽に向ふ。三十里の車錢を二十二錢五厘（二人共に乗れば十錢許）とす。八時西沽に達す。天津城外を繞廻して道台衙門側にて理髮し、紫竹林の三井行に達し佐々木に面す。直に去て領事館に至り野間芳太郎を訪ふ。中西正樹、仲（本名小沢）中尉、望月某に面す。此の三氏は今度本地に在り薬店を開く者なり。吉田清揚氏も未だ店中に滞在中な

り。諸君と茶館に至る。晩食後吉田と出でて三井へ至り、佐々木を訪ふ。小笠原揆一亦在焉、小談帰寓。

六月四日 早起中西生と市街を散歩し事業上の諸事を商量す。具さに荒尾精氏が東京に在りて計画の実況を聞くを得たり。其の苦心經營の状態、意を快ふす。中西は元と外務留學生を以て北京に駐在せしが、去る二十年脱走して内部の十四省を跋涉し、或は乞丐となり徭夫となり、辛酸具さに嘗め来りし人にて、又た稀有の快人なり。暮時仲、中西二氏と出で、途中中西と共に市外へ逍遙し事業の事を暢談す。夜中西と分れ予は公館に至り野間生を訪ふ。上原、中西等亦来る。後ち出て世良田海軍少佐を訪ふ。仲、吉田の二氏在り。世良田と時事を談じ、領事館に至り宿す。

六月五日 好天。寒暖計九十八度。朝武斎号に至り小笠原氏を訪ひ、残書売り捌きの事を托し直に帰寓。佐々友房、岡村正夫、井芹経平、岡本源次諸君に寄するの転書を認む。小笠原の帰国に托する也。外に荒尾精氏の一封を認め、天津にて中西等に会せし事を報ず。下午吉田氏と林忠正氏を訪ふ、小談。去て公館に至り野間、瀬川等を訪ひ、暮時帰寓す。夜七里、中西二氏と外廓に散歩し月を賞す。

六月六日 好天。午前出でて吉田、林忠正諸子の南還を送りて通州輪船に至る。帰りて又た本田医生の帰国を送る。同氏は仲氏と共に来りし者にて、微恙を以て保養の為め帰国する者なり。帰途中西等と公館に至り野間を訪ひ、後ち七里氏と松添洋行に至り、預け置きし書籍を受取り、代価五折にて武斎号に托売す。晚中西と事業上の事を談じ、予は去て佐々木を訪ひ別を叙し、去て世良田氏を訪。豫、仲二君在焉。去て領事館に至り野間を訪ふ、在らず直に帰る。荒賀氏の信北京より到る。公使郵便代云々を報じ来る。夜回寓、仲、中西諸子と粗酒粗肴、別を話す。歓談四更に至りて寝に就く。

六月七日 朝七里氏と諸氏に別れ太昌客店を發す。中西、上原送り来る。西沽より馬車に乘じ浦口に至り朝餐し、又た馬車を雇て楊村に至る。又た馬車を求て之に乘じ、蔡村へ至り洪徳客店

に投宿す。宿料飯錢共に二人十八錢（菜は肉湯、豆腐湯）

六月八日 驢を雇て河西務に至り中餐す。是より又た馬車に換座し、安平を経て馬頭に至る。三十六里、車錢二十二錢五厘。馬頭の客店に投じて小休止、驢を雇て張家灣に至り、歩走十余里高村に至り小店に投宿す。宿料飯錢共一人三錢五厘。

六月九日 早朝高村を發し干家園に至り、驢を雇ひ北京に至る。沙富門内にて馬車に乗り、積善堂に帰る。時に九点鐘時也。午飯後井手、七里二氏と出でて、公使府に至り横田を訪ひ、去て六条胡同に至り、木村中尉、及び山口外三を訪ふ。夜諸子と山口氏に宿す。是日日本より電音あり、北京公使は大島圭介氏に定まりしと云ふ。永原壯二郎及び家弟光彦の信来り居れり。荒尾氏より金十五円を予の家に送りしと云ふ。曾て囑する所あればなり。

六月十日 朝六条より帰る途中公館に至り横田を訪ひ、直に帰る。

六月十一日 雨天。終日在家。天津中西、仲、瀨川、野間、上原諸氏に寄するの書を認む。

六月十二日 陰天。山口外三来訪。下午井手氏と公館に至り喬文彬を訪ふ、在らず。去て横田を訪ひ小談、帰寓。

六月十三日 晴。下午井手氏と出でて六条胡同に至り、北御門を訪ひ銀二弗を給し、止て晚餐し終に宿す。天野を訪ふ。

六月十四日 雨天。朝六条より帰る。夜熊本実業部財津志満記氏に寄するの書を認め、寧波店譲り受けの事を商量す。為に上海糸川、永原等に一封を与ふ。

六月十五日 好天。終日在家。晡時北御門来る。晩食後井手、荒賀二氏と出でて六条胡同に至り宿す。木村中尉を訪ふ。

六月十六日 好天。上午諸氏と六条を辞して帰る。是日六条旧公館に存在せし天津武斎号の扇子八百本を喬文彬の手に引渡し、一本五仙平均にて托売す。武斎号の囑によるなり。

六月十七日 好天。終日在家。

六月十八日 好天。

六月十九日 好天。下午諸氏と看戲に赴かんとす、

無し。共に出でて、公館に至り横田を訪ひ小談。樋口忠一の上海より来るを聞き、井手氏赴き叩く。外出して在らず。去て六条胡同に至り、天野恭太郎を訪ふ。晩盒子の餐を受く。夜山口氏に宿す。夜雨大に至る。熱氣一掃。

六月二十日 雨天。夜又た山口氏に宿す。

六月二十一日 微雨。朝井手と帰る。上海樂善堂吉田清揚、藤田捨二郎の信及び領事館書記生二口美久氏の信至る。樋口氏の帶し来る処、本店より烏龍葉及び戒煙丸を送り来けり。下午漢口中野二郎氏の送金三十弗及び同地浅野氏の報告書到る。荒尾氏東京にての計画事務を詳報し来る。又た天津中西の書状来る。店用を以て一寸帰国せりと云ふ。外に吉田清揚氏の信来る。今度漢口の報告によれば、荒尾の計画は有栖川殿下及び各大臣の賛成を得て非常の都合なりと云ふ。夜諸子と分韻詩を賦す。

六月二十二日 雨天。下午公館に至り郵便代十四弗を払い直に帰る。下午七里、井手、荒賀の三氏と四喜班の戲を見る。北御門来り暮時帰る。

六月二十三日 陰天。下午井手氏と琉璃廠に散歩す。

六月二十四日 半晴。午前横田三郎氏の借銀催促状到る。下午直に銀十弗を返却す。

六月二十五日 是日天津仲、瀨川、野間、上原諸子に致書す。

六月二十六日 下午井手氏と公館に至り、横田を訪ひ、日本菓子を吃し、喬文彬を訪て通州の藥箱受取を托し、去て六条に至り北御門等を訪ひ、終に宿す。

六月二十七日 好天。朝六条より帰る。是日上海吉田清揚氏に復書し戒煙丸烏龍葉受取し事を報じ、別に山内崑、糸川直元、永原壯二郎諸子に一封を寄す。是日天津武斎号小笠原氏より預り有りし漆器、喬文彬宅に引き渡す。

六月二十八日 好天。下午井手氏と公使館に至り、横田を訪ふ。止て酒飯す。夜終に宿す。是日喬文彬より銀二十両を借る事を約す。

六月二十九日 好晴。早朝公館より帰る。下午出でて喬文彬を訪て帰る。

六月三十日 好天。終日在家。

七月初一日 陰天、暮時雨至る。終日在家。昨年

本日日本に着く。
七月初二日 好天。終日家に在り。
七月初三日 午前公館へ至り喬を訪ひ、去て横田に至り小談、帰寓。
七月四日 陰天。午前井手、七里二君と陶然亭に遊ぶ。結構□麗□禦為拭。遊玩移時帰。下午井手君と公館に至り、横田及び書記官今立を訪ふ。晡時帰寓。是日漢口片山敏彦諸子の信到る。
七月五日 陰天。下午井手氏と永定門外に遊ぶ。帰途雷雨大に至り衣褌皆湿ふ。
七月六日 好天。終日在家。
七月七日 好天。熱気如焼。下午井手氏と永定門外に釣る。一尾を得ず。帰て井手と公館に至り横田を訪ひ、帰る。夜荒、井、北三子と天壇に納涼す。
七月八日 好天。終日在家。
七月九日 雨天。井手と公館に至る。前門より上車。
七月十日 雨天。
七月十一日
七月十二日 降雨。
七月十三日 好天。此日北御門来る。天津仲正一及び吉田清揚二氏の書を携へ来る。
七月十四日 好天。下午井手氏と公館に至り横田を訪ふ。小談帰寓す。
七月十五日 陰天。終日在家。
七月十六日 陰天。終日在家。是日東京村松岩彦、大阪林田道利、上海吉田清揚三氏の信到る。林田は去三月同子等へ青年輩今後の目的上に付て説き示せし予の簡略なる書状を経世評論社主の池辺吉太郎へ示せし処、社論に符合せりとて大に賛成を表し、雑誌上に登録せりと云ふ。士の一言一行実に慎まざるべからず。而して予の書中郷党の青年を警醒する為め東洋の大勢を説き清国の内情を少しく報じ、之に処する方法をも其一端を挙げ置きしに、如此輕卒に他人に示し機事を洩すの恐なき能はず。是れ亦た予が粗忽の過ちなり。夜井手と公館に至り横田氏に宿す。夜北帰る。
七月十七日 朝大雨、頃刻即霽。横田にて朝餐し、小午帰寓。

七月十八日 好天。吃餐後井手と六条胡同に至る。夜山口氏に宿す。是日天津佐々木の金催促状来る。
七月十九日 好天。終日六条に在り。朝一封を鐘ヶ江氏に托し喬宅へ送り、白米一包を借りて北御門氏等に与ふ。同氏等は糧無きが為め二日絶食せりと云ふ。是甚だ可笑也。
七月二十日 朝雨。六条滞在。夜山口氏に宿す。
七月二十一日 雨。朝井手と六条を辞し、跣足にて朝陽門を出で城外を繞りて帰寓す。糸川直元氏の書状来り居れり。下午天津武斎号に荷物を喬姓に引渡せし事と喬の受取を添へて一封を認め、別に同封にて佐々木祐司に一封を認め武斎号の売高金より引取るべしと言へり。是日福州の哥老会員鈕叔平に与ふるの書を作る。
七月二十二日 晴、夜雨。終日在家。下午北氏来。
七月二十三日 陰天。終日在家。
七月二十四日 陰天。下午井手と公館に至り横田、田中を訪ひ小談、帰寓。
七月二十五日 陰天。是日天津武斎号に致書し、該号より預りの物貨を六条の喬文彬に引渡せし事を報じ、併せて喬よりの受取証を送る。又た三井の佐々木祐司に一封を寄せ前借の銀を武斎号の売高金より受取り呉る様に照会す。
七月二十六日 天。是日漢口白井、中野、宮嶋等に送書す。
七月二十七日 半晴。下午井手氏と公館に至り横田を訪ふ。中島氏、予に語て曰く、過日喬文彬来り、積善堂中に余り日本人多き故近隣の者は外人の店たる事を気付きし由にて、甚だ不都合なれば少し人数を減じては如何と。予亦た之を然りとす。晡時帰る。
七月二十八日 雨天。終日在家。是日北御門氏来る。今後同氏の来店を謝絶す。其洋装にて近隣の怪しみを惹けばなり。
七月二十九日 好天。熱甚し。下午井手と六条胡同に至り宿す。是日より荒賀、七里の二君六条胡同に移転す。
七月三十日 好天。朝井手と帰る。晩七里来り。北御門と共に帰去す。
八月初一日 陰天。是日漢口中野、白井、宮嶋諸

氏へ与ふる信、及び上海藤田、糸川、奥村等に与ふる者、及び天津仲、中西、武斎号に与ふる信を發す。藤田に回春丸及び小説、画譜の類を送らん事を托し、且つ郷試に付ての計画を報じたり。中西には王姓の店夥を天津に遣はす事を照会したり。是日下午公信着す。東京河原角二郎の信到る。

八月初二日 好天。鐘ヶ江生来る。同氏の学資十七円を預り、中十円を暫借す。上海領事館二口美久氏に与ふる信を認め、旧作七古二首を録し、鐘ヶ江生に托す。是日福州領事上野專一に与ふ書を認め、森和喜にも一封を寄せ、福州の哥老会員鈕叔平に与ふるの書を森に托し転致せしむ。鈕には今後氣脈を通じて事を挙げ、亜細亜の大勢を作興せん事を謀る。是日時報を見るに福建順昌県に江西の匪徒暴起し県城を屠り県官を擒にし、泉州府属の各地をも蹂躪するの勢ありて、其勢一万人、九龍山の会匪も相応じたりと云ふ。此事も鈕氏に問ひ合せたり。

八月三日 好天。終日在家。琉璃廠西河沿一帶書舗四五戸に東板書を寄售す。

八月四日 好天。七里子来る。下午井手、七里二子と四喜班の戲を聴く。

八月五日 好天。終日在家。下午山口外三来る。西郷南洲翁の肖像を携へ来る。荒賀子の予に贈る所なり。是夕井手氏、山口と共に去る。

八月六日 好。晌午荒賀、七里二子来り、□戲を誘ふ。四喜班の戲無きを以て止む。暮時荒賀去り、七里子留る。井手と交代せし者なり。夜七里子と西瓜を食ふ。

八月七日 晴天、夜暴雨。下午公使館に至り横田、田中を訪ひ、晡時帰寓す。

八月八日 半晴。終日在家。

八月九日 晴天。下午七里、荒賀二氏と四喜の戲を見る。夜荒賀氏宿す。

八月十日 晴天。終日在家。

八月十一日 雨天。終日在家。是日山西省の紀行を終る。

八月十二日 雨天。終日在家。

八月十三日 晴天。下午七里氏と出て戲を看んとす、無し。

八月十四日 晴天。終日在家。暮時井手氏来り七

里と交替す。晡時小雨。

八月十五日 晴。終日在家。

八月十六日 晴。下午井手と出でて公館に至り、横田を訪ひ晚餐し終に宿す。夜大に道を論ず。是日上海糸川直元の書状来る。予が嚮きに同氏の身上を上海なる陸軍大尉牧野留五郎氏に囑托せしが、氏の承諾にて即日同氏の宅に引移りし旨を報ぜり。

八月十七日 好天。公館にて朝食し、井手、田中善之助二子と積善堂に帰る。昨夜風を招き身氣少しく不舒。

八月十八日 好天。日曜日。朝井手と六条胡同に至り、天野氏にて昼餐の嚮を受け、夜木村少尉を訪て談じ、荒賀氏に宿す。是日天津仲氏の信到る。中西は日本に帰りし後、今に帰らず。今度仁川、浦塩等の地を巡廻し、冬頃に天津に来るべしと云ふ。

八月十九日 晴。晡時六条より帰り、途山口氏を訪ひ麵を食ひ、暮時帰寓。天津仲氏に復する書を認む。其の商業上の間に答へし者なり。

八月二十日 陰天。終日在家。不舒服。

八月二十一日 雨天。終日在家。風邪全く去らず。

八月二十二日 好天。近日秋氣頻りに催す。終日在家。

八月二十三日 好天。朝七里氏来り、井手と交替す。此日熊本浅山知定、高見克、済々黌諸君、及び宮嶋義恭氏に与ふる書状を認む。宮嶋氏には糸川直元身上の事を言い遣はせり。是日芝罘駐在の海軍中尉安原金次氏より書生一名周旋致し呉る様依頼し来る。又た天津の海軍少佐世良田氏よりも右一件を囑し来れり。四川高橋榮吉の信漢口より来る。近日商用の爲め下漢せりと云ふ。天津世良田少佐及び芝罘安原氏へ書生一名、即ち永原壮二郎氏を以て応ず。白須にも送書し、永原身上の事を托せり。予昨年熊本を出づる時永原、糸川二氏身上の事を受合ひ来りしが、近頃初て其の義務を終え重負を解くが如し。

八月二十四日 好天。終日在家。

八月二十五日 好天。是日漢口高橋榮吉、白井新太郎二氏に寄するの信を認む。高橋生には今後

我党の取て以て進むべき事業の目的方針を論じ、先づ不平党を籠絡して我用と為すべき事を説き、哥老会員鈕叔平に与へし文章をも併せ送致せり。白井には本地商業の事を報じたり。是日下午より汪姓と共に書を携て崇文門外に至り、路側に攤排して之を売る。日本にて言はば最下等の商人あらざれば之を為さず。心竊かに之を笑う。噫、大丈夫、或は時に乞丐となり、僕隸となり、或は貧書生となり、或は賓客となり、或は小官となり、或は商人となり、或は廊廟の器となり、或は牢内に雄視するの豪傑となり、或は仁人君子となる。時勢に随て浮沈出没常なきが如しと雖、一片の誠心は万古を貫て変ぜざる者なり、噫。午時井手来る。

八月二十六日 好天。是日七里氏崇文門に至り売書。予終日在家。

八月二十七日 好天。早朝汪緝甫と共に書を負て店を出で、前門外の飯店にて朝食し、去て崇文門外に至り攤を排し書を売る。結果甚だ好く、終日約そ十六円の貨を売けり。夜帰店。

八月二十八日 好天。朝七里氏、汪姓と崇文門の攤に至る。是日予店伴の心得べき事を書し王姓に示す。彼れ佩服感動の状あり。

八月二十九日 好天。朝汪と崇文門の攤に至る。夜帰る。井手来り居れり。是日宮嶋大八、漢口よりの信至る。

八月三十日 好天。朝井手氏崇文門の攤に至る。是日熊本への信及び上海樂善堂藤田捨二郎へ一封を送る。晌午出でて公使館に至り横田を訪ひ、天津武斎号に償還すべき雜貨代二十円七拾錢を横田に托し転送す。横田氏に吃飯し、四時上車六条胡同に抵り、天野氏を訪ひ晚餐の饗を受く。

八月三十一日 朝雨。六条滞在、木村中尉を訪ふ。是日諸子と八達嶺の遊を約す。夜木村氏に抵り飲む。天野を訪て談話。深更に至り北御門氏に帰り宿す。

九月初一日 好天。詰朝六条より帰る。井手氏崇文門の攤に至る。予鐘ヶ江源二北遊を送るの古詩一篇を作る。

九月初二日 好天。下午井手氏と公使館に至り横田を訪ひ、去て山口外三を叩き小談、帰る。此

二三日間左手疼痛を覚ふ。晚餐後七里氏と出でて六条胡同に至り諸子を訪ひ、終に宿す。

九月三日 好天。晌午井手氏と共に帰る。下午山口外三来訪。

九月四日 陰天。晌午荒賀、七里二氏来る。

九月五日 好天。午前三時半結束。井手三郎氏と積善堂を発し、六条胡同に至り同行の諸子を促して発す。此行北の方居庸関より八達嶺に至り、長城を一覧し、転じて明十三陵に遊ばんとす。同行は木村陸軍中尉、荒賀直順、及び七里恭、鐘ヶ江源二郎の六氏とす。蓋し鐘ヶ江、七里の両氏は二ヶ月の予定を以て張家江、宣化、大同、帰化城、克楚等の地に遊ぶ者なり。京城の安定門を出で黃寺の傍を過ぎ方を西北に取り、少しく左折して徳勝門外の大道に出で、二老庄の小店に投じて小休し、清河、沙河の二駅を過ぎ、上念駅に至り宿す。此間沿道の景頗る好し。行程六七十里、夜粟を炊き春菜を茹て晚餐に充つ。同行六人の多きありて甚だ多興。傍晚微雨。

九月六日 好天。詰朝店を発す。店人錢を貪求して休まず。与へずして去る。村人数名追跟し来り強請して退かず。之に与へて去る。七間房を経て南口に達す。之を西山に入るの南口とす。駅城は山口に位し、形勢堅固、南方を制御するの力に富めり。店に投じて小休。之より両側山峰屏列碧孔。其間を流れし風色佳絶、右側沿道の一山最も秀媚にして山容奇古嵐翠欲滴。居庸関を過ぐ、人煙客寥落、此处長城あり。両側の山峰に横直す。明代の建築に係わる勢形雄壮、孔道の地点なり。行く十余里にして路傍大石あり、仙枕の二字を題す。石上詩二三首を刻す。又行く少許にして彈翠峽とす。路左の山腹小廟あり。絶壁を開て之を造る、甚だ雅致あり。嶮絶なる石磴を攀て登る。邦人及び洋人の名を題する者甚だ多し。予輩亦た名を題して下る。進んで八達嶺に達す。嶺は南北孔道の要点にして、形勢の雄推して第一とす。長城は左右の山嶺に亘り蜿々として長蛇の如し。長城に就て龍山の絶頂に上る。甚だ疲労を極む。此处南は遙に平原を望み、北は広大なる曠原あり、城高さ二十四尺、壁上幅十四尺余、長さ一尺二寸、厚さ四寸余の磚を以て之を築く。壁の上面は一尺二寸

平方の瓦を布く。大抵百間毎に方形の哨台あり。每一間毎に砲窓を穿ち、其間又た小銃窓を開けり。明代の修繕に係わる。頂上放眸時を移す。亦た近頃壯観なる三舗□□□宿す。鐘ヶ江、七里二氏とは八達嶺の頂上に分袂し南北へ分れたり。

九月七日 好天。早朝三舗を発し旧路を取りて南口に帰る。途中洋人四人の驢に騎して八達嶺に遊ぶ者に逢ふ。南口の店に投じて中餐し、昌平州に至り、東門を出でて十三陵に向ふ。相距る二十余里。蓋し南口より昌平に出で十三陵に遊ぶと甚だ迂遠にして、南口より直に十三陵へ出ずるを順便とす。長陵に至る。天暮に近きを以て陵下の胡老の客店に投ず。夜雨大に至る。食頃乃ち晴る。月色玲瓏。

九月八日 好天。早朝諸氏と導者を雇て長陵に遊ぶ。廟宇宏大蒼くに黄瓦を以てす。外門に入り中門を進み本殿へ至る。殿内宏大、大柱二十四本あり。高さ二人にして抱囲するも、尚一尺五寸余の不足あり。高さ七間許、建築の壮大未だ曾て見ざる所なり。成祖文皇帝の神位を中央に安置す。殿復の高殿に上る。大明成祖皇帝寢陵の大碑あり。蝸石を用て之を作る。其墓地は即ち殿後の小山なりと云ふ。陵の郭内、松柏鬱茂青草蔓盛、堂燕往々破壊に属す。人をして興亡の感に堪えざらしむ。石壇は皆な代理石を以て之を造る。余の十二陵は山の南山麓に沿て之を設く。此処地勢東西北の三面は山峰環峙、南一面少しく開通し、中間に平野を抱く。自然城郭の形を為せり。門番に錢十錢（四人にて）を給す。若し洋装し来れば一円を出さざれば門を開かずと云ふ。一覽終りて東山口を過ぎ、大辛店等の地を過ぎ、湯山に達す。十三陵より三十里と云ふ。湯山は大湯山、小湯山の二個に分れ山上に廟あり。遠望の良標たり。小湯山人家頗る多しと雖商家なし。甚だ寥寥を極む。南側の茶館に投ず。客店の如きも皆な穢陋にして見るに足る者なし。外人の此地に遊ぶ者は皆廟中に宿すと云ふ。此地に在りて洋銀を換へんとす。行はれず。此を距る十八里の高林に至らざれば換ゆるの地なしと云ふ。時に我輩数十文を余すに過ぎず。已に宿泊料だも無きを以て已むを得ず

去る。行く十余里にして馬房を過ぐ。良村なり。又行く十里にして東山集に至る。時に暮色冥合す。行く少許にして路右の畝中に露宿す。木村氏疲労殊に甚し。此日一行僅かに一食。夜冷氣肌に逼く。眠むる能わず。恰も八月望前一日にて月色頗る朗。

九月九日 好天。三時月を踏て発す。七時漸く北京に達し、安定門を入り六条の旧公使館に帰り、天野氏に至りて早餐す。晌午木村氏に至り酒を飲んで明治九年十年の戦事を談ず。同氏は九年十年の二役熊本城に在りし者なり。夜六条に宿す。

九月十日 好天。朝井手氏と積善堂に帰る。寧波永原壮二郎の信来り居れり。同子の寧波店は半焼し、商品等多く焼失し多少損害を罹りしと云ふ。

九月十一日 好天。汪姓と崇文門の攤に至る。売買甚だ好からず。是日上海糸川生の信来る。芝罘安原氏より書生一名を要する事に付き、上海の牧大尉より糸川を勧むる由申来り、予に去就の相談有り。予は安原より直接の相談を受け已に永原生を推薦せし事なれば終に之に答へざりし。

九月十二日 好天。井手氏崇文門の攤に至る。予は公使館に至り横田を訪ひ中餐し、夜又た横田、天野等と洋饌を食ひ飲む。田中氏に宿す。

九月十三日 好天。早朝公館より帰り、汪と崇文門の攤に至る。暮時帰る。北御門氏来れり。漢口高橋栄吉、浅野二氏の信及び白井新太郎上海よりの信至る。高橋は当分漢口楽善堂の事を管理する事になれり。中野初二、白井二氏帰国する事になりたればなり。

九月十四日 好天。朝井子崇文門の攤に至る。予終日在家。心気鬱屈。夜下痢数回。

九月十五日 好天。心気不舒。下午井手氏と公館に至り今立書記官を訪ふ。酒を饗せらる。晡時横田、山口等西山より帰来。晩荒賀、井手諸氏と横田氏に飲み、終に宿す。

九月十六日 朝雨。横田氏に朝食し直に帰る。

九月十七日 好天。下午井手と六条胡同に抵る。夜木村中尉の処に飲む。頗る酩酊を極む。是日漢口片山、緒方両氏の信到る。漢口楽善堂の衰

類危急に逼りしを報ず。数十名の同志各意見を抱き小異を争て一和する能はず。措置錯乱緩急序に遵はず。実に大事を為す所以にあらず。

九月十八日 雨天。下午井手氏と共に帰る。晴雨、大雨。天壇火を失す。夜感慨五古一首を作る。

九月十九日 朝来小雨。終日在家。

九月二十日 好天。下午公使府に至り郵便代を払う。是日奥村の信来る。永原、糸川芝罘行の事に迷ひ居る由報じ来る。予が永原に発せし信到着せざる者に似たり。因て世良田少佐に送書し、予の書信の到着せしや否やを問ふ。別に仲正一氏と武斎号に一封を送る。武斎には近く公使館に托し雜貨代を転送せん事を告ぐ。

九月二十一日 好天。晚餐後井手と永定門内に散歩す。数百の石工を派し頻りに石路の修理に従事す。

九月二十二日 好天。日曜日。下午井手氏と六条に到る。諸氏皆な家にあらず。鞋を買て帰る途山口外三を訪ひ小談、帰寓。夜七古一首を作る。

九月二十三日 好天。下午井手氏と公館に至り田中を訪ひ、晩帰る。

九月二十四日 陰。早朝井手と車に乗じ米を携て六条に至り、鶏を買て天野、荒賀、北の諸氏と会食す。井、荒二氏と府学胡同文天祥の祠に至る。入るを得ずして帰る。晴井手と帰り公館に至り田中等を訪ひ、晩帰る。夜雨。是日天津小沢中尉の信至る。

九月二十五日 好天。終日在家、紀行を草す。

九月二十六日 小雨。終日在家、河南省の紀行を写し終はる。

九月二十七日 好天。下午井手氏と公館に至り、横田を訪ふ。鹿児島人徳尾弥三なる者座に在り。朝鮮より来れる者なり。横田にて酒を飲み、中嶋雄を叩き一統志を借りて帰る。是日天津世良田少佐の返信到る。芝罘安原大尉の依頼によりて周旋せし永原壮二郎の事は直に呼び寄する様になれりと云ふ。

九月二十八日 好天。涼氣身に逼る。下午井手と六条に至る途、山口外三を訪ひ小談、六条に至る。天津仲正一及び東京中西正樹二氏の信木村

中尉の処に在り、徳尾某の帶し来る者なり。中西の信には荒尾精子の近状を報じ、仲氏よりは曾て托し□たる手帳二冊を送られたり。夜天野氏に会食す。談深更に至り寝に就く。

九月二十九日 好天。小午井手氏と帰る。公館に立寄り横田を訪ふ、在らず。芝罘安原大尉の信及び永原生の信来る。安原氏は予の周旋せし永原壮二郎の事を謝し来れり。永原は既に芝罘に着せりと云ふ。外に糸川直元の信到る。

九月三十日 晴天、気如春。朝天津仲正一、瀬川浅之進二氏に寄するの信を認め、今日下津する支那人に托送せんとす。下午井手氏と公館に至り、横田を訪ふ。新聞及び家大人の書至る。予の帰国を待たるの意紙上に溢る。光彦は警察に従事、目下三角に在り。亀雄は郵便局に出でしと云ふ。夜家大人に復するの書を認め、長城見物の模様より支那今日の有様と、予の志の在る所を報じ、忠孝の二字を詠ぜし国風一首を呈す。曰く、秋思ふ涙の□□君志□□し八洲の草も沾ひやせん、と書終りて覚へず熱涙巾を沾ふ。光彦には荒尾氏熊本に來り家大人を訪ふ由を報じ、勗むるに孝道を以てす。又た近作二首を録し□す。又た中西正樹、荒尾氏に寄する書を認む。鉄道の事、天壇焼失の事に燕京店の現況、河原格二郎を我黨員に列せしむべからざる事、荒尾氏が□□と義絶する事を諫むる事、天津時報に荒尾の事を登載せし趣と、外に予が家政の有様を報じたり。

十月初一日 晴天。下午井手と六条に到り、木村、天野、徳尾等の諸氏を訪ひ、天津仲正一、世良田少佐に寄するの書を木村中尉に托す。同氏初四日を以て天津に向ふを以てなり。天野氏にて晩食し、北御門の処に宿す。

十月初二日 好天。早朝井手と安定門外に至り操練を見んとす。至れば既に終はれり。門に上り眺望久之帰る。小午六条より帰る。下午山口外三、田中善之助二氏來訪。

十月初三日 晴天。気如春。下午公館に至り、家大人及び光彦に寄するの書と東京荒尾、中西二氏に寄するの信を發す。

十月初四日 陰天。下午田中氏及び支那人福降阿來り看戲を誘ふ。行て金奎班の戲を聴く。暮時

帰る。晩食後井手と出でて、六条胡同に至り宿す。

十月初五日 晴天。下午六条より帰る。

十月初六日 晴。日曜日。午前北御門来る。晌午前門外の東興居飯荘に至り経義堂外二三の客を饗し、食後中和園に至り同春班の戯を看、暮帰寓。

十月七日 終日在家。時報を読む。

十月八日 晴。下午井手氏と公館に至り横田を訪ひ、支那人呉姓及び中嶋雄の諸氏と飲む。深更寝に就く。是日天津仲氏の信到る。

十月九日 好天。朝公館より帰る。下午田中善之助を西河沿順興客店に訪ひ、晩餐して帰る。

十月十日 好天。下午公館に至り天津仲正一氏に寄するの信を發し、横田氏にて小談、去て山口外三を訪ふ、在らず。直に帰る。

十月十一日 好天。是日井手同封にて熊本の飯田熊太、佐々干城二氏に送名片。

十月十二日 陰天。下午井手と公館に至り、上海樂善堂藤田捨二郎及び牧野大尉、奥村金三氏に寄するの信を附郵し、去て山口外三を同仁医院に訪ひ、共に出て六条胡同に至る。木村忠得氏今日天津より帰来す。山口と天野の処にて晩餐し、夜更木村に至り小飲、北御門に宿す。

十月十三日 微雨。朝井手、徳尾二氏と六条を辞し、公館横田氏に小談。予は田中善と去て、前門を出で飯舗に投じて中食し、中和園に至り三慶班の戯を聴き、黄昏帰家。

十月十四日 晴天。終日在家。晩餐後井手氏と前門外天橋辺に遊び、帰途田中善を西河沿の順興店に訪ひ話。移時帰る。

十月十五日 好天。終日在家。晩食後天橋に散歩す。

十月十六日 好天。是漢口高橋榮吉、緒方二三、片山敏彦、宮嶋大八諸氏に寄するの信を發す。高橋には荒尾の返信を得て下漢すべき旨を送れり。下午公館に赴き投郵し、且つ九月分郵便代を払ふ。夜天野と共に横田氏に飲み、九時天野と共に上車六条胡同に至り、天野に宿す。

十月十七日 好天。下午六条より帰る途、公館に至り横田を訪ふ。荒賀、徳尾二子亦来る。晡時帰寓。

十月十八日 好天。下午荒賀氏来る。共に出て慶樂園に至り四喜班の戯を聴く。

十月十九日 陰天。秋氣凜然。土曜日。晩餐後井手氏と六条胡同に至り諸氏を訪ひ、深更木村氏に小飲し、北御門氏に宿す。

十月二十日 好天。木村氏に中食し、夜荒賀の処に宿す。

十月二十一日 好天。朝六条より帰る途、公使館に至り横田を訪て中餐し、夜中嶋雄の招飲を受け、清人呉菊園及び横田、井手と行て飲む。筆談舌話、深更横田氏に宿す。是荒尾精、井深二氏の信、金沢より至る。後來運動の方針を一転する事に就き、北京店引き挙げの事を送り、在京同志一同来年二三月迄上海に会集する事を相談し来る。又た漢口高橋榮吉の信到る。是日直に返事を認め高橋子に寄す。

十月二十二日 好天。早朝公使府より帰る。夜井手氏と田中善之助生を西河沿順興店に訪ひ小談、帰寓。

十月二十三日 好天。

十月二十四日 好天。晌午北御門生来る。夜井手氏と出でて六条に至り宿す。

十月二十五日 好天。下午井手と六条より帰り、公館に立寄り小談、帰寓。

十月二十六日 好天。是日芝罘白須直に一封を出す。下午六条に至り横田を訪ひ、其の教師呉凌秋に長歌一篇を贈る。前日予に贈りし者に和するなり。後ち荒賀、徳尾二子亦来る。夜清人呉凌秋、井手、荒賀、徳尾諸氏と横田氏に飲む。山口外三、中嶋雄二氏亦来会。夜山口と共に同仁医院へ至り宿す。

十一月五日 陰天。終日在家。徳尾生来訪。

十一月六日 陰天。終日在家。午前鐘ヶ江生来る。明後日より陸路上海に帰ると云ふ。

十一月七日 陰天。午前七里恭来る。中餐後共に出て六条胡同に至る。横田氏亦来る。晩鶏を割き会食す。木村少尉も亦来会。天野の宅に宿す。

十一月八日 好天。朝井手と鐘ヶ江生と共に帰寓、朝餐す。八時鐘ヶ江生別を告て去る。直隸、河南、安徽を経て上海に到る者なり。下午出て西河沿に至り、徳尾生を訪ふ。荒賀直順亦在

焉。晡時共に出て前門外に至り晚餐して帰る。井手亦臻る。夜終に宿す。

十一月九日 健晴。土曜日。晚北御門氏来宿す。

是日荒賀と広徳楼に至り小栄椿の戯を聴く。

十一月十日 健晴。朝井手、徳尾二氏と出て公使館に至る。中餐後天野、荒賀、今立書記官と共に、東便門外に至り大鳥公使を迎ふ。下午一時轎に乗じて臻る。鄭永昌、熊崎寛良、仲正一、木村忠得、三輪某及び外一名随ふ。公使館に至り公使に面す。晡時仲中尉を誘て帰る。晚仲氏帰る。是日上海楽善堂藤田捨二郎に一封を送り喬宅の送状を促す。

十一月十一日 好天。下午井手と公使府に至り横田を訪ふ、在らず。去て山口外三を訪ひ小談。帰途前門外に於て立食し、徳尾を訪ふ。荒賀、七里二氏在焉。談時を移して帰る。是日漢口高橋栄吉、緒方二三、片山敏彦二氏に送書す。

十一月十二日 好天。是日通州の葉箱二個到る。直に調査す。紛失の葉及び画頗る多し。北御門、荒賀、七里三氏来り、中餐して去る。晚井手と前門外に散歩し西河沿に至り、徳尾生を訪ひ宿す。

十一月十三日 好天。朝仲正一氏来り、西山門明園等の地の遊覧を誘ふ。予井手と共に与にす。阜蔵門より驢を雇い（一個一吊文）海甸（人家二百許、頗る盛）を過ぐ。官塩局あり。晡時門明園に到る。閑人の遊覧を許さざるを以て更に驢を駆りて青龍橋に至り、広順茶楼田姓の家に投宿す。此店は邦人の此地に遊覧する者の常に宿する処にして、房子清潔、内地客店の比にあらず。岸田吟香、林忠正等邦人の姓名を壁に題する者頗る多し。夜酒を呑み佳肴を摘み頗る快を極む。

十一月十四日 健晴。早朝仲中尉、井手素行と出でて、道を石路に取り玉泉山下に至る。此処廟あり。松柏蓊鬱の中に在り頗る景致に富む。所謂玉泉水の発源にして瑩微如鏡、下流は即ち昆明湖よりして、京城の大液池、護城河に注ぐ者なり。門内に入り一覽を求む、得ず。去て玉泉山の南角を廻り、石山の嘴を右繞して四平台に至り、靈光寺に入る。白塔あり。玲瓏として翠松の間に屹立す。青龍橋より此に至る二十余里

許。寺は明代の建築にして頗る広大。僧四人あり。和尚を慧一と云ふ。凡俗談ずるに足らず。白塔に上る。観音の像一千尊を画く。眺望甚好。塔側天游閣あり。画棟雕檻雅潔愛すべし。其側又た一小屋あり。松風蘿月の四字を題する扁額を掛く。一覽終りて司房に至る。即ち客室なり。器具麗都、覺海澄円の額を正面に掛く。恭秋王の聯あり。一年一次此寺に遊ぶと云ふ僧来りて鴉片煙を侑む。之を謝し茶を乞て飲む。休憩多時、石路を取て下る。寺は山脚に在り。後口に山を負う。松樹甚だ多く、景色最も好。此辺一帯西北の谷間及び山腹、山頂寺院頗る多く、靈光寺を併せて八個の寺刹ありと云ふ。旧路を取て□は道餅を売る者に逢ふ。芝上に踞して食し、焼酒を飲む。此処青龍橋より高き事二百七十尺と云ふ。山角を廻り行く八九里にして碧雲寺に至る。同く明朝の建造にして古色可掬、山脚に住し、青松蓊鬱積翠欲滴、石磴を攀げ、山頭の境に登る。塔形七座に分れ、白蠟石を用て之を築く。塔下の小屋に木像の小菩薩を安置する者甚だ多し。此地に遊ぶ者往々之を盗んで帰る。下殿に木像の大羅漢五百八尊を安置す。司房に至り、茶を啜る。室内麗潔器具完備。書画を掛くる頗る多し。名士巨官の真跡亦た少なからず。石塔を捨て下り、外門を出づ。門錢を要す。之に五六錢を与ふ。西山一帯の寺刹中其の幽邃閑雅之を巨擘と為す。実に稀有の清浄境なり。此の近傍四五座寺あり。臥仏寺頗る名あり。碧雲寺の南側に香山あり。山中建築の稍大なる者多し。山頂より山下に至る迄委它石牆を設く。閑人の混入を禁ず。一千八百六十年（咸豐十年九月十八日）英仏同盟軍進入の時門明園、万寿山、玉泉山と共に一同焼棄する所となり、今は頗る寥落を極むと云ふ。玉泉山の北頸を横ぎり青龍橋の客舎に帰る。日に暮色冥合す。夜又た酒を命じ佳肴を呼んで飲む。（碧雲寺の塔の平面図中央の二座大にして四方の者は小なり。遠く之を望めば天主堂の建築の如し。松林の間に屹峙す）

十一月十五日 健晴、気如春。朝出でて琉璃廠の製造所に至らんとす。天早からざるを以て俄に方向を転じ、玉泉山下の石橋側より左折し進ん

で石造の鼓橋を渡る、甚だ高し。橋下一水東南に向て流る。即ち昆明湖の支流にして北京に到る者なり。一の牌樓を過ぎ鳳凰墩の辺に至る。中間の道路円形を為し、巾五六間セメント泥を用て之を堅め、湖に浜するの処を石垣を築き稚柳を植え、目下数百の工夫修理に従事し、道の両側に石牆を設築中なり。此道は即ち湖の東塘なり。鳳凰墩は小半島の形を為し、湖中に突出す。十七孔を穿てる代理石を用い造れる美麗なる石橋あり、鳳凰墩に向て架す。予輩行て一覽せんとす、許さず。墩上雅麗なる屋房数座あり。樹林の間に設く、恰も西湖の三潭と趣稍相似たり。之を湖上第一の景致とす。十七孔橋の側廊如亭あり。円角形に之を作る。新近の設くる所繞らすに石欄を以てす。天子御製の扁額金字にて書する者七八を掛く。金碧煌輝頗る壯麗を極む。万寿山の東角を繞る臨時建築局あり。数百の石木匠此に在りて工作に従事す。此地も亦た英仏軍の為に焼かれし者にして、近年皇太后の命によりて再築に着手せし者なり。万寿山は香山、玉泉山と共に三山と称し、西山名勝中之を第一と為す。昆湖の北岸に位置し南麓を湖水に挿む。青松翠柏玲瓏の湖色と相映じ、宛然画図の如し。南麓湖に浜するの処は代理石の欄杆を設け、一帯之を隔つ。老松掩生、朱欄碧瓦玉堂華屋其間に隠見す。一条の仏道□潔拭ふが如く松林の間に通ず。南の方湖上を望めば鳳凰墩は清波の間に踞し、湖上各処に牌樓小亭点々相連り、幾隻の小舟其間に往来し、光景佳絶人をして快呼せしむ。青龍橋に帰り中餐小休。下午竊かに万寿山に登り建築を一覽す。頂上数個の大屋あり。皆往来焼余の者にして多く荒涼に属す。目下頻りに再造に従事す。断礎敗基人をして桑滄の感あらしめき。番人の咎むる所となり、門を出て去る。水師学堂、外操学堂、船渠、船房等を一覽して帰る。時に日暮。夜筆を把て壁上数行を書し、併せて一絶を題す。

水師学堂 学生四十名、教師三名制は、天津李氏が設置せし学堂に倣ひ旗人の子弟を養成し、水師の将校を造り出すの所なり。書生等専ら洋書を読む。

水操外学堂 水兵八十名あり。

船渠は、外学堂の前（南側）に在り、長さ十二間、巾五間余。其側小機器房あり。船渠の水を器械にて乾かす処なり。

船檻は、外学堂の西側少許の処に在り。砲船八隻を入る

小火輪船は、船渠の西側、水上に四房を構へ、平時其中に蔵す。三隻を入ると云ふ。

西山機器局は、青龍橋を距る四十里の（西微南）（或曰三十余里）琉璃局にあり。職工百四人を役す。彈丸及び砲の修理を為す。主房三棟、都合大小七八棟あり。

煤炭鉞は、青龍橋西三十余里の門頭口に出づ。

昆明湖東南辺近 稻田三百六十頃（一百畝を一頃とし、二百四十歩長を一畝とし、五尺を一步とす）あり。青龍橋の稻田厥之を総管す。天子の食用米なり。

西山一帶廟宇 大小十五六座あり。

皇太后閱兵の時來集せし兵は二千五百三名なりしと云ふ。

円明園八旗 合せて一万許、山下各処に就て土著を為す。全く通常の村市に異らず。香山の東南山を隔てて八旗の練兵場あり。其傍は即ち旗人の住村なり。香山の下、玉泉山との間、正白旗（四百六十五人）、廂黃旗（四百四十人）等の数旗を駐す。

青龍橋は万寿山の西北麓に在り。人家二百許、売買頗る雑踏す。錢舗、雜貨舗等あり。客店は予輩の住せし広順茶館あるのみ。店主は山東萊州府人にして姓を田と云ふ。夥計に黃鳳と称する美童あり。

從青龍橋 到碧雲寺十二里、到南口六十里、到湯山三十里、至西直門二十五里、到芦溝橋三十里、到琉璃局四十里、到門頭兒煤山三十里。

水師学堂は湖の西瀕に在り。平屋の瓦房大小十余棟あり。門は一方にして南に面す。内部は頗る清潔にして玻璃戸を用ゆ。外学堂は其の前に在り。（南側）平屋の瓦房約五棟余あり。構造相同じ。

十一月十六日 好天。朝驢馬を雇い仲、井二氏と騎して客店を發し、玉泉山下より左折して畦畝

間の小路を取り琉璃局の製造所に向ひ芦溝橋を経て帰京せんとす。行く十余里にして、井手氏俄かに脳病を發し危篤の状あり。漸く之を灌救し、仲中尉と分袖し、予は井手を護し驢を駆りて北京に帰る。阜成門より車に座し同仁医院に至り山口外三を訪ひ、医を請て井手の診察を囑す。暮に至り病少しく好し、予為に大に安慮せり。始め病の發するや、其勢急にして心竊かに之を危み護して医院に至る間無量の危懼を抱きしが、幸にして変なきを得たり。北御門、田中二子到る。夜公使館に至り横田を訪て晚餐す。明日より荒賀氏と共に帰化城、察哈兒等の地に遊ぶと云ふ。夜同仁医院に至り井手の病を尋ね、公使館に帰り宿す。

十一月十七日 好天。朝食後同仁医院に至り、井手を山口氏に訪ひ中餐す。下午七里、徳尾両氏と六条胡同に至る。晡時横田到る。仲正一氏亦た西山より帰来。夜天野氏に飲む。会する者は仲中尉、横田、井手、天野、北御門、荒賀、七里、山口、徳尾及び予の十人なり。痛飲快談、深更寢に就く。

十一月十八日 好天。護照未だ総理衙門より来らざるを以て、横田、荒賀二氏本日出発する能はず。終日天野氏に在りて飲む。予詩一篇を作り荒賀、横田二氏を送る。

十一月十九日 好天。是朝仲、天野二氏芦溝橋に遊ぶ。夜又飲む。深更寢に就く。

十一月二十日 好天。二氏の護照未だ来らざるを以て、朝食後横田、荒賀の両子に辞別して帰る。荒賀氏は都合により帰化城に一年余も滞留し牧畜事業を研究する筈なり。天野、仲二氏も亦た荒賀氏と同行、八達嶺、十三陵等の地に遊ぶと云ふ。帰途公使府に至り三輪高三郎を訪ひ、上海樂善堂より送りし薬を受取りて帰る。中食後西河沿に至り徳尾生を訪ふ。木村忠得、山口外三二氏至る。暮時帰寓す。

十一月二十一日 微陰。午前北御門、田中、徳尾三氏来る。下午出でて田中を訪ひ、晚餐す。七里、徳尾二氏亦帰来。夜徳尾氏に宿す。是朝横田三郎、荒賀直順二氏口外に向て出発し、仲(小沢)中尉、天野恭二氏も一同八達嶺に向へりと云ふ。

十一月二十二日 陰天。朝徳尾氏より帰る。北御門氏在焉。下午又た出て徳尾を訪ひ、晩井手、徳尾と共に帰る。

十一月二十三日 陰天、夜雨。下午井手氏と出て公館に至り三輪高三郎を訪ふ。小談、去て同仁医院に至り山口氏を訪ひ、薬及び磁石を貰ひ、広興紀河南の部を借りて帰る。夜厨子彭殿閣に明日より解雇の事を命ず。北御門氏に金四円を贈る。其窮を聞けばなり。是日漢口高橋栄吉の信至る。都合によれば同志と共に貴州の山中に引込む覚悟にて、近く帰国する筈なりと云ふ。

十一月二十四日 積陰細雨霏々。是日より彭殿閣を解雇し、自炊の事に定む。従来菜錢三吊七百文を減じて一吊五百文とす。夜井手と徳尾氏に宿す。是日七里氏来る。

十一月二十五日 陰天、風大。晌午徳尾氏より帰り、中食後又た至り、井手、徳尾二氏と六条胡同に至る。天野、仲二氏八達嶺より帰来。夜酒を飲み談ず。天野氏に宿す。是日漢口緒方、片山二子の信及び上海樂善堂藤田の信来る。新薬十種を送り、天津仲氏に転送を托せりと云ふ。

十一月二十六日 好天。朝仲、井手、徳尾三氏と六条を辞し、途同仁医院に至り山口を訪ひ小談、帰寓す。下午仲中尉来訪。明日を以て天津に帰るを告げ、雇事の事を予に托す。即ち夥計を遣はし之を雇ふ。二套事にて車価二円なり。沢村繁太郎、望月某及び上海藤田、吉田二子に寄するの信を同氏に托し、且つ皮箱一個を上海樂善堂に転送せん事を依頼す。蓋予来月を以て漢口を経て上海に帰らんと欲すればなり。別に天津武備学堂及び水師学堂の学則並に両学堂の景況の報知を依托す。夜徳尾を訪ひ小談、帰寓。

十一月二十七日 早朝、仲氏天津行の車到る。予、井手と予が上海に送るべき皮箱を載せ交民巷の我公使館に至り、仲氏を叩き出発を促す。中嶋氏に在りて小談。我店の夥計王古椿を仲氏の店に譲る事を約す。別を告て帰る。夜井子と出て泰来店に至り徳尾氏を訪ふ。今日順興店より移寓せし者也。一月の房錢、飯代と共に三円五十錢と云ふ。三更帰る。

十一月二十八日 好天。正後七里恭、井手三郎二氏と出て公館に至り、三輪氏を誘ひ去て六条胡

同に至る。夜天野氏に於て牛肉の馳走を受く。
十一月二十九日 好天。朝天野氏にて朝餐し、井手と共に帰る。是日仲正一氏に寄するの書を認め、王古椿に托す。下午北御門、徳尾、田中諸氏来り、小談即去る。

十一月三十日 好天。是日店夥王古椿を天津楽元楽へ遣はす。下午公使府に至り、上海楽善堂藤田捨二郎、山内崑二氏及び漢口高橋栄吉等に送書し、燕店改革の概略を報ず。晡時帰寓。晡田中、徳尾二子来る。晚餐後出て、徳尾氏に至り宿す。

十二月初一日 日曜。健晴。朝餐後、徳尾と出て公館に至り、三輪を訪ひ小談。去て同仁医院に至り、山口を訪ふ、在らず、帰る。七里氏在焉。昨夜追懷西冷之遊得二絶。
西冷橋上夕陽微。十里長堤花滿衣。最是多情風外絮。偏向蘇小墓辺飛。
蘇小墓辺春如夢。荒園花落夕陽紅。六朝韻事依何卜。飛絮伴人過故宮。

十二月二日 晌午田中氏玻璃局の掌櫃を誘て来る。是日より夥計劉維聚（保定府冀州人）を雇ふ。飯銀を一兩二錢と定む。下午井手氏と出て六条胡同に至り、海軍少佐世良田亮氏を訪ふ。昨日着せりと云ふ。夜天野氏に晚餐す。

十二月三日 好天。朝上海より送致せし藥箱を世良田氏より受取り、上車帰寓。七里、徳尾両氏に在焉。晚餐後井手、七里二氏と泰来店徳尾氏の処に至り宿す。

十二月四日 好天。朝徳尾氏より帰り、河南の紀事を作る。晌午北御門及び伊藤小三郎二氏来訪、中餐して去る。終日在家。

十二月五日 好天。終日在家。河南旅行線路の調を為す。井手と出て徳尾を訪ふ、在らず。天橋に至り月を賞し帰る。夜一詩を得たり。曰、算来身世多沈浮。間閨僅持歲寒心。壯図十年試無处。俯仰今昔感復深。鞍馬瀋陽万頃秋。棹舟江漢千里流。鵬程歴々九万里。足跡継横三百州。（この後一行分不明）君不見。天公附我百年躬。豈与世俗老夢中。眼前世態□□□。天地大□□至公。聞説江南物□斬。驕馬又下松氷浜。此行豈為鱸魚会。（転用唐詩中一句）欲描南中桃李春。

十二月六日 好天。午前北御門氏来る。下午井手氏と出て六条胡同に至らんとし、道公使館に至り、東京岸田吟香氏に寄するの信一封を發し店中改良の状況を報じ、燕京維持の基礎確定せし事を報ず。中島雄に就き清一統志湖北の部を借る。山口外三を同仁医院に訪ふ、在らず。小街に道して六条に至り、伊東、増子二氏を訪ひ晩食の饗を受け、天野氏に宿す。

○●天津近事

天津紫竹林、居留洋人三百人。洋房約八十戸。英人を大宗とし、仏、独、米之に次ぐ。○博文書院は北京の同文館に倣ひ李直督の創建せし者にて、米国の宣教師テネー氏を雇入れ教頭と為し、清人楊姓（久しく西国に在り能く語言学文に通ず）之を輔く。テネー氏は是迄天津中西学院にありし人にて、明年該書院開院の時は差寄り、中西書院の生徒現員五十名を移し来る筈の由。是迄中西書院生徒の月謝は五弗なりしか。博文書院に移りし後は食料を併せ八弗位に為すべしと云ふ。

○●北京

北京に居留するは都合洋人二百人許にして、税務司赫徳の処に役員二十人、生徒八人、外は公使館員と宣教師等なり。英国の公館には大抵四十人も居ると云ふ。教堂は仏国四ヶ処、英米各三ヶ処、魯国一ヶ処にて、教堂の宏大なる者は仏国を推す。教会中学校を建て男女の生徒を教育し、病院を置いて施薬施療を為す。○黙許の姿なる商店はキセフ、亨達利、興裕洋行等で共に交民巷に在り。○公使館の数は在来九国にて、近時伊太利の新建を併せて十国なり。即ち帝国及び英、米、独、仏、魯、^{イスパニヤ}蘭、大西洋、ベルジウム、伊太利等也。○総税務司赫徳は支那政府が百般の工事等に日本人を用ゆる事を恐れ、之を防ぐの策に汲々たる由、是は我邦人が技工芸に熟し、給料安くして雇入れらるる時は英人の雇われ口を塞ぐの恐れあればなり。支那政府より貿易上問題は常に総税務司に下し諮問する由。○現に総理衙門中に鏘々たる者は徐用儀にて、此人は余程外交に熟し居る由。又た雲貴総督の王文韶も評判よく（前軍機大臣）嚮きに京官中

にて鏘々の者にて外交には手慣れし人の由。
海州福昆は宗室にて威張り居れども固陋なり。○天子の名は載滌醇親王の子。

十二月七日 好天、気如春。天野氏にて中食し、氏を誘て帰寓。夜出て徳尾を訪ふ、在らず。

十二月八日 好天。健晴。午前北御門氏来訪。中餐後井氏と出て公館に至り北御門に会し、去て山口外三を訪ふ、在らず。哈噠門を入て帰る。是日河南省の調を終る。

山口より帰途、崇文門外に在りて、進門車馬の雑踏を觀る。蓋し城外各路より進城の車馬は必ず崇文門に在りて税関の検査を受け、然して後に進城する例なるが故に、互に先を争ふて日暮関門前に進城を欲するが故に、日暮前は殊に混雑を極む。幾百の蓬車、大車、驢馬、騾馬、小車、行人、門外に螺集し、鞭繩の聲、馬蹄の聲、輪輒の聲、馬嘶の聲、喧雜の聲相和して恰も百万の大軍が一举して城門に乗入らんとするの概あり。其盛況人をして驚絶せしむ。就中大車には七八頭の騾馬を使役し数千斤の重荷を負ふが故に、石路の破損せる処を進むに先を争ふて一時に進門を要するを以て、沙塵天を蔽い混雑の状譬ふる物なし。騾馬一頭にて遠路の荷は大抵五百斤を常とす。近路は一千斤を負ふべし。故に驢馬の強健なる者は七八十里の路程は百五六十乃至二百斤は容易なりとす。

十二月九日 好天。下午徳尾、井手両氏と出て天壇の周辺を巡視し、帰途金魚池を一覽して帰る。

十二月十日 陰天。午前田中善氏来り、予輩の新聞信書を携へ来る。漢口高橋栄吉及び上海佐野直喜両氏の信至る。佐野は商況視察の爲め細流舎の半井格二と共に本月初旬上海に来れりと云ふ。漢口高橋の信によれば、上海辺にて漢口樂善堂の評判甚だ悪しく、嫌疑を蒙る事愈深く、且つ我黨員浦敬一、藤嶋健光二氏が伊犁行の事も略ぼ知覚せしと見へ、一人は殺され一人は遁亡せり杯の評品ありと云ふ。下午井手と出て公館に至り三輪を訪ひ、小談。去て山口外三を訪ひ、晡時帰寓。

十二月十一日 陰天。零氣頗烈。終日在家。午前北御門氏来。下午七里恭、徳尾弥三二氏来訪。

是日高橋栄吉へ寄するの詩一篇を作る。

一従分袂於申城、蜀水燕雲無限情、深山風暖虎尚睡、大沢空収龍雲横、上游經營独推君、北陲雄圖未奏勲、漢陽之盟今四散、東去西留何紛々、事敗時背壯志差、我道畢竟行何時、苟能知大勢所定、眼前百非何足悲、倚劍望君天一□、綿々迷思我心傷、城柝声洪夜將軍、一痕寒月凜如霜。

寒夜独座追想浦敬一藤崎健二子漢北之辛苦。

締盟夏江浜、志士二十人、就中兩君子、豪邁称絶倫、一朝杖劍西出関、欲為東洋濟時艱、千疊氷山連天峙、万里寒空月一彎、狼吼虎横行路難、雄心笑甘此辛酸、鬼神亦应泣壯烈、想来一夜淚欄干、嗟我粗才何所成、東蹠西躡空營々。

詩成嚴然对案坐、一盞寒燈筆有声。

十二月十二日 陰天、風大。午前七里氏来る。少焉、徳尾氏亦来る。下午七里氏等となく出て六条胡同に至り、伊東、増子の諸君を訪ひ、夜増子と談じ、天野氏に宿す。

哈噠門外金魚池の北側一帯市上木廠の大なる者甚だ多し。哈噠門内亦多し。又た酒間屋の大なる者門外に多し。

十二月十三日 好天。朝天野氏にて出餐し、世良田少佐に至り談ず。下午井手氏と六条を辞し徳勝門一帯を巡視し、皇居西安門を経て帰寓。

後門外より積水潭、十刹海を経て蓮池泡子に至る。総称して十刹海と云ふ。二泓の池より広□大約六七百米突。池畔老柳列植す。夏季には荷花盛に開き、光景頗る佳なりと云ふ。酒楼飯館等其傍に在り。醇親王、恭親王の府第も当時池の北側に就て修建中なり。池は徳勝門城壁の下南側に在り。此水は西山昆明湖水の匯する所にして徳勝門の西側壁下約そ百米突に水関あり。即ち底樋の製に牆壁の下を穿て水を引き「ホートーツ」（廟名）の背後にて水道二分し、廟を抱て双々蓮池泡子に注ぎ、積水潭よりして皇城内の大液池に通ず。

十二月十四日 好天。午前七里氏来る。明後々日より天津に赴くと云ふ。予、澤村繁太郎、仲正一、及び王古椿を戒むるの書と共に三封を同氏に托す。

十二月十五日 好天。午前七里、徳尾両氏来。下午七里、徳尾、汪諸氏と向樂園に赴き、春擡班の戯を聞く。山口外三亦来る。是日天津仲正一、沢村繁太郎氏等の信到る。沢村の信中曰、荒尾が東京にての計画は各地に流布する風説とは雲泥の違にて、已に五万円の資本は集まりたりと云ふ。未だ孰れか信なるを知らず。夜徳尾氏に至り宿す。朝鮮京城白須直に寄するの信一封を認め、古風一篇を作り、徳尾氏に転致を托す。

一別煙台二經秋落拓尚滯古燕頭斷鳴夢驚月冷
夜海雲望迷無限愁隻手倒瀾力難支寸心此時乱
為絲翠袖香滴美人淚鶴影易疲日夜思壯国十年
我欲狂北馬南船為□忙千里望君君不見水雲
迢々天一方

十二月十六日 好天。朝徳尾氏より帰る。晚徳尾氏来。七里亦来宿。

十二月十七日 積雲。早朝七里恭馬車に乗じて天津に下る。領事館に至る者なり。余七絶一首を賦し其行を送る。曰く、

燕山雲消望□披。残柝曉鐘送別時。七十二湾春色近。羨君到处饒詩思。

下午井手と東堂子胡同に至り、総理衙門を一覧す。同文館も此の構内に在り。去て六条胡同に至り北御門、伊東、増子等を訪ひ、去て安定門内鼓樓街に至り、順天府を一覧し、城壁に沿て小街に出で六条に帰る。夜井手、北御門二氏と世良田少佐を訪ひ、宗教上の哲理を論ず。同氏は耶蘇宣教師にて、其道に熱心なる者なり。午前二時北御門氏に宿す。

総理衙門は西單牌樓の東北東、堂子胡同の路北に在り。□して欽明総理各国事務衙門と云ふ。中門に中外褫福の類を掛け、柱に光茫六合無泥滓、坐全四海為唐虞の二句聯を貼す。同文館は此の構内に在り、現に生徒百余人、英米独仏魯等の外国人ありと云ふ。朝陽門内南小街路東に二大米倉あり。一を富新倉と曰ふ。又た同門外護城河西岸に沿て数個の倉庫あり。

十二月十八日 好天、風大。伊東、増子等の処に中餐し、晡時帰寓。

十二月十九日 好天。終日在家。詩一首を得たり。晡時山口外三、徳尾弥三二氏来訪。夜旅行

線路調査を了る。

混沌誰知天地初。理氣所存在太虚。此理玄渺不易得。慢守畦隴費犁鋤。道新祖龍劫火後。教迷宋儒述余。由来豪傑皆大覲。雕刻之徒竟何如。時中本是聖人道。願開恬眼誑活書。

十二月二十日 好天。是日陰曆十一月冬至、天子天壇に赴き天を祀る。毎年之を例とす。即祀天於南郊者是也。又正月 日一度天壇に幸するの儀あり。下午徳尾生来。井手と共に公使館に赴き、全權公使大鳥圭介氏を訪ひ談話。移時而帰る。

十二月二十一日 好天。終日在家。積善堂昨年度の決算に従事す。

十二月二十二日 陰天。終日在家。決算に従事す。下午北御門氏来。夜留宿す。頭痛殊に甚し。

十二月二十三日 好天。終日在家。徳尾氏来訪。

十二月二十四日 好天。終日在家。晌午天野氏来訪。

十二月二十五日 好天。下午公館に至り、熊崎に面し郵便代を払ひ、三輪を訪ひ、帰途徳尾氏に至り晚餐を吃し終に宿す。

十二月二十六日 (この後一行分不明)して、六条胡同に至り世良田氏を訪ふ。徳尾、田中二氏亦在焉。晚木村氏の招きにて徳尾、田中二氏と至る。雁を食ひ酒を飲み、木村と共に詩を吟じ歌を咏じ、或は十年の戦時を談じ、深更天野氏に至り宿す。

十二月二十七日 好天。朝木村氏にて食し、井手、徳尾二氏と帰る。途公館にて小談、帰寓。夜詩二首を作る。

傲一天乾坤氣快哉。滿眼宿霧一時開。誰知此際吾心樂。多從閑中得意来。

十二月二十八日 好天。下午徳尾氏と出て山口外三氏を訪ふ、在らず。徳尾氏に帰りて晚餐し、終に宿す。

十二月二十九日 好天。朝徳尾氏より帰る。山口氏在焉。下午北御門、木村両氏来訪。

十二月三十日 好天。午前井手、徳尾二子と出て洗澡す。官湯一人八百文、平常は六百なり。毎年臘月に至れば其価を引上げ、一吊以上に至ると云ふ。

除夜詩二首を作る。

同是天涯客遊身。青眼相会席無塵。一杯之酒
向君酌。醉到明朝則又春。

環海狂風如怒濤。欲支無策徒切々。書車混一
応非遠。能見斯幾是傑豪。

十二月三十一日 好天。是日明治二十二年の尽く
る日なり。下午井手、徳尾二氏と前門より氷床
に乗り護城河上を走る。氷厚一尺許。朝陽門外
より上岸六条胡同に至り、世良田少佐を訪ひ談
じ、夜同氏の饗にて忘年会を増子氏の室に開く。
会する者は木村中尉、井手、増子、伊東、北御
門、徳尾、天野、山口、及び予也。野猪及び雁、
牛肉等にて日本酒を飲む。痛飲健啖豪興勃然。
予頗る酩酊を極め、深更北御門の処に宿す。除
夕の詩一首を作る。

斗柄欲回夜色新。紅灯緑酒早在春。驅儺流俗
何須学。乱髮弊衣醉饒年。

明治二三年春王正月

正月元旦 陰天。朝井手、天野、徳尾三氏と出て
交民巷の我公使館に抵り、諸氏に先て両陛下の
龍影に拝謁し、館中の役員を巡訪賀正す。後公
使大鳥圭介氏に客室に面し賀を述ぶ。食堂にて
雑煮、冷酒の饗あり。下午中島雄氏に至り中餐
を吃し、晡時世良田少佐の招きにより井手と六
条胡同に至る。晚中島、天野、増子、井手、北
御門諸氏と世良田氏に会食す。深更増子氏に至
り宿す。是日公使館にて井手子元旦の古詩の韻
に和す。

落拓天涯猶未回。鳥兔匆匆年又来。思親至情
深於海。憂国一身瘦似梅。東海狂風瀾不安。
人間何物能繫歎。寄言我党衆君子。努力自愛
須加餐。君不見東流之水逝不還。青年何必誇
紅顏。回首前程幾万里。欲踏千水又万山。

正月初二日 晴天、風大。増子氏に早餐す。世良
田氏来る。談話移時、天野氏に至り中餐し、
晡時帰寓。昨日漢口高橋栄吉、片山敏彦両氏
の信臻る。東京荒尾氏が同志一同に寄せたる書
状を転致し来る。高橋及び予には一同相携て日
本に帰り呉れん事を伝え至る。荒尾の意にては
漢口本部も閑撤す。（この後一行分不明）せし
めたりと云ふ。又た本部よりは一時の切迫を支
ふる為め、緒方、片山、石川、福原、山崎諸氏

を湖南、四川等の各地に分遣し、書業雜貨等を
売り捌く事に取掛かれりと云ふ。四川の店も愈
よ撤去の筈にて、本年（旧暦）中に該地に在る
前田、松田等の諸氏も帰漢すべしと云ふ。是天
津仲、沢村、七里、瀬川等に賀正す。

正月初三日 好天。終日在家。晡時北御門氏来
る。夜徳尾氏に至り宿す。

正月初四日 好天。徳尾氏にて早餐し、井手氏と
同仁医院に至り、山口外三を訪ひ、帰途公使府
に至り三輪氏に小談。是日総理衙門の大臣各国
公使館を巡訪して賀正す。下午帰寓。

正月五日 好天。午前徳尾、増子二氏来訪。中餐
後井手、増子二氏と進城、公使府に至り今立書
記官を訪ひ小談。増子、井手と六条胡同に至り
世良田少佐を訪ひ晚餐し、夜国事を談じ、午前
一時天野氏に至り宿す。

正月六日 好天。天野に早餐し、晌午世良田氏を
訪ひ小談。帰る途公使府に至り、大鳥公使を叩
き小談。中嶋氏に至り護照の事を照会して帰
る。

正月七日 好天。気如春。午前徳尾氏に至り午食
し、共に出でて公使府に至り、中嶋氏に面して
護照願を出し、帰途徳尾氏と前門外精忠廟の玻
璃局に至り、田中善之助を叩き、留りて晚餐し、
夜帰寓。是日天津仲正一氏の信至る。天津武備
学堂、水師学堂の事を報ず。予の曾て依托せし
者也。

正月八日 半晴。是熊本佐々友房、熊谷直亮、山
田珠一、秋山逸子諸氏に送る書状と家大人及び
弟光彦に寄する書を認む。共に旅行の事を報ず
るなり。

米国宣教師の設立する孝順胡同の懷理書院に
は、男女生徒八十人あり。

支那の諺に、生随死不随、男随女不随と云ふ。
是れは男子死すれば明朝の衣服を被せ入棺せ
しむるにより死しては今の清朝に随はずと云
ふの意なり。女子は南方の者は寬袖の衣服を
着し、尚ほ明朝の旧に依る故に女不随と云ふ
なり

正月九日 好天。是日留別の詩一篇を作る。近日
將に陸路漢口に下らんとすればなり。

蘇州南去客路長。道入青山白水郷。年々慵聽

河梁曲。客中踪跡何匆忙。悵然時催望雲憂。
無奈中原□事秋。雪白燕国三千里。春動江事
南二百州。匹馬單身何取之。楚水吳山□題詩。
予期花紅柳綠日。閑写新詩報君知。

是日初て予の上海に帰る事を上海樂善堂藤田捨
二郎に報じ、併せて燕店処分の概略を通告す。
別に奥村、小浜等数氏と松井列及び牧大尉に新
年の賀状を送る。夜徳尾氏来る。

正月初十日 陰天、晚微雪。晌午天野君来訪。徳
尾氏亦来る。(この後半行分不明)源樓飯舗に
至り吃飯す。夜徳尾氏に宿す。

正月十一日 陰天。朝徳尾氏に在り、呉淩秋、田
中善之助二氏来る。田中氏予を送別の為め招か
る。呉、徳尾二氏と出で楊梅竹斜街万福局飯館
に至り飲む。呉氏酒問予に号を送る。送るに廓
如の二字を以てす。故に今日より宗廓如と号す。
帰て公館に至り、三輪を訪ひ帰る。下午中島雄
氏来訪。是日天津沢村繁太郎の信至る。其述懷
の詩一章を寄せらる。

正月十二日 晴天。日曜日。是日前門外に至り、
旅行用の諸品を購ふ。下午三輪、船津二氏来る。
下午公館に至り家大人に書状を送る。予の旅行
を報ずるなり。

京城、蒙古、満州、漢軍合せて四十八万の兵
ありと云ふ。或は曰く(□人と称する者も混
じて云ふ)營兵は三十六營、漸や用に立つ兵
は十四營と云ふ。

六条胡同に至り、天野氏に晚餐し、木村中尉の
処へ至り飲む。夜世良田少佐を訪ひ、国事を談
じ、午前三時に至り寝に就く。

正月十三日 好天。天野氏に中餐す。田中善之助
亦来。増子氏に在りて同文館の教官岱寿なる人
に逢ひ、世良田氏等と談話時を移す。田中氏と
上車帰る途公館に至る。新紙を受取て帰る途中、
之を失落す。徳尾氏在焉。田中氏亦来。是日呉
淩秋翁送子の詩一首を送らる。田霜巖氷壯北
風。□□□□□□□□。諸子豈為吾党事。□
□□□□□□。

正月十四日 好天。井手氏と下午永定門外に至り
散歩す。晡時徳尾氏来り、呉淩秋翁明日予を招
て送別の宴を開く事を告ぐ。

永定門外八里に海子あり。天子の打圍場にて

鹿猪等の類を畜ふ。墻壁(磚造)を繞らす、
一面四十里、周圍百六十里。神□營兵二万あ
り、駐す。冬時は京城に帰る。夏天は海子に
駐す。平生兵あり、内に練兵をも為すべしと
云ふ。

正月十五日 天。午前出て、徳尾氏を西河沿の泰
来店に訪ひ、呉翁及び田中等に会す。晌午呉翁
の招きにより田中、徳尾二氏と徳尾氏の寓、即
ち泰来店に在りて飲む。暮時帰寓。

正月十六日 好天。終日在家。暮時徳尾氏来訪。
是日総理衙門より護照下り来る。公使館中嶋氏
より転致さる。晡時徳尾氏来る。

正月十七日 好天。是日井手氏同封にて熊本の飯
田熊太翁及び佐々干城二君に新年状を送り、併
せて予の旅行を報告す。

正月十八日 好天。終日在家。下午北御門松二郎、
田中善之助両氏来訪。

正月十九日 好天。終日在家。井手氏と共に結算
に従事す。晡時徳尾氏来訪。

正月二十日 好天。是日陰歴十二月尽日たり。予
今日を以て堂務を完理し、商務の全権を挙て之
を汪緝甫に托し、明日より六条胡同に移寓せん
とす。故を以て頗る繁忙を覚ふ。七絶一首を作
り、積善堂書斎の中壁に題す、曰く、

関山万里勿傷神。況復離愁逸歲新。一去燕□
人那処。回巧応思都以春。

晡時木村忠得氏来訪談話移時帰る。晩徳尾氏来
る。夜同氏の処に至り宿す。爆竹声湧き感慨四
集、終宵眠らず。

正月二十一日 好天。是日清歴元旦たり。朝徳尾
氏より帰り帳簿を整理す。晌午井手、北御門両
氏来る。會計上の結算今日を以て漸く終了す。
積善堂委任状及び要用書類帳簿等を汪緝甫に引
き渡す。三時井手と堂を出で、道公使館に至り
大島公使に面し別を告げ、又た今立書記官に抵
り辞別し、六条胡同に到る。夜木村中尉の処に
在りて酒を飲み、三更世良田少佐に抵る。談話
深更に至り、北御門氏に宿す。是夜木村氏に在
りて中島雄氏送行の序文を贈らる。

正月二十二日 好天。終日六条胡同に在り、出発
の用□を為す。

正月二十三日 好天。世良田氏に中餐し、四時去

て交民巷の公使館に至り、中島雄の招饗に応ず。予の行を餞するなり。談話深更に至り、三輪氏に宿す。

正月二十四日 好天。朝前門外に至り積善堂の事務を整理し、汪緝甫に事務を引渡し、談話移時又た公使府に至り、喬文彬を訪ひ辞別。途山口氏を訪ふ、在らず。驢に騎して帰六条。

北京

北京旗人十六万二千五百二十八人、定額十五万人、京城八旗及び各営兵に支出する毎年の餉銀五百二十七万九千七百餘兩（旗民ノ俸祿銀も含み居るべし）

天津

武備学堂は一千八百八十四年の創立に係はり、学生を分て三等とし、一等は月に四兩半を給し、二三等は屋舎飯費を餉給し、学業の進歩を驗し月に一兩より五兩の賞金を給す。科目は数学、製図、理学、化学、地理学、史学、築城学、戦術、砲術、並に英独語学等にて、毎日課業は六時間、一学期を六ヶ月とす。李氏の淮軍は三万五千と云ふ。

兵務雑事

支那全国の陸軍費一千六百二十八万五千〇六兩、海軍経費は北洋四百万兩、南洋、福建、広東を合せ共に一千五百万兩以上とす。各地総督の年俸は百五十五兩、別に養〇銀あり。

夜世良田海軍少佐宴を張りて予の南遊を餞せらる。会する者は井手、北御門、増子喜一郎、伊東小三郎、天野恭、山口外三、木村等也。飲啖快話深更にして散ず。

日誌 明治二十三年正月二十五日起

宗方大亮

此の日誌は明治二十三年正月二十五日北京起程の日より始まり、漢口、上海を経て長崎に帰り、転じて東京に到る迄、併せて之を記す。蓋し予の北京を發して漢口に向ふや、途上耳の聞く處、目の見る所に随て日々之を手冊に録し、積で壺編を得たり。惜ひ哉、湖北襄陽に着するの当日に於て之

を途上に紛失す。北京を發してより陸路二十七日間の苦心悉く水泡に属す。今回、東京に帰るに及んで記憶に存する者を取て之を録すと云ふ。

明治二十三年正月二十五日、即ち清曆光緒十六年正月初五日、予將に武漢□□らんとし、別を六条胡同旧公使館の知人に告ぐ。世良田海軍少佐、木村陸軍大尉、増子喜一郎、天野恭太郎之諸氏、予を門外に送る。哈噠門に至りて山口外三氏に分れ、特り井手三郎、伊東小三郎、北御門松二郎之三子と驢に騎して彰義門を出つ。時に午前八時也。天氣快晴、風無ふして塵たたず。太行の山色依々人に可なり。石路を取て進み、小井、大井の二村を過ぎ、蘆溝橋司に達す。河水凍結武を布て過ぐべし。井手、伊東、北御門の三氏と桑乾河上に分袂す。此より予寥々独行忽ち千里の人と為る。情何ぞ堪へん。回顧すれば、予、二十二年九月を以て北京に達し、俗事に執掌する者茲に一年有半、諸友と共に常々寢食を同ふし、交情殊に深し。今又無端河梁の曲を聴く。殆ど人をして故郷を去るの思ひあらしむ。五里長新店に至る。北京より同行の徐姓と飯店に就て小飲、分袂す。行く二十五里良郷縣に達す。東門を入り南門を出つ。人家二三百、市塵盛ならず。東門内書院及び県署あり。驢を雇て豆腐店に向ふ。地勢微皺を呈す。二十五里にして達す。時に日暮、一小店を覓て之に投ず。人家二百許、豪富軒を並ぶ。亦た地方の一良鎮たり。此日行程八十里。蘆溝よりして至良郷之間、地勢寛平、只だ柳樹甚だ多し。春天発芽の時至らば、四辺の展望に妨げあるべし。

正月二十六日 快晴。詰朝豆腐店を發し、行く十五里琉璃河に至る。堅牢なる大石橋あり。橋側鉄篙あり、長さ四間余扁角形を為し、其頭三裂古色蒼然、何の代の者たるを知らず。橋の北頭石路を築て相属す。平地を抜く、頗る高し。北門を入り南門を出づ。小水あり路左に流る。行く十五里先鋒坡に達す。一に仙峯坡と曰ふ。店に投て打尖、日記を作る。又行く十里胡良を過ぐ。又五里涿州に達す。牌樓あり。對聯の佳なる者多し。入牌樓石路を行く。三百歩右側橋碑あり。其文は天子の撰する所。石橋を渡る。長

さ百四十歩、巨馬河上に架す。又た石路を行く三百歩、左右橋碑あり。右側の碑銘は直督李鴻章の撰む所、左側の碑に広濟橋の三字を刻す。又行く一千歩にして北門に入る。城の中央に通会楼、即ち鼓楼あり。楼壁逐州八景を画く。出南門州城人煙八九百、城壁南北一面三百五十間、南門を出で、路左に三義廟あり。規模宏大、廟下官道二岐、左者通山東、江南之官道也。取右方之大道而進行十五里、忠義店を過ぐ。一陋村耳、村中有碑、題曰張桓侯之故里。廟の上辺有張飛之祠。行く五里新店を過ぐ。又た五里松林店を過ぐ。又た十里沢畔村に達し投小店。行程八十里。

正月二十七日 雪。発沢畔村、行十里高碑店に至り朝食す。又た五里馬村河を過ぐ。又た二十里定興県に至る。東門を入り南門を出づ。門外万善寺あり。寺側碑あり、題曰黄金台遺址。飛雪飭に寒威人に逼る。是より小路を取り行く。里許一水あり。路右に沿て流る。河以西は地勢頓かに低平。行く 里易水を渡る。寒風雪を捲き、地上の雪五寸許、坐るに人をして荊卿入秦の当日を追懷せしむ。河幅十八間許、架土橋上遊少許の処に在り。二水相合して一と為る。河を渡れば即ち北河鎮にして小高の地に位す。人家百七十八戸、街上楊淑山の祠あり。祠門扁して、楊山生祠、椒先墓と曰ふ。門柱聯を掛く。曰く、日照丹心鹿周義激千秋節、天留浩氣龍比風高百世師。出南門、降雪益す甚し。行く五里許にして途上驢馬に騎し、行く二十五里固城店に達し、南門を出づ。寒威凜烈四肢凍らんと欲す。投小店中餐す。行く十二里にして田村を過ぎ、又た八里白塔村を過ぐ。村中塔あり。又た十里安肅県に達し、北関の客店に投宿す。行程一百〇五里。

正月二十八日 陰天。黎明出安肅北関之客店。積雪五六寸歩走頗る艱む。過北関市街甚だ長し。入北門出南門、渡一河。行少許、路右有碑、題曰、魏隱士劉伶の廟碑。四望一白。平々坦々無分毫之高低、千里渺然望極而止、恰如行銀盤之上。時太陽躍東天、雪光射眼壯觀不見言。如斯之雪景亦た容易に見るべからず。行く十五里劉祥店に至り、一小店に投じて朝食す。又行く五

里荊塘舗を過ぐ。荊軻之故里也。又五里曹河店を過ぐ。又十里過徐河橋、又行十里余投路右之三元宮小休。又行三里許入保定省城之北門、右折出西門、西関の飯舗に投じて中餐す。未出西門在城内就錢舗兌換銀子。過靈西寺前右折進。以雪後之故道路泥濘不好行走。誤行岔路二十五里、大激店を過ぐ。保府あり、此に至る麦隴涉行村落之距離甚遠、加之岔路百出屢迷之、至大激店始合大道。行二十里達陞陽駅。覓小店投之時暮色蒼然。是日行程九十五里。夜作紀行製地圖。山西太原人張姓亦來宿、約明日同行。深更就寢。夜寒頗嚴、被毛布就寢。

正月二十九日 晴。黎明与張姓乘馬車、發陞陽駅。朔風凜然、欲指墮耳飛。行十五里過方順橋。又十里過十五計村。又二十里達望都県北関、下車投店朝食。謁帝堯廟、入北門出南門。城内外人家五百許。又行三十里過清風店。南口有清風泉。又三十里到定州城西関、投大店。夜□酒吃肉陶然一醉、就寢。是日行程一百五里。

正月三十日 好天。

2. 明治 24 年 4 月～ 25 年末の日記

1 で触れたように明治 23 年 8 月 1 日から 24 年 4 月 17 日までの日記は今見ることができないので、その間の宗方の足取りも正確には追うことができないけれども、その前後の日記の記述、及び『対支回顧録』下巻「宗方小太郎」の記述から、23 年 9 月初めに日清貿易研究所の関係者と共に選抜した生徒 150 名を引率して上海入りし、その後は生徒監督の任に就いて所長荒尾を手伝いながらその運営に関わっていたことがわかる。したがって 24 年 4 月以降の日記に書かれていることのメインはそこでのもろもろの動きであり、そのため従来研究所に関する具体的な動きを証言する資料に乏しい状況をこの時期の日記によって一定程度補うことが期待できるのである。

ここで、すでに知られているところにしたがって研究所発足前後のことを簡単にまとめておくならば、研究所は 22 年に荒尾が政財界各方面に働きかけて資金の調達を図り、順調には事が運ばなかったもののついには時の参謀次長川上操六の助力で内閣機密費から 4 万円が支出されることに

なって、23年春には全国から生徒募集を行い（そのときの状況は、1で触れたごとく宗方の23年5月から7月の日記にも記録されている）、選んだ150名の生徒を上海に連れて行き、イギリス租界の競馬場近くに中国人家屋10軒を借りて教室と生徒宿舎、職員宿舎に充て9月20日に開所式を行って授業を開始した（注）。しかしその後も資金繰りがうまくいかず、授業も当初の計画通りには行われなかったことから、研究所の運営に不満、不安を抱く生徒が続出して30数名が退所する事態となり、発足して半年足らずにして研究所は極度の困難を抱えることになった。

そうした困難に直面した時期の日記を見ることができないのは遺憾だが、これから見ようとする明治24年4月からの日記にもその辺の状況を反映した動きが記録されているのである。例えば、4月19日から何度か研究所移転のため「洋房」（西洋風の建物—大里）を探していることが書かれているのは、財政逼迫につき校舎を縮小して家賃の軽減を図ろうとした動きであり、6月2日にはその移転を完了したようである。また、2月に授業内容等に不満な生徒30数名が荒尾所長に意見書を提出し、荒尾が説得を試みるもこぞって退所してしまった事件について、その顛末が当時上海で日本人松野平三郎が発行する『上海新報』48号と49号に生徒の意見書を荒尾の弁明付きで掲載されたことから、研究所を擁護する生徒が抗議して大挙新聞社（修文書館）に押しかけて松野を追及し、ついには擁護派の意見「日清貿易研究所現存生徒諸子の決心」を生徒78名の連名で同紙50号に掲載させたばかりか、52号限りで同紙を廃刊させてしまった前後の生徒たちの息巻く様子や彼らをなだめつつ対策を講じる荒尾や宗方らの動きを、5月6日に始まって断続的に記しているのである。

上海新報糾弾が一段落してからは余り大きな事件はなかったようであるが、その後も事あるごとに研究所に関する記録を残している。それは、開所1周年記念式典（10月3日）であったり、天長節での拝賀の礼（11月3日）であったりするが、日常的な行事としては生徒の作文を添削したことや小試験や期末試験をしたこと等を記してい

る。更に25年になると、はっきりそれとは書いていないが、荒尾が4月末に帰国したあとの所長代理を勤めて動いている根津一の名前が5月以降の日記の随処に登場する。彼はそれ以前には漢口にいることが多かった。また、参謀高橋大佐等が来所して生徒の中国語と英語の演説を聞き、所員と会食したこと（6月9日）や、当初研究所の活動の大きな柱の一つと目されていた日本商品を宣伝するための「陳列場」をいよいよ設置することになったこと（7月8日、12日）等を伝えている。

さて、この時期の日記の一大特徴とも言えるのは、連日朝昼晩を問わず入れ替わり人が彼のもとを訪ねてきては話したり飲食を共にしたりしていることである。その多くが研究所の生徒であるのは、前述のごとおそらく宗方が生徒を監督する任に就いていることと関係があり、宿舎が生徒の宿舎と同じ敷地にあったこととも関係があるだろうが、とにかくひっきりなしに生徒が訪ねて来たり共に外出したりしている様子を知るのは驚きである。中で別府という生徒はひときわ多く訪ねてきており、彼と宗方が同性愛の関係にあることを日記中に何度も記している。その他、日記中に登場するおびたしい人との往来から何らかの興味ある人間関係を知ることができるかどうかは、今後の課題である。

研究所関係以外で日記中に登場していて興味深いのは、楽善堂グループ員との交流である。時折上海楽善堂に出かけてはそこで働く山内崑と会っており、漢口から黒崎恒次郎が上海に来たり、日本から高橋謙が来ると滞在先の楽善堂に会いに行き、北京から石川伍一が日本に帰る途中で寄ると宿まで会いに行つて、普段顔を合わせる機会のない者同士の出会いを大切にしていることが分かる。但し、これらの出会いを記録する際に漢口楽善堂のその時々状況については何の記載もないのは、彼らと会った際に漢口のことが話題にならなかったということよりも、漢口には最早語るに足る活動はないまま辛うじて店が維持されているだけであることを暗に語っているのではないかと推量される。この時期語るに足る活動は方針を転換して始めた研究所の取り組みしかなかったので

あろうが、グループの今後の活動はどうあるべきかの議論は時折戦わされていたようであり、例えば25年3月6日の日記には「所長招くにより至る。我党今後の方針に付き、興亜会様の者を設立する事に付き時勢の緩急により大に意見を異にし激論三時間に亘り…」とある。

漢口楽善堂グループ員以外の人物との出会いで言えば、25年の5月から6月にかけて上海に来た同郷熊本県出身の宮崎寅蔵（滔天）に会っていることである。宗方は宮崎の兄八郎の名前を知っており、すでに帰国していた北御門松次郎の手紙を携えてきた宮崎とは、初対面だったとは書いていないもののその可能性はある。しかし宗方は「男丈夫なり」と書き、意気投合して何度も行き来しているのである。

他に、清国軍の演習を見に出かけているのは北京と同じであり、25年1年間で4度も彼の部屋が盗難にあっているのも面白い。また、日頃付き合いがあった尾本という日本人が24年7月上海城内で中国人を斬殺して地元の警察に逮捕され、取調べを受けて逮捕からおおよそ2ヵ月後に長崎に護送されるという事件があったことが記されていて、興味を引く。

（注）『東亜同文会史』第一編第一章二「日清貿易研究所」、霞山会、昭和63年。

日誌 上海

明治二十四年四月十八日起

四月十八日 晴。終日在家。晩中西、西村等と小山氏に小飲。終りて生長を集め諸事を商量す。夜別府、外山、成田諸君来訪。十一時辞帰。

四月十九日 晴。日曜日。午前八時より荒尾、根津、西村、高橋、小山、中西、外所員一同と浦東に遊び鶏を割き飲む。下午在留日本人十余人、海軍省用地に於て角力を為す。三時小浜と共に帰る。荒尾と出て研究所を移すに用ゆる洋房を見る。後小山、西村、高橋、草場等亦来る。六時半帰寓。夜清田、松倉、井口、別府諸子来訪。後沢本、江口、岡部、藤崎来談。藤崎十二時過ぎ帰る。

四月二十日 晴。下午小山、西村と下海浦に至り洋房を捜す。適當の者なし。夜外山、別府、成

田等来訪。九時根津氏を訪ひ禅理を敲き帰る。

四月二十一日 晴。朝東和洋行に至り松井を訪ひ、帰る。外山、成田、藤崎諸子来訪。晡荒尾を訪ひ外山を漢口に遣る事に付き照量す。承諾を得たり。夜別府、外山、成田、吉田諸氏来訪。九時過別府真吉君来り、宿す。同氏の病未だ癒へざるを以て事に及ばず。

四月二十二日 晴。下午、成田来り別を告ぐ。刀一本を餞す。晩所員一同荒尾の処に飲む。根津氏を餞する也。九時所員生徒一同根津氏を送る。十一時帰る。宮嶋大人、及び漢口楽善堂諸子に寄するの信を成田鍊之助に托す。

四月二十三日 雨天。終日在家。岡、中西、高橋、尾上、藤崎及び新来伊知地季綱等前後來訪。夜清田十八、別府真吉、赤峰国弥太諸子前後來談。荒尾氏亦来訪。九時草場氏の招餐に応ず。高橋、中西、御嶺、尾上、米沢、西村諸氏在焉。小談、辞帰。北京中島雄、荒賀直、石川伍一、木村忠得諸氏に寄するの信を認む。又た吳菊圃の信も中嶋氏に托し転致する事とせり。十時別府真吉君来り、宿す。情緒纏綿。

四月二十四日 陰。終日在家。下午、原田、右田諸氏来訪。午前十時小山、西村等と出て高橋謙の帰国を送る。夜藤崎、本嶋来訪。九時別府真吉君亦来訪、十時帰る。

四月二十五日 陰雨。土曜日。是日語学教師桂林氏北京に帰る。予、中島雄、荒賀、石川、木村諸子に寄するの信を托す。晌午別府君来談。夜古庄、尾上、水谷三郎、和田純、大川愛次郎等来談。大川其近作の詩数首を携へ来り正を乞ふ。

四月二十六日 日曜日。雨天。終日在家。午前古庄、別府二氏来。別氏談じて十二時に至り帰る。夜別府、大川、右田等来談。十時帰る。

四月二十七日 晴。午前小浜、別府二氏来談。十二時帰る。夜中西、池野、藤崎等前後來訪。十時前別府君来る、同衾。

四月二十八日 陰。下午西村、小山等と出て散歩。郵船会社碼頭に至り教頭を迎ふ。夜清田十八、右田亀雄二氏来談。

四月二十九日 晴。午前別府君来談。夜別府君来。快談、十時に至て帰る。

四月三十日 晴。午前十一時、中庭に於て教頭猪飼氏の就任式を挙行す。下午三点鐘、別府真吉君と佐藤照相舗に至り撮影す。夜外山、伊地知、別府諸子来訪。片山亦来。

五月一日 陰天。下午雨。終日在家。夜別府真吉氏来談。桑原信五郎氏亦来。十時別府君来り、十一時帰る。春雨蕭々、情思纏綿。

五月二日 晴天。午前根津乾氏及び黒崎生、漢口より来着。緒方、宮島、藤島、前田諸氏の信到る。奥村、尾本、糸川諸氏来訪。晩食後小山、西村と西郊に散歩す。暮春の風色殊に人に可なり。是日寧波藤吉生に送書し、曾て立替置きし金を送り呉れん事を嘱す。貧乏非常なればなり。夜松倉、武藤、森田、別府、藤崎、伊地知、井口諸君来談。十時帰る。

五月三日 晴天。日曜日。午前桑原氏と郵船会社に至り、高道竹雄を訪ひ小談、帰寓。下午別府真吉君来り我が為に剪髪す。夜土井伊八、別府真吉、右田、松倉、清田諸氏前後来訪。

五月四日 晴天。午前根津、小山、西村と出て洋房を睨る。牧、小浜等来訪。夜別府真吉君来談。十時に至て帰る。十時過ぎ又来る。同衾情□無限。

五月五日 晴。終日在家。晌午別府君来談。下午田中善之助来訪。今日来着せし者也。少焉、糸川、奥村、片山等亦来訪。

五月六日 陰天。午前荒尾の所に在り、家屋移転の事に付き商量す。下午修文館に至り、浅野を訪ひ上海新報の事に付き云々し、共に横浜丸に至り小談。帰りて荒尾の処に小談。夜右田、別府二氏来訪。

五月七日 晴天。鳥居赫雄に発信。晌午別府君来。夜藤崎、別府、外山、伊地知、古庄諸氏来談。是日服代四円半をはらふ。

五月八日 晴。午前出て横浜丸に至り、牧相愛、河野久太郎の帰国を送る。尾上正連亦た病者を護して長崎に至る。是日寧波藤森茂一郎より返却の銀子を奥村より受取る。下午田中善之助来訪。七里恭、別府真吉亦来訪。夜本島正礼来談。夜十時別府来、同衾。

五月九日 晴。午前西村の処に於て上海新報に研究所の事を載せし件に付き商量す。別府君来談。

下午藤崎、伊地知、右田、楠内、別府諸氏前後来訪。夜新聞一件に付き生徒一同講堂に会し議する所あり。予輩其間に奔走し、私かに之を助く。十時後委員楠内、三沢、沢本等来り、會議の結果を報ず。十二時寝に就く。

五月十日 晴。熱氣頗る甚し。朝沢本、三沢等来り。昨夜の件に付き商量す。別府君亦来訪。下午伊地知、元嶋、楠内ら来談。別府君亦来る。伊地知亦来。原田、白岩前後来訪。夜幹事室に至り生徒の會議を傍聴す。

五月十一日 晴。終日在家。尾本生来訪。夜大川、伊地知、別府、藤崎、藤城ら来談。九時に至て帰る。

五月十二日 晴。午前藤嶋健彦、黒崎等来談。別府君亦来、十二時帰る。晩西村と公園に散歩す。途中魯国皇太子、我国に在りて負傷せしを聞く。夜藤嶋、尾本諸氏来談。

五月十三日 晴。終日在家。下午別府、楠内、三沢等来訪。夜別府、右田、清田諸君来訪。夜別府君と約あり、来らず。書を作りて其不信を責む。

五月十四日 雨天。午前、西村、小山、荒尾と出て洋房を見る。下午研究所移転の計画を為す。三時別府君来訪、昨夜の事を謝す。青木生長亦来談、移時而帰。尾本、片山等亦来訪。夜藤嶋健彦、本島正礼、小山平次郎、岡次郎等前後来訪。十時別府真吉君来り、十二時帰る。

五月十五日 晴。午前山内崑の信東京より来る。別府君来訪。下午山内崑に回信す。漢口成田生より来信。夜藤嶋健彦を餞す。会する者、別府、古庄、片山、小浜、平川、藤崎、伊地知、吉田等也。中西、尾本亦来会。十時に至て散ず。

五月十六日 晴。下午西村、小山、中西、荒尾等と出て洋房を見る。奥村、別府二氏来訪。夜荒尾氏に至り云々を談じて帰る。藤城、池野来談。十時別府君来り宿す。

五月十七日 晴。日曜日。終日在家。生徒池野、藤城、松倉等数人上海新報社に至り詰問する処あり。下午別府君来談。晩食後出て修文館傍辺地に至り生徒談判の模様を見る。十二時始て要領を得、新報社主より謝罪状を取り、生徒三十余人東和洋行に至り脱所生徒を詰問す。予、小

山、小浜等と十二時半上車帰所。酒を備て生徒の帰るを待つ。二時半一同帰来。痛飲快話、三時半に至て散ず。

五月十八日 半晴。午前別府君来訪。夜伊地知、藤崎等来訪。西村の処に至り、修文館行の生徒二十余人を集めて談ずる処あり。

五月十九日 晴。終日在家。午前別府君来訪。藤城、松倉、伊地知亦来談。是日家大人の書到る。晡時荒尾の処に至り西村、小山等と修文館の事に付き照量す。夜大川、楠内、隈元等来訪。夜十一時別府君来り、本夜来宿を辞す。

五月二十日 晴。下午清田、別府両君来談。晚餐後西村、小山と公園に散歩す。夜西村の処に於て小山等と小飲。十時別府君来り宿す。

五月二十一日 晴。終日在家。午前別府君来訪。夜森氏に於て糸川直元、奥村金太郎両氏を餞す。会する者二十余人。小山、西村等と荒尾の処に至り上海新報に関する事件を照量す。予荒尾氏と争論する処あり。

五月二十二日 晴。終日在家。午前別府来談。夜中西正樹、平川常義二氏を荒尾氏に餞す。会する者所員十余人。飲啖、九時に至て帰る。

五月二十三日 晴、晩雷雨。午前九時小山、西村等と出て、中西、平川、糸川三氏の帰国を送る。帰途東和洋行に至り松井等訪ひ小談。上車帰寓。別府氏来訪。下午伊地知、藤崎、別府三氏来訪。古庄、小浜亦来る。談話、晡に至て帰る。夜十時別府君来り十一時帰る。

五月二十四日 陰天。日曜日。八時別府君来談。本島、片山、沢本両氏亦来、談話。晌午に至て帰る。夜本島、小山、平池と市川、水谷、池野、土井諸氏前後来訪。十時に至て帰る。十時別府、伊地知両氏来訪、十一時帰る。

五月二十五日 晴。午前別府君来談。夜小山の処に飲む。大川、別府、池野、小浜諸氏前後来訪。十時に至て帰る。十時過ぎ別府君来る。

五月二十六日 晴。終日在家。朝草場氏に至り、頼裏、頼三樹、篠崎等諸名家の真蹟を見る。晌午別府君来訪。夜池野、小浜、藤崎、右田、別府、伊地知諸君来談。十時に至て帰る。

五月二十七日 雨天。終日在家。午前予以囑するに幹事の再任を以てす。後日を待て答ふる有ら

んとす。下午荒尾の処にて生徒募集の件に付き商量す。

五月二十八日 陰。午前荒尾、小山、西村等と出て洋房を見る。是日鳥居、尾上、古川、沼、矢島、宮原、浅井等に寄するの信を認め奥村の帰国に托せんとす。午前別府君来談。漢口根津氏来着。下午出て領事館に至り奥村を訪ふ、在らず。七里等と談じ之を待つ。二時帰来。諸友に与ふるの信を同氏に托す。三時半帰寓。晡時外山、伊地知、別府三氏来談。夜十時別府君来り、十二時帰る。

五月二十九日 半晴。午前伊地知来訪。午後小浜、片山と出て郵船碼頭に至り、奥村金太郎の帰国を送る。晚餐後、池野生来談。八時半に至て帰る。本島、古庄二君来談、十時に至て帰る。予荒尾氏に至り、同氏が伊地知生に語りし話題の不穩なるを惡み就て詰問せんとす。已に寢に就けるを以て已み、小浜の処に至る。別府、藤崎、伊地知諸君在焉。談話、十一時半に至て帰る。

五月三十日 晴。朝荒尾に至り云々す。午前別府君来る。荒尾の言に就き論す所あり。下午小山、西村等と荒尾の処にて家屋移転の事に付き商量す。(この後一行分不明)夜伊地知、別府、磯長、白岩諸氏前後来訪。十時別府君来り宿す。徹宵同衾。

五月三十一日 陰。午前小浜と出て公園を散歩し、帰途東和洋行に至り、松井列を訪ひ中餐し、二時帰寓。晡尾本、小浜、別府、伊地知諸氏来訪。晚餐後尾本、小浜、小山諸氏と飲む。外山、片山等亦来訪。

六月初一日 終日研究所移転の事に奔走す。夜古庄子来り、宿す。

六月二日 微雨。研究所移転に従事す。夜西村等と飲む。

六月三日 晴。市川、清田、青木、伊地知諸氏前後来訪。下午二時生徒一同と味蕪園に至り飲む。五時伊地知の酔を扶けて帰る。夜平野、大川、池野、別府、甲斐、根津、沢本諸氏来談。九時別府君来り同衾、情緒纏綿。十時帰る。

六月初四日 晴。終日在家。下午別府君来り小談。

六月五日 晴。終日在家。下午三階に移転す。小

浜，別府，藤崎，伊地知諸氏来り助く。熊本岡本源次，熊谷直亮に寄するの信を作り明日帰県の池辺秀二に托す。

六月六日 晴天。午前出て芥川規矩司，外生徒の帰国を送る。下午別府，伊地知，藤崎等来訪，談話移時而帰。夜十時和田，外山，藤崎，伊地知等来り，十一時帰る。

六月七日 晴天。日曜日。下午別府，伊地知，森永，尾本，市川等来訪。夜別府君来談，九時に至て帰る。九時約あり来る，隔壁人有るを以て帰る。

六月八日 晴天。終日在家。晩別府君及び楠内，藤崎，小浜等来談。九時十五分，別府来り，十時帰る。

六月九日 晴天。終日在家。下午別府君来談。晡時別府，外山，伊地知諸氏来談。夜池野君来談。是日牧相愛，尾上正連之信臻る。

六月十日 晴。東京中西正樹の信到る。中餐後出て旧研究所に至り，桑原生を訪ひ共に出て青年会に至り小談。去て領事館に至り七里恭を訪ふ。北京中島雄の信及び小刀子二本を受取る。中島の贈る所也。夜池野，伊地知，本島等来訪。九時別府君来り，茶を取て帰る。

六月十一日 晴天。下午緒方二三漢口より来る。別府，伊地知，藤崎，藤城諸氏来談。夜緒方，片山等と飲み，十二時寝に就く。

六月十二日 晴天。午前小浜と松井列の帰国を送る。東和にて中餐す。下午別府君来訪。小刀子一本を贈る。西村，緒方，小浜等亦来談。夜九時別府君来り，隔壁人有るを以て帰る。

六月十三日 晴。午前伊地知来談。七里恭亦来訪。下午別府君来談。緒方等亦来る。六時半所員一同荒尾氏に晚餐す。九時半別府君来る。

六月十四日 雨天。日曜日。午前，別府，森田両氏来談。御幡，鐘崎二氏亦来る。御幡氏に中餐す。下午渡辺正雄，楠内友次郎等来訪。夜別府，土井，伊地知，井口，清田，松倉，森田，右田等来訪。九時に至て帰る。

六月十五日 晴。終日在家。下午別府君来談。夜伊地知生来訪。

六月十六日 晴。午後別府，藤崎両氏来談。八代人中島裁之なる者西京より来り。家弟及び井手

三郎の信を携へ来る。弟は反省会に従事せりと云ふ。是日会匪事件の調査に従事す。夜伊地知，武藤両氏来訪。二時半寝に就く。

六月十七日 晴。終日在家。下午別府君来談。緒方，藤崎，伊地知亦来談。夜

六月十八日 晴。午前別府君来談。緒方，片山，小浜等亦来る。下午藤崎，伊地知，大川，□原，右田，松倉，教頭等前後来談。是日午前緒方と出外，東和洋行に至り，中島裁之を訪ひ，同人の住処に付き周旋す。帰途工部書信館に至り，北京中島雄に発信す。夜九時半別府君来り，十時二十分帰る。

六月十九日 晴天。午前別府，沢本，三沢，右田，赤峰等来訪。午後北京石川伍一の信到る。別府君来訪。洋褲一件を贈る。夜，右田，小山平次郎等来談。

六月二十日 晴天。午前出て古庄弘，藤木某の帰国を送る。十時帰る。別府君及び緒方，小浜等来談。下午別府君来談。晡時西村，緒方，片山，沢本等来訪。夜井口，清田，松倉，藤城等来訪。十時本嶋正礼，別府真吉等来談。

六月二十一日 晴。終日在家。日曜日。午前別府君来談。中島裁之亦来る。十一時別府君来る。予為に剪髪す。小浜，伊地知，緒方等来談。晡時福原林平，同伴十郎来訪。夜白岩，伊地知，別府，原田，河野堅，藤崎等来談。九時帰る。九時伊地知を呼び，同人身上の事に付き注意する所あり。

六月二十二日 晴天。下午二時別府君来談。晚餐後西村，小浜と公園に散歩す。月色高潔。夜小山の処に談ず。

六月二十三日 晴天。午後別府君来談。二時過ぎ別府君来談，四時帰る。東京荒賀直順及び牧相愛の信到る。夜九時別府君来る。十時帰る。夜雷雨。

六月二十四日 半晴。午前平山某来訪。下午別府君及伊地知氏来談。晡に至て帰る。夜楠内生来談。

六月二十五日 晴。終日在家。下午別府君来談。晡時尾本生亦来る。外山八代吉，橋本勝等来り，辞行。明日を以て帰国すればなり。東京荒賀直順に寄する信を橋本生に托す。夜別府，伊

地知来談，九時帰る。

六月二十六日 晴天。下午小浜，片山，緒方，西村等と大和艦に至り参観す。小尉谷村某誘導す。帰途浦東に至り小憩，帰所。伊地知，藤崎，磯長，小浜等来談。夜八時別府君来談。夜八時半同衾，十時二十分帰る。

六月二十七日 晴天。終日在家。十一時別府君来談。下午別府君亦来訪。夜沢本，中島，本島，伊地知等来談。晡時西村と猪飼の処に至り談ず。

六月二十八日 雨天。日曜日。是日大野満太氏の信来り，広岡安太□蹤不明の事に付き照会す。午前別府，藤崎，森田諸氏来談。夜野中，別府，郡島，原田，右田，井口，清田，小山，緒方等前後来訪，九時帰る。九時水谷，甲斐，楠内，栗村等来談，十一時帰る。

六月二十九日 陰天。午後伊地知，別府，井口，松倉等来訪。

六月三十日 陰天。午前別府君来談。下午前田彪，漢口より来着。晚餐後別府君来談。緒方，前田等亦来る。夜赤峰，井口，松倉，本島等来訪。九時別府君来り，十時帰る。

七月初一日 陰天。午前緒方，片山二氏と前田彪を信春客棧に訪ひ談話。移時共に出て同芳茶館に至り暢談。午に至て帰る。下午別府，伊地知，森田，清田，井口，松倉，赤峰，右田，藤崎等前後来訪。晚餐後別府，伊地知諸氏来談。九時伊地知生来談，十一時帰る。

七月初二日 雨天。是日広岡安太実父大野満太氏に返信を認む。下午別府君来談。前田彪，緒方，片山，本島，佐藤等亦来訪。是日北京中島雄氏の信到る。其著述に係はる清魯関係論一部を贈り来る。夜荒尾の処に於て前田の帰国を餞す。予及び緒方，片山列席す。佐藤謙三，別府，赤峰，小山，前田，緒方，松倉，元島諸氏前後来訪。

七月初三日 晴天。六時出て神戸丸に至り，前田彪の帰国を送る。赤峰，井口，平山等亦た本便を以て帰県す。下午別府君来談。夜御幡，別府，緒方諸氏来談。九時伊地知来り，十時帰る。

七月四日 晴天。土曜日。終日在家。下午伊地知，別府，藤崎，緒方諸氏来訪。田中善之助亦来。夜白岩，西村，伊地知，別府，御幡，草場，小

浜，武藤等来談。是夜根津，緒方二氏漢口に帰る。昨夜尾本寿太郎，七里恭，福原伴十郎等城内に於て清人一名を斬殺す。

七月五日 晴天。午前七時別府来談。及時藤崎，伊地知，森田，中原諸氏亦来談。下午沢本生来談。伊地知，小浜，別府三氏と出て領事館に至り，浦田氏を訪ひ入牢中の尾本等に面せん事を乞ふ，許さず。小談，帰寓。夜群島，平野，大木，大川，原田等来談。九時別府君来り，十一時帰る。

七月六日 晴天。午前本島，村上二氏，尾本等の事に付き金員募集の件を商量す。午前別府来訪。下午中島氏来談。福原林平来り，尺牘を托す。別府君来訪。夜義捐募集發起人山田某来訪。予研究所所員一同の捐金九円を同氏に引渡す。草場氏来訪。伊地知，岡田晋，和田等来訪。九時別府君来，小談帰る。白岩，甲田等先後来訪。

七月七日 晴天。午前片山と領事館に至り，尾本に寄するの信を托し，洋服一着を贈る。帰途中島裁之を訪ひ小談，帰寓。別府君来訪。下午伊地知，別府，藤崎諸氏来訪。夜右田，清田，松倉等来談。九時伊地知生来り，云々談じて帰る。夜作文を削り，三時半就寝。

七月八日 陰天。終日在家。午前別府君来談。下午伊地知，藤崎，別府諸氏前後来訪。晩別府君来談。森田，小山等亦来る。

七月九日 雨天。終日在家。下午別府君来談。晚餐後伊地知，藤崎，別府，草場，西村，御幡，小浜諸氏前後来訪。九時

七月十日 雨天。終日在家。下午別府，藤崎，伊地知諸氏前後来談。晩別府君来談。十時別府君来訪。

七月十一日 雨天。終日在家。下午別府君及び藤崎等来談。夜清田，右田，松倉等来談。八時より海軍□某，土耳其行の談話あり。九時半別府君来談。

七月十二日 雨天。日曜日。午前小山来談。晌午別府君来談。下午別府二君亦来談。夜別府，松倉，藤城，野中，甲斐，群島，白岩，伊地知，藤崎，小浜，池野等来談，九時帰る。

七月十三日 半晴。午前片山と蘇州河辺に散歩す。鳥居赫雄。外山八代吉の信臻る。下別府，藤崎

二氏及び伊知地生前後來談。夜小山，片山等來訪。九時別府君來る。

七月十四日 雨天。終日在家。下午別府，藤崎諸氏來訪。晚餐後別府，伊地知，河本，武藤，右田諸氏前後來訪。夜田辺醫生來着。荒尾の処に面晤す。

七月十五日 晴天。終日在家。山崎羔三郎之信到る。別府君來談。下午別府，藤崎等來談。

七月十六日 晴。終日在家。下午別府君來談二次。夜片山氏を餞す。九州人二十余人。

七月十七日 晴。下午別府，藤崎，伊地知諸氏來訪。是熊本佐々，内藤，浅山，秋山，葉室，佐野，岡本，及び山崎羔三郎等に寄するの信を片山氏に托す。夜別府君來り。十一時前歸る。深更片山の帰国を送るの序一篇を作る。

七月十八日 晴。朝出て片山の帰国を送る。午後伊知地，別府二氏前後來訪。夜別府，河野二氏來談。

七月十九日 晴。午前別府君來談。晌午歸る。荒尾氏來訪。伊知地亦來る。下午別府君來談。晚餐後別府君と南郊に散歩す。夜沢本，小野，清田，右田，別府，田鍋，大川，和田，楠内，富永，江口，甲斐，本島，水谷，森田等來訪。十時半歸る。

七月二十日 晴天。午前別府，田鍋，中島，伊知地，藤崎諸氏前後來訪。下午別府君來談。晚餐後別府と南郊に散歩す。八時別府，池野，藤崎諸氏來談。荒尾の処に至り飲む。十時別府君來る。

七月二十一日 陰天。下午別府真吉君來談。中島裁之，清田，松倉，藤崎諸氏亦來談。東京荒賀直順及び古庄弘，並に家大人の信到る。夜別府，藤城，伊知地諸氏前後來訪。和田純亦來る。十時後出て練兵を見る。

七月二十二日 晴天。午前田鍋，別府二氏來談。下午別府，清田，藤崎三氏前後來訪。四時荒尾の処に至り談ず。晚餐後，伊知地生來談。夜別府君來談。

七月二十三日 晴。午前別府君來談。荒尾氏より金八円受取。晚餐後別府君來談。十時別府君來る。

七月二十四日 晴。午前清田氏來り別を告ぐ。家

大人に奉贈の銀五円を托す。十一時上車，清田氏を送る。常盤に至り小憩。去て東和洋行に至り，小浜と共に中餐す。一時歸る。別府君來訪。伊知地，川野，田鍋諸氏亦來訪。晚餐後右田，松倉，別府，藤崎，森田，伊知地諸氏來談。雷雨。

七月二十五日 晴。終日在家。午前別府君及大川來訪。下午別府及び根津氏來談。夜田鍋と根津氏に至り談ず。九時半別府君來訪，□夜外出の違約を□す。

七月二十六日 晴。日曜。終日在家。午前別府，伊知地，藤崎諸氏來談。晩田鍋氏來る。酒を飲で談ず。群島，小浜，別府，和田，伊地知，藤崎等來訪。九時歸る。藤森茂一郎來訪。十時別府君來る。十二時歸る。

七月二十七日 晴天。午前別府君來談。下午野中，別府，池野，伊知地，藤崎諸氏來談。六時別府君と酒を携て南郊に散歩す。

七月二十八日 晴天。午前別府君，右田來談。下午別府君來談。晚餐後別府君と南郊に散歩し，八時歸る。夜別府君來談。藤崎，藤森二氏亦來る。作文を改削して一時に至る。

七月二十九日 陰天。午後別府君來談。伊知地，右田，松倉諸氏前後來訪。晚餐後南郊に散歩す。別府君亦來る。是日木下賢良の信臻る。楠内，藤崎，伊知地諸氏來談。十時別府君來る。情緒纏綿，□是從來第一とす。很歡喜的了不得。

七月三十日 晴天。研究所の図を製し，午後四時終る。下午別府，伊知地，野林，小山諸氏來談。夜和田生來り，金蘭蔣の題字を乞ふ。別府君來談。土井伊八來談。十時歸る。

七月三十一日 晴。午前別府君來訪。下午別府，大川二氏來談。四時半歸る。和田生亦來訪。九時過ぎ別府君來談。

八月初一日 晴。六時別府君と酒を携へ味藪園に遊ぶ。荷花春に開き涼氣大に人に可し。八時半相携て歸る。十時別府君來る（不舒服）。

八月二日 風雨。日曜日。午前別府君來訪。下午又來訪。夜藤崎，川野，隈元，高橋正二，向野，内田，別府，原田，池野，甲斐等來談。十時歸る。

八月三日 晴。午前別府，藤崎等來談。晩西村と

味菴園に散歩す。夜別府、右田両氏来談。
雨。

八月四日 下雨乍晴。午前別府君来談。下午藤崎、
別府両氏前後来談。夜別府、白岩、草場、藤崎、
小浜、福原諸氏前後来訪。

八月五日 晴天。午前八時工部書信館に至り漢口
緒方二三氏に発信。銀票拾円を郵送す。帰途樂
善堂に至り、吉田を訪ひ小談、帰寓。下午別府
君来談。晚餐後別府君と南郊に散歩す。帰て別
府君来談。十時別府君来り、十一時帰る。陸拾
四〇

八月六日 晴天。午前別府君来談。下午佐野、家
大人、矢島諸氏の信臻る。下午別府君と南郊に
散歩す。夜別府君来談。夜教頭の処に至り談
ず。

八月七日 晴。下午別府君来談。藤崎亦来。晚食
後別府君と南郊に散歩す。夜別府君来談。和田、
藤崎、福原諸氏午後来談。

八月八日 晴天。土曜日。下午別府、藤崎、伊知
地、原諸氏来談。晚餐後田鍋、別府二氏来談。
夜十時別府君来りて予を待てり。十一時帰る。

八月九日 晴。日曜日。終日在家。午前別府君来
訪。下午又来訪。伊知地、藤崎亦来る。夜、沢
本、金嶋、伊知地、藤崎、楠内、中原、野中、
大熊、富永、土井、群嶋、田鍋諸氏来談。十時
帰る。

八月十日 晴。午前小山、田鍋二氏と青年会に至
り、七里を訪ひ帰る。午前会報に出つ。下午沢
本氏来り、為我理髮。別府君来訪。藤崎氏亦来
る。群島生亦来り、詩の添削を乞ふ。夜、池野、
御幡、桑原諸氏来訪。九時別府君来談。十時来
り、宿す。

八月十一日 晴。下午別府、伊地知二氏来訪。藤
崎亦来る。晚餐後別府君と南郊に散歩す。夜中
島、別府二氏来談。群島、野中、松倉等来り。
十一時帰る。前田彪、井手三郎二氏の信来着。

八月十二日 晴。午前別府君来談。下午別府、藤
崎、小山諸氏来訪。晚食後別府君と南郊に散歩
す。夜別府、川野、伊地知、群島、青木、右田、
隈元諸氏来談。

八月十三日 晴。是日より十一日間暑中休暇を為
す。午前別府君来訪。沢本、藤崎、吉田等亦来

る。下午別府君来談。大川生亦来る。六時別府
君と南郊に散歩。七時半別府君来る、同きん。
八時半伊知地生来談。十時帰る。

八月十四日 晴。午前藤崎、松倉、池野三氏来訪。
緒方二三の信漢口より着。金子受取を送れり。
下午別府、伊知地、市川、江口諸氏前後来談。
二時別府君と南郊に散歩す。夜小野、別府、大
川、群島諸子来談。

八月十五日 晴天。下午別府、右田両氏来談。晚
餐後別府君と南郊に散歩す。帰て別府君来訪。
同衾。小山、伊知地諸氏亦来り、十時帰る。点
検後伊知地、大川、藤崎来り、十二時帰る。

八月十六日 陰。午前別府君来談。下午田鍋、別
府、藤崎、伊知地諸氏前後来訪。快談移時而帰
る。晚餐後別府君と南郊に散歩す。帰て別府君
来訪。伊知地、白岩、土井諸氏亦来談。夜小浜
と猪飼氏に至り飲む。

八月十七日 陰。午前別府、御幡、西村、郡島諸
氏前後来訪。下午藤崎、別府、和田、水谷彬、
大川、伊知地諸氏来談。晚餐後小山、田鍋と公
園に散歩す。九時半帰る。十時別府君来る。

八月十八日 晴。午前別府君来訪。御幡、森諸氏
亦来る。下午伊知地氏来談。是日長崎佐野直喜
より衣類を送り来る。中西正樹の信東京より来
る。七時出て郵船碼頭に至り別府君に会し、扁
舟に賃し酒を携て申江に浮び月を賞す。海軍省
用地の碼頭に小泊し飲む。是夜望前一日（旧七
月）、月色玲瓏、気秋に似たり。九時半研究所
に帰る。十時別府君来り、十一時帰る。

八月十九日 積陰。終日在家。午前西村来談。下
午伊知地、藤崎諸氏来訪。夜別府君来談。七時
半同衾、八時帰る。小山平来談。小浜と月を踏
で郊外に散歩す。十時後和田、伊知地、水谷、
佐々木諸子来談。十一時半帰る。雨。

八月二十日 陰天。午前藤崎来訪。下午沢本、石
川、別府、伊知地、甲斐、楠内、江口、本島諸
氏来談。晚餐後別府君来談。夜荒尾の処に至り
森安治送別の宴に列す。

八月二十一日 雨天。午前別府君来談。下午藤崎、
伊知地諸氏来談。別府君亦た来る。是日京都井
手三郎、熊本鳥居赫雄両氏に寄するの信を作る。
夜群島、大川諸氏来談。

八月二十二日 雨天。午前小浜、田鍋、三池諸子と出て森安治の帰国を送る。晌午帰る。緒方二三漢口より着。成田鍊之助の信臻る。藤崎、和田、伊知地、別府、中原諸氏前後来談。夜平野、小野来談。十時別府君来り、一時半帰る。

八月二十三日 雨天。午前別府君来談。下午又た来訪。夜伊知地、沢本、右田、大川、群島、別府、松倉、岡田、藤崎、原田、武藤諸氏来談。十時帰る。

八月二十四日 積陰。終日在家。午前別府君来談。下午伊知地、別府二氏来談、帰る。別府君来談。

八月二十五日 陰天。午前別府君来談。晌午七里恭来談、城内殺人事件予審終結せしを以て明後日より帰国すと云ふ。下午伊知地来談。夜小浜、緒方と領事館に至り尾本に面会を求む。時間後れしを以て許さず。衣類数件を尾本に贈る。夜別府君来談。十時亦た来り、十一時帰る。

八月二十六日 陰天。下午小浜、緒方と領事館に至り尾本に獄中に面会す。帰りて同人に洋服、下着一枚を送る。別府君来談。松倉、井口亦た来る。夜伊知地、藤崎、小山、榎崎、群島諸氏来談。

八月二十七日 雨天。午前馮公館に至り典表の事を商量す。行はれず帰る。市川及び別府君来談。下午緒方と出て三馬路に至り、当舗に一事を商量し帰る。晩荒尾氏に至り小山、西村と共に緒方氏の離宴に列す。帰りて緒方、七里、尾本三氏を送るの詩歌を作る。十時上車。緒方を送て船に至る。七里、緒方に辞別し帰る。途領事館獄窓の下より尾本を呼び別離の辞を致す。悵然の色あり。同氏は明日長崎に護送せらるると云ふ。十一時帰る。

八月二十八日 晴天。終日在家。下午別府君来訪。藤崎亦来る。夜伊知地、別府、群島、勝木諸氏来談。夜田鍋の処に談ず。

八月二十九日 陰天。終日在家。下午別府、伊知地、藤崎、元島諸氏来談。夜楠内、藤崎、中原諸氏来談。十時別府来り、十一時帰る。田鍋来談、十二時帰る。

八月三十日 暴雨。日曜日。午前別府君来談。下午白岩生来談。平野亦来る。夜小野、藤崎、甲

斐、野中、元島諸氏来談。十時帰る。

八月三十一日 暴雨。午前別府君来談。下午田鍋、別府二氏来談。夜藤崎、伊知地、丹羽等来談。

九月初一日 雨天。終日在家。下午別府、藤崎、伊知地諸氏来談。清田、倉富二氏亦た今日帰来に訪。夜群島生来談。沢本生亦来談。十時別府君来る。十一時帰る。風雨蕭条。

九月二日 風雨。午前清田来訪。十時別府君来談。下午伊知地、和田、小山来談。夜別府、沢本、田鍋、桑原、元島、藤崎、伊知地諸氏来談。

九月初三日 陰天。下午藤崎、伊知地来談。東京中西正樹に寄するの信を認む。下午別府、右田、清田、井口、松倉諸氏前後来談。六時小山、小浜と出て東和洋行に至り中川冬得氏の留別の宴に列す。会する者十余人。九時半帰る。十時別府君来る。十一時過ぎ帰る。

九月四日 陰天。終日在家。下午別府、伊知地、藤崎、群島諸氏来談。夜伊知地来談。別府君亦た来る。夜別府来談。

九月五日 晴天。午前佐野直喜、中西、山内、新納時亮諸氏に与ふるの信を西村忠一の帰国に托す。十時出て西村の帰国を送る。下午別府君来談。夜土井、和田、群島、藤崎諸氏来談。

九月六日 晴天。日曜日。午前田鍋、別府諸氏及び伊知地来談。下午大川、沢木、原来談。夜別府、伊知地、小野、元島、中原、水谷、渡辺、藤城諸氏来談。

九月七日 晴。下午別府、田鍋、伊知地、中島諸氏前後来訪。晩餐後別府君と散歩。雨に逢て帰る。夜和田、原田二氏来談。荒尾の処に所員一同会議す。予を招く四次、病と称して行かず。右田、藤崎、中原、松倉、井口、清田等来談。伊知地亦来訪。十時別府君来り、十一時半帰る。

九月八日 風大。午前別府君来談。下午伊知地氏来る。一時半別府君来訪。晩餐後田鍋と愚園地方に散歩す。虫声野に満ち涼颼衣を払ひ、新月眉を画き秋気清爽行の感懷四集す。帰途樂善堂に至り吉田、藤田を訪ひ、十時帰る。

九月九日 晴。下午別府君来談。伊知地亦来る。夜伊知地、田鍋、群島、甲斐諸氏来談。昨年本日一同上海に着す。

九月十日 晴天。午前別府君来訪。下午伊知地、沢本氏二氏来談。夜別府、藤崎来談。白岩生□□より□来の朝魚数尾を送り来る。予詩を作て之を謝す。

九月十一日 晴天。下午別府、伊知地、右田諸氏来談。晚餐後小浜と跑馬場に散歩す。夜十時別府君来り、十一時帰る。

九月十二日 晴天。下午別府、伊知地諸氏来談。夜小浜と跑馬場に散歩す。藤崎、楠内、大川、大木、元島、中原諸氏来談。

九月十三日 晴天。日曜日。午前別府君来談。晌午又来。伊地知亦来、公園に散歩す。下午猪飼氏に至り談ず。二時帰る。群島、中原、森田、隈元、別府、伊地知、田鍋諸氏前後来談。

九月十四日 晴天。下午別府君及び森田来談。晚餐、競馬場に散歩す。十時別府君来り、十一時帰る。

九月十五日 晴天。午前別府君来談。伊知地氏亦来る。下午藤崎、別府二氏前後来談。晚小浜と跑馬場に散歩す。夜沈文藻来談。十時伊地知来談。

九月十六日 陰天。下午別府君来談。夜伊知地、御幡、藤崎、沈、別府諸氏前後来談。

九月十七日 陰天。下午別府、伊地知来談。是日陰曆八月望、頑雲瀾滿嫦娥不出影。藤崎、伊地知来談。夜十一時半市川、福原、川北来談。十二時過ぎ帰る。

九月十八日 雨天。下午別府君及び沢本、伊地知、藤崎諸氏来談。夜和田、田鍋、別府、中原諸氏来談。十時別府君来る。

九月十九日 雨天。終日在家。下午藤崎、別府、市川、福原、伊地知等来談。夜別府君来り、九時帰る。

九月二十日 陰。日曜日。午前別府君及び田鍋、小山等来談。下午伊地知来談。別府君亦来る。夜和田、土井来談。夜樂善堂に至り藤田を訪ふ、在らず。帰て小山の処に談ず。

九月二十一日 晴。下午伊地知、荒尾、別府諸君来談。晚餐後小山と西郊に散歩す。夜別府君来談。

九月二十二日 晴。下午別府君来談。伊地知亦来

る。夜岡田、武藤、藤崎、田鍋、小山諸氏来談。十時別府君来り、十二時帰る。

九月二十三日 陰。秋季孝靈祭。午前伊地知、別府諸君来談。下午別府君来談。夜右田、松倉、清田、井口来談。

九月二十四日 雨天。午前一時来談。下午別府君来談。熊本古川権九郎、八代吉住甚三郎、東京山内崑に寄するの書を作る。

九月二十五日 雨天。終日在家。午前別府君来訪。下午藤崎、伊地知来談。沢本生亦た来る。別府君来談。夜本島生来訪。十時別府君来り、十一時帰る。

九月二十六日 雨天。終日在家。午前仲正一氏来談。下午伊地知、別府、御幡、草場、福原諸氏前後来談。

九月二十七日 晴。終日在家。午前別府、藤崎諸氏来談。下午猪飼氏に會議す。夜別府、大川、伊地知、池野諸氏来談。

九月二十八日 晴。七時半上車矢野に至り、仲正一氏を訪ひ中餐し、帰途樂善堂を経て同氏と共に上車、帰寓。夜別府、伊地知両氏前後来談。十時別府君来り、十一時帰る。

九月二十九日 陰。終日在家。下午別府、藤崎、伊地知、沢本諸氏来談。夜別府来談。

九月三十日 晴天。冷氣頗る重し。午前中島裁之来訪。下午別府君来訪。伊地知亦来る。夜別府、大川、平野、野中、楠内、栗村来談。十時別府君来り、一時半帰る。夜小浜と出て栗を買ひ、帰途藤田を訪ひ七時帰る。

十月初一日 晴。定期試験終る。午前中島来談。会報に出づ。上車東和洋行に至り、小沢生を訪ふ、在らず。氏は近日福州より来れる者也。下午伊地知、別府、和田、大川、藤崎、小山等来談。夜別府、大川、平野、松倉、富永、野中、石川、郡島諸氏、釣して得る所の鰻及び酒を携へ至る。予亦た酒肴を出し飲む。藤城、沢本、小野諸氏亦来談。

十月初二日 晴。午前中島裁之、小沢半平二氏来訪。別府君亦来る。下午別府、伊地知前後来談。夜小浜、別府二氏と東和洋行に至り、海軍士官某等を訪ひ、帰る。伊地知、別府二氏来談。新納時君及び家大人に一書を呈す。

十月初三日 晴天。午前別府，伊地知来訪。是日研究所紀年会式を挙行す。所長，生徒，役員の祝文あり。下午一同味蕪園に遊び，各種の遊戯を為す。下午四時帰る。別府君来訪。六時半宴を張る，豪興勃然。終りて剣舞数番。十時過ぎ散ず。別府，伊地知，川村，大川，右田，松倉，井口諸氏前後来談。十二時帰る。

十月四日 陰天。午前中島，小山，別府，沢本来談。八時出て蘇州河辺に至り，別府，大川，富永三氏の釣を見る。下午和田，岡田晋，伊地知，白岩諸氏来談。夜，伊地知，元島，藤崎，桑原，大川，別府，富永，栗村，中原諸氏来る。大川，別府，富永三氏釣る所の鰻魚と酒とを携へ来り飲む。十時別府君来り，十一時帰る。

十月五日 雨天。午前許斐，別府，藤崎，本島諸氏来談。下午伊地知，別府，平野諸氏前後来談。夜群島，池野，猪田，右田，井口，清田，松倉，藤崎，土井，原田，別府諸君及び根津氏来談。十時帰る。

十月六日 晴。午前別府，伊地知両氏来談。下午藤崎，馮等来訪。夜藤崎，勝木，沢本，甲斐，本島諸氏来訪。

十月七日 雨天。終日在家。午前伊地知，藤崎諸氏来訪。下午藤崎，市川来談。夜別府君来談。野中，沢本二氏亦た来る。十時半別府君来り，十一時過ぎ帰る。

十月八日 陰天。片山敏彦，七里恭二氏の信臻る。午下伊地知，藤崎，別府，小山諸氏前後来談。夜仲正一氏を饗す。別府，小山，小浜，伊地知諸氏亦た来会。藤崎亦来談。

十月九日 陰天。下午伊地知，和田，白岩諸氏来談。東和洋行に至り上野専一，森邦彦等を訪ふ。本日福州より来着せし者也。晡別府君来談。七時荒尾の処に至り仲氏の別宴に列す。帰て詩一首を作り，十二時就寝。

十月十日 陰天。午前伊地知，藤崎来談。下午白岩来訪。荒尾，右田，別府諸氏亦た来談。夜小山，藤崎，楠内，清田，松倉，井口来談。十時半別府君来る。一時帰る。

十月十一日 陰天。終日在家。午前伊地知来訪。荒尾に代はりて文一篇を作る。下午猪田来訪。夜右田，別府，小野，伊地知，群島，向野，沢

本，中原来談。

十月十二日 雨天。午前別府君来。下午伊地知，藤崎来談。夜別府君来談。九時田辺の処に至り談じ，十一時帰る。

十月十三日 雨。終日在家。午前別府，伊地知来談。夜別府，丹羽諸氏来談。十時半別府君来り，十一時帰る。

十月十四日 雨天。午前郵船会社碼頭に至り，西村を迎ふ。下午伊地知，藤崎等来談。夜西村，田辺，伊地知来談。

十月十五日 雨天。下午別府君来訪。高橋源甫亦た来談。昨日日本より来れりと云ふ。東京荒賀，山内両氏之信を携へ来る。伊地知亦来談。夜牟田熊五郎，吉田，右田，伊地知，清田，藤崎，御幡外二人来談。

日乗 明治二十四年十月於上海

十月十六日 晴天。下午郵便局に至り，家大人に金拾円を郵送す。帰途本願寺に至り，僧松江賢哲を訪ひ小談。東和洋行を経て帰寓。是日新納時亮氏の信に接す。伊地知来訪。夜別府，沢本両氏来談。九時本島来る。初て交を通ず。

十月十七日 晴天。午前小山，西村，小浜，田鍋諸氏と浦東に遊び，楊樹浦を経て帰る。豚肉を割き飲む。下午伊地知来談。夜平野，三沢，右田，小山，大川，栗村，楠内，清田，森田，松倉諸氏来談。十一時別府君来り，十二時半帰る。

十月十八日 雨天。午前根津，荒尾，猪飼，外生徒諸氏と釣遊を為す。三時帰る。夜荒尾氏に晚餐す。牟田，高橋来会，九時別府，内田両氏来談。

十月十九日 陰天。終日在家。下午伊地知，藤崎来談。夜別府，大川，郡島等来談。

十月二十日 晴。終日在家。下午伊地知来談。夜別府，土井，牧三氏来談。牧氏は本日熊本より帰来せし者也。岡本源次，矢島篤政の信到る。篤政，米澄徳太郎の碑文を送り，予の刪正を乞ふ。夜別府氏と約あり，来らず。

十月二十一日 晴天。終日在家。午後藤崎来談。夜和田，伊地知来談，小飲。別府氏と約あり，来らず。

十月二十二日 小雨。朝別府君状書し違約を責む。
午前郊外に獵す、得ず。下午藤崎来談。下午三時別府君及び松江賢哲、岡本宗吉等来談。夜十時半別府君来り、二時半帰る。

十月二十三日 雨天。終日在家。下午伊地知来談。
三時別府君来談。緒方二三の信臻る。夜別府、那武両氏来談。

十月二十四日 雨天。下午別府君来談。夜清田、井口、右田、松倉、武藤、吉原、伊藤、高橋、岡田晋、御幡等来談。十時帰る。

十月二十五日 晴天。午前別府君及び伊地知、白岩来談。下午別府君と本願寺に至り松ヶ江を訪ひ、射的場に散歩し帰る。根津氏に小飲、晡時沢本来談。夜平野、三沢、内田、甲斐、野中、伊地知、別府、藤崎、和田、池野、元島諸氏来談。右田、原田二氏亦来談。十時半別府君来り、午前三時帰る。

十月二十六日 雨天。午前別府君来談。下午本島、平野来談。夜草場、藤崎来談。九時前別府君来談。

十月二十七日 晴。午前楽善堂に至り、高橋源甫等を訪ひ、去て領事館に至り尾本の荷物を受取り、上車帰寓。下午沈氏と金表の事に付き四馬路の押舗に至る。伊地知来談。夜家大人の信到る。夜伊地知、大川二氏来談。

十月二十八日 晴天。下午に蘇州河に賽船を見る。晡時伊地知君来訪。夜別府、右田、藤崎、那武、吉原、松倉、井口、大川等来談。

十月二十九日 雨天。是日より地理を教授す。下午雨を衝て賽船を見る。晡時伊地知、藤崎、別府諸氏来談。夜小浜の処に晚餐す。夜大川愛次郎来り明日帰国を以て別を告げ、古風一篇を作り其行を送る。九時半、本島来訪。西村、田鍋、小浜と小山氏に飲む。十時半別府君来り、午前五時帰る。

十月三十日 晴。朝西村恭一の帰国を送る。高橋源甫亦た帰る。荒賀、山内に寄するの信を高橋に托す。下午別府君来談。

十月三十一日 晴天。午前別府君来談。下午根津君と出外。夜右田、清田、市川、栗村、沢本、藤城、藤崎、井口諸氏来談。

十一月初一日 晴天。午前別府、伊地知諸氏来談。

下午草場、猪飼両氏と吉昌洋行に至り、牟田を訪ふ、在らず。夜平野、野中、森川、伊地知、元島等来談。十時半別府君と約あり、来らず。

十一月二日 晴。下午沈氏と仏界の当舗に至る。夜別府君来らず。

十一月初三日 晴天。天長節、朝所内に於て拝賀の礼を行ふ。終日在家。下午伊地知、藤崎諸氏来談。夜祝盃挙ぐ。是日古川権九郎の信臻る。是日故あり、別府君に写真を返却す。昨年同氏より贈らるゝ所の者也。

十一月四日 晴天。朝藤崎来る。下午藤崎、中原、沢本、及び新生徒等来訪。別府氏来る。写真返却の件に付き互いに口舌を費やし、将に違却に至らんとす。幸にして無事、結局するを得たり。伊地知、桑原両氏亦た来談。夜小浜と教頭の処に至り談ず。十時半別府君来り、一時帰る。

十一月五日 晴天。午後伊地知、別府来談。夜右田、中原、別府諸氏来談。

十一月六日 晴。終日在家。午前別府君来談。下午又た来る。伊地知も又来訪。夜平山生来談。奥村の信を携へ来る。上官星塔漢口より来着。夜荒尾氏と共に来訪。平野、中原等来談。

十一月七日 晴天。下午別府君と楽善堂に会し、城内城隍廟に至り墨壺を買ひ、帰途吉昌洋行に至り牟田、福原等を訪ひ談、移時而帰る。夜藤崎、井口、別府、群島、伊地知、本島、高柳等来訪。十時半別府君来り、十二時半帰る。

十一月八日 晴天。午前別府君及び伊地知、小山、等来談。下午藤崎来訪。夜右田、清田、小野、牧、平野、甲斐、沢本、中原、本島、伊地知等来談。原田、猪田亦来る。夜雨。

十一月九日 雨天。午前別府君来る。下午又た来訪。四時又た来る。夜中原、藤崎等来談。荒尾、別府両君来訪。

十一月十日 晴天。終日在家。午前別府君来る二三次。伊地知亦た来る。伊地知、別府、隅元諸氏と小浜氏に晚餐す。夜、藤崎、白岩、隅元、伊地知来談、十時半別府君来宿、四時半帰る。

十一月十一日 晴。午前別府君来る。下午又た来る。伊地知来談。夜右田、本島、平山、上官、別府諸君来談。九時半本島君来談。

十一月十二日 晴天。別府君来訪二次。夜藤崎、

伊地知，別府，小浜諸氏来談。

十一月十三日 晴天。午前別府君来訪。下午樂善堂に至り吉田を訪ひ，去て吉昌洋行に至り小談，帰寓。夜別府君来談。桑原信五郎明日帰国に付き，同郷及び外知音の者十九人と小酌す。十時半別府君来り，午前六時帰る。

十一月十四日 晴。朝小山，三池等と出て桑原の帰国を送る。午前別府君来訪。下午伊地知，沢本，別府，河野熊，藤崎，清田，井口諸氏前後来訪。夜伊地知，右田，別府，平山，楠内諸氏来談。

十一月十五日 半晴。午前野中，岡田，大熊，大木等来談。夜和田，平野，右田，田鍋，清田，小山，藤崎等来談。

十一月十六日 陰天。午前別府来訪。下午又た来る。午飯後南郊に猟し鴿子二羽を（この後一行分不明）平山，伊地知来談。十時半別府君来り，五時帰る。很情。

十一月十七日 半晴。午前別府君来る。下午又た来訪。二時小浜と共に樂善堂に至り吉田を訪ひ，去て吉昌洋行に至り，日暮帰寓。夜別府君及び伊地知君来談。宮島大八，速水一孔等来訪。宮島は昨日襄陽より漢口を経て来着せりと云ふ。田鍋の処に小飲。十一時半出て東和洋行に至り，宮島の処に宿す。

十一月十八日 晴。宮島氏に朝餐し，共に出て樂善堂に抵り吉田を訪ひ，杏花楼に至て中餐し，二氏と相別れて帰る。下午伊地知来訪。夜右田，平野，別府，中原，藤崎，武藤等来談。

十一月十九日 晴天。午前別府君来る。夜宮島大八氏を餞す。吉田清揚，小浜，小山，田鍋，市川等来会。伊地知，別府，諸氏前後来訪。十二時半別府君来訪，事情ありて小談，帰る。

十一月二十日 陰天。午前小浜と出て東和洋行に至り，宮島氏の帰国を送る。下午別府，沢本，藤崎，三氏前後来訪。夜和田，右田，清田，牧，井口，伊地知，藤崎，別府，小浜諸氏来談，十時半別府君来り，五時半帰る。

十一月二十一日 陰天。下午藤崎，別府，伊地知諸氏来談。晡時福原，水谷二氏来訪。夜河野久太郎，内田，平野，松倉，藤城，井口，小山，別府，平山，伊地知，藤城等来談。十時半沢本

来り，十二時帰る。

十一月二十二日 陰天。朝白岩，別府，伊地知諸氏来談。下午藤崎来訪。小浜と日本墓所に散歩す。晡郡島，中原諸氏来談。夜職員一同荒尾氏に晚餐す。右田，中原，川野，郡島等来談。

十一月二十三日 陰天。下午別府君及び藤崎，伊地知等来談。小浜氏に晚餐す。夜右田，牧，清田，松倉，井口，本島，岡田晋，別府，隈元，楠内，渡邊等来談，十時過ぎ別府君来り，四時帰る。

十一月二十四日 晴。午前別府君来談。下午樂善堂に至り小談。去て上野照相棧に至り磯長を訪ひ，小浜と共に帰る。夜別府君来談。是日家大人の信，荒尾氏の手を経て来着，帰国を促さるる甚だ切なり。生徒の作文添削し深更寝に就く。

十一月二十五日 陰天。下午別府，平野，藤崎，右田諸氏前後来訪。夜森田，伊地知，別府，藤崎諸氏来訪。

十一月二十六日 晴天。冷寒刺肌。午前別府君来訪。是日天津，仲正一，川野，及び先月陸路北京に赴きし中島裁之天津よりの信到る。夜甲田，川野久等来談。十時別府君来り，十二時帰る。

十一月二十七日 陰天。午前別府君来訪。下午伊地知，藤崎，平野諸氏来談。井手三郎の信臻る。夜右田，中原，白岩，米沢等来談。

十一月二十八日 晴天。朝小山と出て猪飼氏令閨の帰国を送る。下午別府，伊地知諸氏来談。夜平山，野中，福原，池野，本島諸氏来談。十時別府，伊地知来談，十二時帰る。

十一月二十九日 雨天。午前別府君来る。下午藤崎，郡島来談。夜小山，岩元，右田，牧，清田，岡田，大熊，甲斐，伊地知，楠内，藤崎等来談。

十一月三十日 晴天。午前別府君来訪二次。藤崎，伊地知亦来る。下午小浜と虹口に至り，諸物品を買ふ。帰途牟田，吉田を訪ひ帰寓。夜別府，土井来談，十時別府君来り，五時帰る。

十二月初一日 晴天。午前別府君来訪。下午別府，伊地知両君来談。是日北京石川伍一に発信し，暴動（海州）一件を照会す。井手三郎より其の近著に關はる支那現勢論一部を送り来る。夜和

- 田，別府両氏来談。
- 十二月二日 陰天。午前別府君及び根津氏来談。下午伊地知，藤崎，来談。別府君亦た来る。夜坪江，別府，小野，平野，丹波，末廣，本島等来談。平野独り留談，十時に至て帰る。
- 十二月三日 雪。午前別府君来訪。下午伊地知，別府来談。夜藤崎，小山，別府，伊地知，沢本，和田，田鍋，三沢等来談。十時別府君来り，十一時帰る。
- 十二月四日 晴天。下午別府君来訪。夜別府，藤崎，小野，大西等前後來談。
- 十二月五日 晴。午後本島，藤崎，白石，伊地知等来談。下午市川来談。樂善堂藤田の信到る。北京積善堂汪姓来滬の事を告げ晚餐の招きを受く，五時到る。四馬路杏花楼に至り快飲，七時半に至り帰る。
- 十二月六日 晴。午前伊地知，別府二氏来談。下午小山と吉昌洋行に至り，牟田を訪ふ，在らず。樂善堂に抵り吉田，藤田等と小談。去て公園を散歩し帰る。別府，大西，元島，諸氏前後來訪。夜野中，松倉，清田，井口，牧，右田，楠内，原田，小野，武藤，栗村，平野，藤崎，本島等十四人来談。
- 十二月七日 雨天。午前伊地知，藤崎等来談。下午楠内，藤崎亦た来る。夜別府君来談。右田亦た来る。十時別府君来り，五時帰る。
- 十二月八日 晴天。下午伊地知，藤崎，平野，諸氏来談。夜別府君来談。
- 十二月九日 晴。午前別府君来談。下午小山と西郊に至り義勇軍及び水兵の対抗運動を見る。四時帰る。夜，藤崎，沢本，別府来談。是日緒方二三，山田珠一，矢島篤政，岡本源次，古庄弘，片山敏彦に寄するの信を認む。緒方には家政の調査及び東京山内氏妹の事を家君と相談し呉れん事を依頼せり。
- 十二月十日 晴。午前別府来訪。下午又た来る。伊地知亦来訪。三時出て牟田を訪ふ。夜原，小山，大西，楠内，平山来談。平山今便にて帰国するを以て来て別れを告ぐ。十時半別府君来り，五時半帰る。
- 十二月十一日 晴天。午前別府来談，下午右田，藤崎来訪。三時右田等と出て虹口に至り平山君を訪ひ，帰る。小倉前田彪に与ふるの信を作る。夜平野六郎，別府等来談，八時小浜の処に至り会食す。
- 十二月十二日 晴天。六時右田等と出て平野，平山，池野諸氏の帰国を送る。帰途山口五郎太を訪ひ，中餐して帰る。下午別府，伊地知，吉田，及び汪姓来談。夜水谷，那武来談。十時別府，伊地知来談，十二時帰る。
- 十二月十三日 晴。午前別府君と呉淞路を過ぎ北郊に散歩し，下午一時半新聞を経て帰る。江口，別府，沢本，藤崎等前後來訪。晩伊地知，別府来り小談帰る。夜末廣，右田，牧，清田，岡田晋，向野，川野久，中原等来談。十時別府君来り，十一時帰る。
- 十二月十四日 晴天。下午別府君及び伊地知，藤崎来訪。夜野中，和田，市川，別府，藤崎来談。
- 十二月十五日 晴。下午別府，伊地知来談。夜別府，原田来談。
- 十二月十六日 雨天。下午別府来談。夜別府来談。十時別府君来り，十一時帰る。
- 十二月十七日 晴天。下午別府君来談。晡時和田来る。夜別府，白岩前後來談。小浜と小幡の処に至り談話，十二時に至り帰寓。
- 十二月十八日 晴天。午前別府君来る。下午右田，別府，沢本，白岩来談。夜別府，甲田，沢本来前後來談。是日心気不舒。
- 十二月十九日 晴天。土曜日。午前別府君来る。下午沢本，小野，藤崎来談。夜出て虹口に遊び帰る。草場氏に至り談す。十時より小浜，三池と猪飼氏を訪ひ談話，二時に至り帰る。別府，伊地知十時来談。夜雨。
- 十二月二十日 雨天。日曜日。午前別府，渡辺両氏来談。下午元島，楠内，別府来談。夜小浜と東和洋行に至り，田鍋を訪ひ小談，出て常盤に至り晚餐して帰る。十時別府君来り，十一時帰る。
- 十二月二十一日 晴。是日より小試験を執行す。下午伊地知来る。夜別府，藤崎来談。
- 十二月二十二日 晴。下午市川，別府来談。夜伊地知来訪。猪飼の処に至り談す。
- 十二月二十三日 晴。午前御幡氏に昼餐す，下午

別府君及び福原林平来談。小山氏に晚餐す。是日平野六郎及び緒方二三の信来着。夜別府君来談、十時別府君来り、十一時帰る。

十二月二十四日 晴。清田来談。夜別府君来談。八時小浜氏に至る。吉田在り、伊地知、吉田等と同臥す。

十二月二十五日 晴。是日地理の試験を為す。夜右田、牧、伊地知、末廣、中原、水谷、藤崎、井口等来談。

十二月二十六日 晴天。試験此日を以て終る。下午別府、伊地知、福原林、藤崎等来訪。夜土井、別府、小浜、右田、牧、松倉、清田、井口、伊地知、楠内、森田、元島、沢本等来談、十時別府君来り、四時帰る。帝国議會昨日解散を命せられしとの電報あり。

十二月二十七日 晴天。朝別府、牧来談。午前小浜と東和に至り田鍋を訪ひ、帰途樂善堂に至り吉田と小談。去て再び東和に至り田鍋を訪ひ中餐して帰る。夜所長の処に至り、十二時半帰る。

十二月二十八日 晴天。午前別府君及び伊地知来談。晌午小浜、磯長と日本墓地に至り墓参。下午鹿兒島生徒十余人と楊樹舗に至り飲み、諸子に先ち八時帰る。九時半藤崎、伊地知、別府三氏来談。

十二月二十九日 陰天。午前藤崎、別府前後來訪。下午大川愛次郎来る。今日日本より帰来せりと云ふ。是日北京中島裁之を送る。金三十円を匯豊銀行に送り手数を為す。下午前田彪、三島五雲商用を以て来滬来り訪ふ。熊本奥村、緒方、片山、古庄、平山、片山の信到る。緒方より家政調査の事に付き返事来る。夜清田、松倉、別府、井口、牧、渡辺諸氏来談。九時所長の処に至り、前田、三島等と飲む。十時別府君来り、十一時（この後一行分不明）

十二月三十日 雨天。午前伊地知、上官、藤崎、別府諸氏来談。別府君来り為に行李を戒む。下午三時小浜と怡和馬頭に至り、高陞輪船に搭じ五時發碇寧波に向ふ。風雨滿江光景蕭然。

十二月三十一日 陰。七時船寧波に達し、江北岸北辰号藤森茂一郎の家に投ず。神戸の人古樹清洋火調査の爲め来りて此に寓す。午前藤森、小

浜と市街に散歩。午時小飲。下午古樹生通州輪船より上海に帰る。荒尾、根津、猪飼三氏及び前田、三島二氏に寄するの書状を托送す。夜小飲。

明治二十五年

正月五日 陰。午前小浜と寧波城の西南面壁上を巡視し、月湖を過ぎ湖亭廟等を一覽し海曙樓を出て、誤て城の北門に抵り壁に沿て南行、慈溪（この後一行分不明）

正月六日 晴。七時船上海に着す。途小泉洋行及び樂善堂に至り、藤森より托されし銀子を交附し、車を駆りて帰る。別府、那部、小山来訪。草場、田鍋、三池、大西、沢本、別府、川村、大川、楠内、藤崎、郡島、甲斐、富永、隅元、伊知地、松倉諸氏来談。矢島篤宜、佐野直喜、平野六郎、家大人の書来る。御幡氏に至り中餐し、去て草場氏に飲む。下午、江口、和田、白岩来談。夜草葉氏に餐す。夜大熊、田鍋、栗田、大西禹、川本、右田、清田、牧、井口、元島、石川宗雄、十時半別府君来り、十一時半帰る。

正月七日 晴。草場氏に中餐す。下午別府、藤崎、土井来談。夜伊知地、岡田、沢本、金島、野中、別府、沈、吉武勝平来談。夜頭痛甚し。渡辺、河野久、末廣、堺、沢本来談。客散じて心氣益す。不舒一吐して寝に就く。

正月八日 晴。午前別府、藤崎、伊知地、坪江来談。下午別府君及び深水来談。是日鳥居赫雄の信臻る。夜大川、岡田晋、原来談。後別府、角田、岡田兼、岡部、勝木、藤崎、小浜来談。十時別府君来り、二時帰る。

正月九日 晴天。土曜日。午前別府、伊知地、来談。下午別府君来談。是日漢口成田、松田二氏の年賀状到る。天津仲正一、鹿兒島尾上正連の信臻る。夜伊知地、別府、高橋、内田、池橋、吉原、外一人来談。十時猪飼氏に至り飲み、二時帰る。

正月十日 晴天。日曜日。午前別府、藤崎、小浜、郡島、楠内来談。御幡氏に中餐す。夜沢本、伊知地、岡田、吉田清揚、野中、本島、右田、清田、井口、松倉、別府来談。

正月十一日 晴天。午前別府君来談。下午別府、伊知地、右田前後來談。是日片山、奥村の賀新

の状到る。夜岡田、藤崎来談。十時別府君来り、十一時帰る。

正月十二日 晴。朝郵船会社に至り高道を訪ひ、別府氏荷物の事を依頼し帰る。藤崎、伊知地来談。下午伊知地、右田来談。夜別府、甲斐、沢本、山岸来談。

正月十三日 晴。頭痛。午前別府君来訪二次。下午又た来訪、我が為に摘髮す。井口来談。夜白岩、池橋、楠内、甲斐、大熊、伊知地、別府前後来談。

正月十四日 晴。午、別府、伊知地、小浜、藤、前後来談。下午郡島、沢本来話。夜甲斐、別府来談。十時別府君来り、四時帰る。

正月十五日 晴。午前別府君来る。下午又た来る。□と外出、別府君の為に綱子を買て帰る。別府君来訪。夜別府君と郵船会社に至る。七時帰寓。別府、大川、松倉、藤崎来談。平野六郎、鳥居赫雄に寄するの信を認む。

正月十六日 晴天。午前別府君及び伊知地来談。諸氏と草場氏に晚餐す。夜別府君来り、十時帰る。沢本来り、十二時帰る。

正月十七日 晴天。午前別府、楠内来談。下午大川、松倉、別府、藤崎、岡田、和田、大熊、楠内来談。汁子を作り食ふ。夜小野、右田、金島来談。十時別府君来り、五時半帰る。

正月十八日 晴。午前別府君来る。下午伊知地、別府来談。夜白岩来談。別府、伊知地、藤崎来談。

正月十九日 晴。午前別府来談。下午別府、伊知地来談。夜甲斐、別府、藤崎、中原前後来談。十時高柳登来り、十一時過ぎ帰る。

正月二十日 晴。午前別府君来る。下午伊知地、別府来談。清田、井口亦来る。夜別府、沢本来談。(この後数字不明)

正月二十一日 晴。午前別府来談。下午伊知地来談。郡島亦来。晡別府君来る。夜沢本、岡部、藤崎来談。松倉、右田亦た来る。十一時別府君来り、五時半帰る。

正月二十二日 晴。是日荒尾氏より十五円及び俸給十五円合せて三十円を受取り、内二十円を家大人に匯送す。下午別府、伊知地、原田来談。夜岡田晋、右田、松倉、清田、井口、草場来談。

九時別府君来る。十時小浜と猪飼氏に至り、二時帰る。

正月二十三日 晴。午前別府君来る。下午伊知地、別府来談。夜楽善堂に至り、藤田を訪ひ小談。吉昌洋行に至り牟田を訪ふ、在らず。八時前帰る。河野久、三沢、森田来談。十時大川来り、十一時帰る。

正月二十四日 晴。午前別府、伊知地、藤崎来談。下午元島、岡田晋、金島、土井来談。晩食後小浜と西郊に散歩す。夜野中、松倉、右田、小野、別府来談。

正月二十五日 陰。早起散歩す。午前別府君来る。伊知地、右田亦た来訪。夜藤崎、伊知地、別府、小浜来談。十時別府君来り。是日より朝食郊外に散歩す。

正月二十六日 陰天。下午伊知地来談二次。夜和田、土井、岡田来談、八時過ぎ別府君来談。是日北京石川伍一の信到る。昨年問合せし北変の状況を報ずる者也。

正月二十七日 晴天。午前洋涇浜に遊び、帰途楽善堂に至り談、移時而帰る。下午別府君来訪。夜小山及び今日来着の増田某来訪。郡島、藤崎、隅元、別府、伊知地、岡田、水谷前後来談。是日熊本岩崎重平、平山来着、来り訪ふ。

正月二十八日 陰天。下午別府来る。伊知地、郡島等亦た来談。夜清田、牧、別府、楠内来談。十時別府君来り、十一時半帰る。

正月二十九日 陰天。朝上野写真屋に至り磯長海洲を訪ひ、其の帰国を送る。熊本、深水亀齡、東京中西、山内、荒賀等に寄するの信を托す。別府君来訪。下午一時過ぎ小山、増田が城内に散歩(この後一行分不明)増田、別府、大川、右田、別府、郡島前後来談。是日陰曆除夕。

正月三十日 雨天。陰曆元旦。午前別府君来る。伊知地、藤崎、隅元、楠内亦た来訪。下午□林、□雨農両氏の宅に至り賀正す。白岩生来談。夜原田、別府、江口、伊知地、藤崎来談。

正月三十一日 雨天。午前別府、三池、清田、井口、牧、沢本来談。下午別府、甲斐、土井来談。夜右田来談。十時別府君来り、十二時帰る。

二月初一日 晴。午前楽善堂に至る。下午岡田、金島、大川等来談。夜川村、右田、牧、別府、

大川、大木、清田、末廣、小浜、大熊来談。十時小浜と猪飼氏に談じ、一時帰る。

二月二日 晴。午前樂善堂に至り、吉田を訪ふ。十一時別府君来る。下午別府、伊知地、藤崎来談、二時別府、江口と城内城隍廟に至り遊玩して帰る。別府、江口来談。是日西村忠一帰来。夜諸氏、小山の処に飲む。九時別府、平山、勝木、岡部来談。

二月三日 雨天。午前別府君来る。下午右田、伊知地、丹羽、藤崎、井口来談。夜小浜、伊知地、藤崎、別府来談。十時別府君来り、五時帰る。

二月四日 天寒。午前別府君来る。下午別府、伊知地、藤崎、隈元来談。夜右田来談。

二月五日 晴。午前許斐来り、別を告ぐ。今日より帰省すればなり。緑屋に寄するの信を托し、別府氏の荷物の事を照会す。別府君来談。下午清田、伊知地、別府来談。二時西村、増田と洋涇浜に散歩す。夜松倉、井口、牧、別府来談。吉田清揚亦来る。

二月六日 晴天。午前別府君来談。下午又た来談。夜藤崎、小山、清田、右田、土井来談。十時別府君来り、六時帰る。

二月七日 雨天、日曜日。朝市川来談。下午別府来談。夜別府、藤崎、楠内前後来談。

二月八日 晴天。午前別府君来る。下午又来、虹口に至り□子を買ひ、帰途東和に至り、田鍋を訪ひ談す。夜白岩、和田、岡田来談。別府君又来る。十時別府君来、十一時帰る。十一時草場氏に至り談ず。

二月九日 晴。午前別府来る。下午又来。

二月十日 晴。午前別府君来る。夜藤崎、平山、松倉、伊知地、元島、小山、岩元、別府、右田前後来談。十時山口来り、小談帰る。

二月十一日 雨天。紀元節。午前別府君、市川来談。下午大川、別府来談。夜職員一同荒尾氏に晩食す。小山の帰国を餞するなり。伊知地、藤崎、沢本来談。

二月十二日 晴。朝仏租界押舗に至り時計を受取り、横浜丸に至り小山の帰国を送り、十一時帰る。家大人、伯母、及び東京中西正樹に一封を送る。小山帰国に托するなり。下午別府、伊知地、藤崎、来談。夜別府、松倉、井口、清田来

談。十時別府君来り、十二時帰る。此夜西村と洋涇浜に至り、帰途内藤より獵銃を借り帰る。

二月十三日 雨天。早起。西村と南郊に獵す。得る所なし。下午独り南郊（この後一行分不明）

二月十四日 晴天。早朝南郊に獵し鵠二羽を得、七時半帰る。別府、藤崎来訪。夜、田鍋、岡田、松倉、井口、吉田来談。

二月十五日 晴天。早朝井口生と南郊に獵し鵠一羽を得、八時前帰る。午前別府君来る。下午伊知地、白岩、別府前後来談。是日研究所幹事の職を予に囑す。予断然之を辞し増田氏に譲る。馮孔懷来訪。近頃雲南礦務局より帰来せし者なり。西村の処にて馮、増田等と鵠を割き飲む。夜平野六郎来談、本日日本より帰来せし者なり。別府君亦来談。十時別府君来り、十一時帰る。

二月十六日 晴天。午前別府、伊知地、藤崎、白岩来談。夜西村、増田と会食す。心気不舒、七時就寝。

二月十七日 晴天。午前西村と洋涇浜に至り弾子を購ひ帰る。下午別府、伊知地、藤崎来談。西村と南郊に獵す。彈丸響かず空く帰る。洋涇浜に至り弾子を還し帰る。夜伊知地、右田、別府、三池、元島、松倉、岡田晋来談。

二月十八日 雨天。午前別府君来る。下午伊知地、藤崎来訪。夜牧、別府、伊知地、藤崎、松倉、井口、土井、田鍋来談、十時別府君来り、十一時帰る。

二月十九日 晴天。早朝南郊に獵し、鵠二羽を得て帰る。別府、伊知地、藤崎来談。西村、増田、小浜と鳥を割き晩餐す。伊知地、藤崎、楠内来る。九時別府君来談。

二月二十日 晴天。午前藤崎、伊知地来談。下午小浜と味菴園に至り梅花を看る。夜大川、小山、那部、藤崎、伊知地、森永来談。十時別府君来り、十二時帰る。

二月二十一日 晴天。日曜日。午前本島来る。西村と張園に至り、去て西門外に至り、練兵を觀て帰る。下午別府君来る。二時猪飼、荒尾二氏を訪ふ。是日黒崎生漢口より帰来。夜市川、岡田、大熊、栗村、沢本、和田、右田、末廣、清田、松倉前後来談、十時別府君来り、十一時半帰る。一時就寝。

二月二十二日 晴天。午前別府君、藤崎、伊知地来談。下午藤崎、牧、小浜と帝国軍艦葛城号に至り、世良田少佐を訪ひ飲談、移時而去。氏は燕京、天津にて相識る最も深し。今は副長たり。武蔵艦に至り艦長大佐日高莊之丞を訪ふ。明治十七年一別後始めて相逢ひ、快殊に甚し。薄暮辞歸。右二艦は明日朝六時拔錨、福州、琉球を経て帰国すと云ふ。夜別府、平野前後來談。

二月二十三日 雨天。午前藤崎、右田等来談。井深仲卿今日を以て来着。下午別府、伊知地、藤崎、清田等来談。夜別府、白岩、黒崎、伊知地、井口、藤崎、楠内、郡島、大川等前後來談。井深来り宿す。

二月二十四日 晴天。午前別府、藤崎、牧、黒崎来談。下午黒崎、井深、小浜、別府、牧等を招き汁子を食べ。青木、及び馮口瑛来る。夜松倉、岡田、藤崎、井口、平山等来談、十時別府君来り、十一時帰る。

二月二十五日 晴天。午前別府君来談、藤崎、伊知地亦来る。西村、小浜、増田等と晚餐す。夜小浜、増田と出て郵船会社碼頭に至り、有栖川威仁親王殿下を奉迎す。高雄艦長にて一昨日来港されし者也。九時帰る。別府、小野、沢本、藤崎、原田来談。（この後一行分不明）十二時就寝。

二月二十六日 晴天。下午井深、白岩、伊知地、和田等来談。是日午前楽善堂に至り吉田清揚を訪ひ、帰途天津仲正一に寄するの信を投郵し、北京中島雄、中島裁之に寄するの信を托して転致を囑す。夜日高勝太郎、別府、藤崎、小浜、井深、右田、松倉、井口、大川、和田等来談。九時根津氏の招きを以て井深、西村等と至り、黒崎氏の帰国を餞す。十一時帰る。

二月二十七日 晴。朝、伊知地、藤崎、松倉、井口、別府来談。下午伊知地、藤崎来談。晚餐後、威仁親王の御写影に謁す。夜清田、平野、井深、大川、別府、高橋、内田、森田等来談。十時別府君来り、十一時過ぎ帰る。

二月二十八日 雨天。日曜日。午前別府君来る。下午右田、藤崎、伊知地来談。夜藤崎、元島、土井、隅元、松倉、小山、吉原、吉武、中西、河野、福原、別府、甲斐等来談。

二月二十九日 雨天。下午藤崎、伊知地来談。夜郡島、別府来談。

三月初一日 晴天。午前市川来る。下午伊知地、藤崎、和田、井口等来談。別府君亦来る。牟田、吉田、西村、益田、小浜、別府、小野、白岩等と晚餐す。十時別府君来り、十二時帰る。

三月二日 朝□□晴。午前別府君来談。下午市川、伊知地、藤崎、松倉、小山、別府、井口来談。晩平野来談。夜井深、小浜と田鍋を訪ひ、去て吉昌洋行に至り福原を訪ひ、小飲帰る。

三月三日 晴天。午前別府君、伊知地来談。下午別府、坪井、藤崎、和田等来談。是日より第三学期大試験執行準備の爲め九日迄休業す。西村の処にて益田等と晚餐す。西村と晡時味菰園に散歩す。梅花盛に開き風趣爽絶。夜伊知地、藤崎、岡田来談。十時森田氏来る。初て折枝の花を得たり。

三月四日 雨天。午前別府君来る。下午又来。小山、松倉、藤城、別府、伊知地、右田、井口、小野来談。汁子を作り食ふ。夜猪飼氏に至り談す。

三月五日 雨天。午前別府、伊知地、清田等来談。下午別府来る。夜市川、岡田、沢本、伊知地、藤崎、橋口、右田、武藤、井深等来談。十時別府君来り、十一時半帰る。

三月六日 陰天、冷。午前別府君来る。下午益田、井深と晚餐す。益田と散歩楽善堂に至り、小談帰る。郡島、楠内、大川、向野、甲斐等来談。所長招くにより至る。我党今後の方針に付き、興亜会様の者を設立する事に付き、時勢の緩急により大に意見を異にし激論三時間に亘り袂を□て帰る。十時別府君来り、十二時帰る。

三月七日 晴天。午前土井伊八、別府来談。下午西村、小浜と味菰園に散歩す。晚餐後伊知地、藤崎、松倉等来談。井深、小浜と楽善堂に至り、藤田を訪ひ小飲帰る。

三月八日 陰天。午前別府君及び伊知地来る。下午伊知地、藤崎、別府前後來談。晚餐後益田と競馬場を疾走一回。帰途田辺医生（この後一行分不明）

三月九日 雨天。朝上車東和洋行に至り、平山生の病を訪ふ。別府君来訪。下午別府来談、伊知

地又来る。益田等と西村に晚餐す。夜伊知地、川村、藤崎、楠内来談。小浜、井深来り、十二時帰る。是中島裁之天津よりの信臻る。昨年送到せし金三十円の受取なり。緒方二三の信熊本より来る。近々再遊すと云ふ。

三月十日 晴天。是日より定期試験を執行す。下午別府、伊知地前後来談。晩益田と競馬場を一週す。夜別府君来談。

三月十一日 晴天。井深等と小浜氏に午食す。作文の試験終り草場、小浜と味菰園に散歩す。夜平野、松倉、別府、藤崎来談。益田、藤崎と跑馬場を疾走一週す。夜御幡氏に至り談ず。十時森田君至り、十一時帰る。

三月十二日 雨天。下午藤崎、伊知地、別府来談。益田、西村、三池、原、井深、小浜等と晚餐す。伊知地、藤崎、別府、松倉、小山来談。十時別府君来り読書、三時帰る。

三月十三日 陰天。午前西村と南郊に獵し、四時帰る。帰る所なし。夜樂善堂に至り吉田を訪ひ、共に出て牟田生を叩き、小談帰る。別府君来談。

三月十四日 陰天。下午藤崎、伊知地、白岩等前後来談。夜別府君来談。井深生来り宿す。

三月十五日 晴天。定期試験是日を以て終る。別府、藤崎、諸氏前後来談。下午小浜と西郊に散歩す。夜益田と跑馬場を一週し、去て田鍋生を訪ひ、九時半帰る。

三月十六日 陰天。朝清田来談、別府君又来る。下午別府、伊知地、橋口、平野、井口等前後来談。夜松倉、井口、沢本、右田、清田、牧、大川等来談。

三月十七日 雨天。午前松倉、別府、藤崎、隅元等来談。下午土井、伊知地、小野、三沢、水谷等来訪。白岩、郡島等亦来。夜別府、甲斐、元島、伊知地、石田、松倉、楠内等来談。

三月十八日 雨天。午前別府君及び市川等来談。小浜と共に西村氏に昼食し、下午共に出て公園に遊ぶ。夜小野、原田、沢本等来談。六時小浜と田辺を訪ひ、九時半帰る。是夜森田と約あり待て二時に至る、終に来らず。

三月十九日 晴。午前西村、田辺来談。下午西村、益田、味菰園に散歩す。伊知地、沢本等来談。

夜平野、野中、右田、河野久、小野、橋口等来談。十時別府君来り、十二時帰る。

三月二十日 晴。午前西村、三池、原、別府、御幡、大川諸氏来談。下午西村、三池と公園に散歩し帰る。市川、沢本来談。夜井深、右田、清田、井口、牧、別府、岡田、楠内、伊知地、藤崎等来談。十時森田来り、十一時帰る。

三月二十一日 雨天。下午伊知地、藤崎、隅元、別府、井口等来談。夜別府、伊知地、藤崎、井口来談。

三月二十二日 雨天。下午平山、藤崎、伊知地、小浜、別府来談。夜松倉、勝木来談。

三月二十三日 陰天。午前別府、藤崎来談。夜松倉、右田、清田、小山、川村、伊知地、岡田、河本等来談。九時所長の処に至り談ず。

三月二十四日 晴天。午前市川、松倉来談。下午西村と虹口に至り、帰る。楠内、藤崎、伊知地来談。夜猪飼氏を訪ふ。十時別府君来り、十一時帰る。

三月二十五日 晴天。午前青木、別府来談。下午青木、藤崎、別府来訪。二時小浜と樂善堂に至る。田中善之助に邂逅す。昨日蕪湖より帰来せし者也。吉田、田中等と四馬路に至り吃茶、帰途吉昌洋行に至り小談、帰寓。平野、右田、藤崎、小野来談。根津氏来り、今夕より漢口に赴くを告げ別を叙す。九時諸氏と出て仏界大沽馬頭大通輪船に至り行を送る。漢口成田、松田に寄するの信を托す。十時半帰る。

三月二十六日 天。朝出て草場謹三郎の帰国を送る。帰て西村と談ず。是日予室内に於て時計及び金子を盗まる。下午藤崎、伊知地来談。小浜氏に晚餐す。夜、右田、松倉来談。十時森新来り、十一時帰る。

三月二十七日 雨天。午前土井来談。下午三時沢本、松倉、別府、岡田来談。午食後伊知地、小浜と樂善堂に至り吉田を訪ひ、帰る。夜益田と西村氏に晩食す。六時西村、益田と雨を衝て出で、田鍋安之助を訪ひ小飲談、九時半帰る。十時別府君来り、小談帰る。

三月二十八日 晴天。下午、土井生来る。晩伊知地、藤崎、小野、香月、右田、別府諸氏前後来談。十時別府君来り、十一時帰る。

三月二十九日 晴天。午前別府、田鍋来談。下午西村と仏界に散歩す。伊知地、藤崎、別府諸氏来談。夜小浜と猪飼に訪ひ、十時帰る。是日家弟光彦の信来る。予の帰国を促す最も切なり。

三月三十日 晴天。午前別府君来る。夜土井、松倉、井口、伊知地、川村、小山、別府、右田、藤崎、小浜、清田等来談。是日三井より時計を購ふ。

三月三十一日 雨天。別府、伊知地、藤崎諸氏来談、十時別府君来り、十一時帰る。事故ありて事に及ばず。

四月一日 晴。午前別府君来る。下午小浜と虹口に散歩す。夜右田、岡田、藤崎、伊知地、川村、大川、井口、別府来談。北京石川伍一に荒尾氏の処に会す。本日下午来着せりと云ふ。今度帰国する者なり。十時石川と別れ帰る。別府君来り、十一時過ぎ帰る。是日家大人に一書を呈す。

四月二日 晴。午前西村と出て郵便局に至り、金五円を家大人に郵送し、帰途東和洋行に至り石川伍一を訪ひ、十二時帰る。下午石川伍一、別府真吉来談。四時半石川、別府、右田、川村、伊知地、小浜、藤崎諸氏を招き晚餐す。七時小浜、伊知地と出て楽善堂に至り、吉田を訪ふ、在らず。帰りて荒尾氏に代はり明日国祭大親睦会の祝詞を作る。天津小沢中尉の信至る。

四月三日 晴天。朝、小山等来談。八時楠内、松倉、井口、隅元諸氏と道を徐家匯に取て、龍華寺に遊ぶ。是日恰も清明前一日にして士女絡繹雑^レ織るが如し。高塔に上り瞭望久々近傍の田間に在て小憩す。小浜、伊知地、吉田、岩元、牟田、石川伍一諸氏後れ到る。酒を飲し餅を食ひ、歓娛二時半に至り帰途に就き、四時二十分研究所に達す。是日神武天皇の祭日に当り、天気快晴近来の稀なる所。石川諸氏と益田の処に晚餐す。石川氏大酔、来り宿す。

四月四日 晴天。午前別府君来る。下午西村と散歩す。夜平野、松倉、大川、野中、別府、牧、井口、岡田諸氏来談。野中、大川、松倉諸氏豚肉を携へ来る。十時別府君来り、十二時半帰る。

四月五日 晴天。午前石川伍一を東和洋行に訪ひ

談、時を移して帰る。別府、藤崎諸氏来談。小浜と楽善堂に至り吉田清揚を訪ひ、帰る。石川、増田、小浜諸氏と井深の処に飲む。夜石川、増田と田辺を訪ふ、在らず。別府、右田、小山平、伊知地、吉田諸氏来談。拾時三個木氏来り、十時帰る。

四月六日 雨天。終日在家。午前別府君来談。下午別府、藤崎来談。平野、伊知地、山岸、沢本、松倉等亦来る。夜別府、伊知地、郡島等来談。是日根津の便にて漢口成田、松田両氏の信至る。

四月七日 晴天。下午市川、伊知地、沢本、石川伍一来談。隅元、別府、(この後一行分不明)田鍋の寓に至り飲む。十時帰寓。

四月八日 晴天。早朝、西村と出て石川伍一の帰国を送る。東京荒賀直順、中西正樹、長崎佐野直喜に各一封を送る。午前別府来談。下午藤崎、伊知地来談。夜松倉、井口、右田、牧、岡部、吉原、大川、大木、青木、楠内、伊知地来談。十時半別府君来り、一時半帰る。

四月九日 晴。七時西村と西門外に至り支那兵の操練を見る。兵数無慮七百余。九時生徒数十名と龍華に至り桃花を観る。是日春色海の如く、桃李盛に開き、風光人を蘇す。百歩橋北の空地に在て宴を張る。所員生徒大略九十名。十二時独り帰途に就き一時十分帰所、風大にして塵多し。

四月十日 晴。午前伊知地、別府来談。下午西村と散歩す。大川、大熊、別府、郡島、沢本、小野等来談。夜右田、松倉、別府、岡田、井口来談。十時楠内、藤崎来談。

四月十一日 雨天。午前別府君来る。下午別府、右田、清田来談。夜別府君来り談、時を移して帰る。九時市川来る。十時別府君来り、三時帰る。

四月十二日 晴天。下午西村、益田と公園に散歩す。家大人の信到る。根津、益田、小浜諸氏と西村氏に晩食す。夜右田、松倉、大川、伊知地、別府、井口、藤崎、平山等来談。

四月十三日 晴天。午前別府君来る。下午伊知地、大川、別府来談。下午西村、小浜、益田と散歩す。夜牧、勝木来談。十時三個木氏来り、十一

時帰る。

四月十四日 晴。下午伊知地、藤崎来談。頭痛殊に甚し。別府君来る。小浜、益田（この後一行分不明）

四月十五日 晴。鳥居赫雄の信到る。下午別府君来談。伊知地、和田、藤崎、小浜、井深来談。小浜、益田と井深氏に晩食す。夜別府君来談。

四月十六日 晴天、土曜日。伊知地、藤崎来談。夜益田、小浜と田邊を訪ひ、十時帰る。

四月十七日 小雨。午前別府、楠内、隅元、藤崎、右田等来談。下午西村、小浜と吉昌洋行に至り、牟田君を訪ひ、晚餐の嚮を受く。七時興に出て公園を散歩し、田邊の処に至り、十時帰る。別府君来り、十一時帰る。

四月十八日 晴。午前別府君来る。下午藤崎、別府君来談。夜松倉、小山、伊知地、吉武等来談。

四月十九日 晴。下午、別府君来る。清田、牧等亦来。夜別府、右田、松倉、藤崎、元島等来談。伊知地君亦来。是日家大人の信到る。

四月二十日 雨天。午前別府、元島来談。下午右田、清田来る。四時より松倉善家の離盃に望む。明日帰国する者なり。熊本熊谷直亮等に寄するの信を托す。十時別府君来り、三時過ぎ帰る。

四月二十一日 晴。別府君来る。下午樂善堂に至る。西村氏に晩餐す。夜大川、楠内、甲斐、郡島、松倉等来談。鳥居赫雄及び山田珠一に寄する信を認む。八時別府君来る。八時半松倉の処に至り小飲。

四月二十二日 晴。午後伊知地君、藤崎来談。小浜と西村氏に晩餐す。夜大分人安東不二雄来談。東京師範校卒業生にして、支那の地理研究の為来訪せし者なり。別府、伊知地、右田、藤崎来談。十時三個木来り、十一時帰る。

四月二十三日 晴。午前領事館に至り、山田珠一に与ふる信（この後数字分不明）藤崎等来談。夜土井、別府、沢本、大川、右田、清田、元島、武藤、高橋、平野等来談。

四月二十四日 晴天。午前別府君来談。下午伊知地、藤崎、清田来る。藤森茂一郎来訪。本日寧波より来着せりと云ふ。一時荒尾の処に至り会談す。夜西村と田鍋を訪ひ、九時半帰る。別府

君来り、十一時帰る。

四月二十五日 陰天。午前別府君来る。下午清田、右田来談。夜藤森、別府、小野、伊知地、藤崎、清田、小浜来る。飲んで十時に至る。藤森氏宿す。

四月二十六日 陰天。終日在家。午前別府君来る。夜清田、右田、伊知地、藤崎、小野、牧、西村、小浜等来る。九時藤森氏帰来、共に飲む。

四月二十七日 雨天。終日家に在り。下午別府、伊知地、藤崎来談。夜清田、別府、藤崎、野中、岡田等と会食す。伊知地、右田、本島、小山、群島、小浜等来る。藤森氏宿す。

四月二十八日 雨天。所員一同荒尾氏に午餐す。藤森、小浜、伊知地、清田、別府諸君と晩餐す。十時過ぎ伊知地、隅元、右田等来談。

四月二十九日 雨天。朝別府、藤崎、諸氏来談。藤森氏別を告て帰る。十一時一同出でて荒尾氏の帰朝を送る。下午甲斐、群島、楠内、小野、別府来談。夜井口、木田、小山、伊知地、隅元、那武等来談。十時別府君来り、三時帰る。

四月三十日 雨天。午前別府、河野久来談。下午別府、藤崎、伊知地来談。夜右田、平野来談。猪飼氏及び根津氏に至り飲む。

○陝西道台周漢（湖南人）、外国人宣教師を非難する關邪説を作り、之を印刊し黄陂県の当舗宝善堂に托し頒布せしめ、且つ貧民の小兒に一日十二文づゝ与へ教堂を悪口する歌を作り喝せしむ。善宝堂主人は同県知県と知音なるを以て或日知県に招待されし時分、宝善堂主關邪説の原板を以て示せしに、知県は直に兵を發し主人を拘引せり。又た周漢の親戚湖南湘潭人湯臣□の武昌に赴くに托し關邪説を以て頒布せしめたり。此の件に由りて湯も拘引され不測の累に陥らんとするを以て、周漢書を湖北巡撫譚氏に与へ、該關邪説は自分の作にして宝善堂及び湯等外数人に関係なきを述べ、左の如き説を為せり。邪若し關くべからずんば漢実に其の罪魁なり。宜く自分を奏劾して其罪を治すべし。公等若し善良を魚肉し漢の罪を問はずんば、漢上北關に号し、堯舜禹湯文武周公孔孟及び大清列祖列宗の徳に報ひ、湯舎親及び外冤を蒙るの数人をし

て独り茅を万古に流さしめず云々。

○南京にて捕へられし会匪の白状にて武昌に一人、漢口に一人頭目の在る事分明したれば、安徽巡撫は直に小火輪に乗り親兵を率ひ法方を設け武昌の匪首一人を捕へたり。漢口に在る者は其事を聞き、逃したり。

日乗 壬辰五月起上海滞在

明治二十五年五月初一日 雨天。午前静林子来訪。下午伊地知、上官、深水、牧等来訪。官氏往年営伍に在るの時、貴州の苗氏と戦争の景況及び哥老会の事を談ず。夜沢本、別府、小山、岩元、藤崎等前後來談。

五月初二日 晴天。下午西村、益田と申園に散歩す。是日より西商の競馬あり。四時静林子来談。益田、原、小浜等と西村の処に晚餐す。夜別府、小浜、伊地知来談。十時静林子来り、十一時帰る。是日長崎監獄に在る尾本寿太郎に送書し、励ますに知命安心の事を以てし、其の獄中の苦を慰む。熊本緒方二三の信到る。

五月三日 晴天。午前別府君来談。下午右田、伊地知来談。小浜と出て競馬を觀、帰途味蓴園を散歩す。南京人陳仲明なる者に邂逅す。年尚弱冠に満たざれども珍らしき人物なり。西村氏に晚餐し、小浜、西村、益田と田鍋を訪ひ晚餐す。熊本篠原由雄及び家弟の信来着。

五月四日 晴天。午前別府君来談。下午山内崑来訪。今日薩摩丸にて来着せりと云ふ。小浜、山内、別府、小山諸氏と飲み晚餐す。終りて小浜と公園に散歩して帰る。夜小浜、右田、隈元、郡島等来談。

五月五日 晴。午前別府来談。下午別府、伊地知、藤崎来談。是日生徒へ賞状及び賞品授与式を執行す。晚藤崎、伊地知、小浜、別府、楠内、右田、平野来談。十時別府君来り、十時半帰る。

五月六日 晴天。下午樂善堂に至り山内崑を訪ふ。先年同氏の妹を娶ることに約束を定め置きしが、先方の都合により見合することとせり。去て吉昌洋行に至り牟田を訪ひ小談、帰寓。別府、伊地知、藤崎等前後來談。小浜と西村の処に晚餐す。

五月七日 晴天。午前郵便局に至り、家大人及び宇土旧知諸氏に一封を送り、家大人に肉資四円を奉贈す。是日午前五時根津、西村両氏と西門外に至り操練を見る。八時半帰る。上海駐防の兵四亮子定額二千人実数八九百人に過ぎず。大砲クルップ四門口径八珊□砲車を運転する□を用ひず。一門二十五人にて之を挽推す。兵勇一人の月俸六円。下午別府、伊地来談。所員一同根津氏に晚餐す。夜大川、甲斐、野中、右田、井口、清田、牧、武藤、藤崎、小山、小野、中原等来談。

五月八日 雨天。日曜日。午前別府君来る。夜伊地知、別府、岩元来談。十時三個木来り、十一時帰る。

五月九日 雨天。午前別府君来談。晌午伊地知、別府来談。下午藤崎、土井来談。夜大川、伊地知、楠内、藤崎、小浜等前後來談。十時別府君来り、十時半帰る。

五月十日 晴天。午前、西村と公園に散歩す。熊本松倉及び宇土宮原義雄の信臻る。伊地知来談。今便にて帰国の事を照量す。晚牧、勝木、右田、別府前後來談。夜小浜の処に至り吉田清揚、伊地知季綱の離杯席に列す。一時半吉田清揚来り宿す。

五月十一日 晴天。吉田、伊地知、西村等と会食し、共に出て小東門外に至り西村の支那服を購ふ。下午別府君、伊地知、牧、清田等来談。是日望月龍太郎に井深氏に会す。昨日香港より来着せりと云ふ。夜伊地知来談。九時別府君来る。

五月十二日 晴天。午前別府来談。下午伊地知、元島、別府前後來談。益田、小浜等と西村に晚餐す。鹿兒島島津久徴、尾上正連、平川尚義に寄するの信を作り、明日帰国の伊地知に托す。夜右田、土井来談。

五月十三日 晴天。昼出て伊地知、吉田二氏の帰国を送る。下午別府君来談。夜別府、平野、武藤、中原来談。十時別府君来る。

五月十四日 晴。午前別府君来る。清田、藤崎、田辺諸氏来談。下午別府、山岸等来談。所員一同根津氏に晚餐す。夜藤崎、岡田、楠内、小山、別府等来談。

五月十五日 晴天。日曜日。午前御幡、原諸氏来り飲む。昨日不在中盗あり。予の財産三円を盗み去る。嚮きに時計を盗まれ、今又た此の厄に過ふ。落魄先生愈落魄、両袖の清風は盗児の賜矣。御幡氏に至り飲む。下午別府君来談。夜小浜、西村、益田と田鍋を訪ひ飲む。帰途公園に散歩し、九時半帰る。別府君来談。

五月十六日 晴天。朝別府君来る。下午別府、藤崎来談。西村に晚餐す。夜別府、右田、小山、清田、牧、白岩来談。十時別府君来□半帰る。

五月十七日 晴天。午前別府君来談。下午又来。井口、藤崎来。西村氏に晚餐す。簿記学教師内尾某来着。同県人なり。根津氏に至り飲む。田辺来り宿し、夜半事ありて帰る。

五月十八日 晴天。午前内尾を伴ひ張園に散歩す。下午別府、藤崎来談。下午西村、草場来談。夜白岩、別府両氏前後来談。井深氏に宿す。

五月十九日 晴天。午前和田、別府来談。所員諸氏と井深氏に晚餐す。夜別府、大川、隅元、河野久、大熊、郡島来談。十時別府君来り、十時半帰る。

五月二十日 晴天。午前別府君来る二次。下午別府君来る。白岩来る。清田来る。夜別府、小山、右田、牧、勝木、山内崑来談。

五月二十一日 晴天。土曜日。下午藤崎、平山、別府、御幡、沢本諸氏前後来談。所員一同根津氏に晚餐す。夜川村、橋口、右田、甲斐、原田、野中等来談。

五月二十二日 午前平野、本島来談。下午西村と楽善堂に至り、山内崑を訪ひ三時帰る。小雨。熊本人一同三池氏に会食す。諸氏と飯量を闘はす。予及び藤城第一たり。夜右田等来談。十時三個木来り、十時半帰る。

五月二十三日 雨天。午前別府、西村来談。下午藤崎、別府等来談。小浜と草場氏に晚餐す。夜楠内、沢本来談。市川来談。十時帰る。別府君来り小事の為に相争ふ。十一時半帰る。

五月二十四日 雨天。朝長崎控訴院山内山彦氏に寄するの信及び熊本緒方二三に寄するの信を横尾氏の帰国に托す。山内氏に離縁云々の事を通知し、緒方には团扇の事を通知せり。下午別府君来る。右田、藤崎、平野等来談。原氏に晚餐

す。夜事あり別府君を招く。

五月二十五日 雨天。下午別府、藤崎、右田来談。家大人及び西京寺田永松の信至り、北京中島裁之に送るべき金三十円を為替にて送り来る。寺岡田、別府両君前後来談。

五月二十六日 雨天。下午別府、小浜来談。諸氏と西村氏に晚餐す。夜市川、藤崎、小山、別府、郡島等前後来談。十時別府君来り、十一時帰る。

五月二十七日 晴天。午前別府来る。海関に至り北京中島裁之に金二十九円七十銭を郵送し、帰途山内崑を訪ひ支那全図を貰ふて帰る。晌午池辺吉太郎の信来る。欧州行の途次本地に立寄れりと云ふ。直に常盤に至り池辺を訪ふ。濠州行の高橋昌も同行たり。二氏を伴ひ城内に遊び、四時常盤に帰る。井深亦来る。四馬路杏花楼に至り飲む。快談時を移して帰る。城内より帰るや、常盤に於て宮崎寅藏に会す。八郎の弟なり。容□は□偉、一個の男丈夫なり。池辺、高橋、宮崎、井深等と天仙茶園に至り戯を看、十二時帰る。北御門松二郎の信来着、今日宮崎の携来せし所なり。

五月二十八日 晴天。早朝井深と出て常盤に至り、池辺、宮崎、高橋等を誘ひ上野照相棧に至り撮影せんとす。先発の池辺等道を誤て研究所に来る。因て予も研究所に帰り、諸氏を誘て講堂を一覧し、上車直に上野に至り撮影す。予は池辺、高橋と物品を買ひ直に帰る。諸氏と快飲し、十時半上車仏蘭士碼頭に至り、池辺、高橋と分袂す。殆んど河梁の情に堪へず。宮崎を誘ひ帰る。別府、藤崎、小野、沢本等来談。所員一同根津氏に晚餐す。晩別府、岩元、大川、右田来談。

五月二十九日 陰天。日曜日。下午別府、和田、三沢等来談。晩山内崑来談、小飲。後西村の処に至り晚餐す。夜藤崎、右田、清田、那部、水谷、池橋、角田等来談、十時別府君来り、十一時帰る。

五月三十日 雨天。午前田辺、西村来談。下午別府、藤崎、小山、深水来談。四時西村、益田、小浜と田辺を虹口に訪ひ飲む。宮崎寅藏亦来会。

五月三十一日 陰天。午前別府君来る。下午宮崎

寅藏，西村，小浜，別府等来談。晩食後内尾と出て郵船会社碼頭に至り，小山を迎ふ，来らず。出て宮崎寅藏を訪ひ，快談十時に至る。英租界火を失す。田鍋，宮崎と行て看る。十一時帰る。藤崎来談。東京石川伍一及び沼一郎，古莊弘，松倉，片山等の信到る。

六月一日 陰天。朝別府君来る。小山元二帰来。薩摩丸より来着せりと云ふ。午前別府君来談。夜右田，藤崎等来談，十時別府君来り，十一時半帰る。

六月二日 晴天。下午，藤崎来談。二時小浜と出て，票を買う。楽善堂に至り，山内を訪ひ小談，帰寓。夜別府，平野来談。

六月三日 晴天。午前別府君来る。小山，益田と西村氏に晩餐す。夜藤崎，別府，右田来談。是夜夜深，根津諸氏南京に赴く。十時中川来る。

六月四日 陰天。午前別府君来る。下午藤崎，深水，井口，小野来談。夜，藤崎，白岩，大川，右田，原田来談。十時別府君来り，十一時帰る。

六月五日 陰天。小浜氏に中餐す。下午小池，別府，御幡諸氏来談。夜富永，水谷，右田，深水，三沢，和田，楠内，別府等来談。九時半三個木君来り，十一時帰る。

六月六日 晴天。下午別府君，藤崎来る。二時右田と宮崎を訪ひ，五時帰る。夜和田，別府，井口，牧，藤崎来談。

六月七日 晴。午前別府君来る。下午小浜と張園に散歩す。夜右田，藤崎，武藤，坪江来談。十時別府君来り，十時帰る。

六月八日 晴天。午前西村と胡開文に至り筆を購ひ，帰る。下午別府，右田両氏来談。小浜，右田と晩餐す。井口，清田，牧来会。夜小山平，中原，藤崎，楠内来談。

六月九日 晴天。午前別府君来訪三次。下午參謀高橋大佐等来所。生徒の清英語演説を聞く。二時根津氏の処に高橋，伊知地少佐等及び所員一同会食す。夜平野六郎，別府両氏前後来談。

六月十日 晴天。朝予の旅行記を売りし金式百円の中百五十円を研究所より受取り，楽善堂に預く。十時帰る。宮崎来訪，不逢，途上之に遇ふ。別府君来談。中餐後有阪成章（工兵少佐）を誘

ひ上車，江南製造局に至り，劉総弁，張提調，劉局長，范翻譯等に面す。総弁予輩を応接間に誘ひ酒菓煙茶を饗し，待遇殊に到る。小談後劉，張両氏の案内を以て銃廠，砲廠，熟鉄廠，水雷廠等の各廠を巡覧し，四時別を告げ上車帰途に就く。東和洋行に至り，晩餐の饗を受く。有阪と同行にて仏蘭西公使館の書記官に赴任する加藤恒忠に会す。上月仏国に赴きし池辺吉太郎に寄するの信を認め加藤氏に托す。内田副領事，大枝書記亦来会。八時半帰る。九時半別府君来り，十時半帰る。

六月十一日 晴天。土曜日。午前別府君来談。小浜等と西村氏に晩餐す。夜右田，別府，岩元，隅元，栗村，和田，小浜等来談。

六月十二日 晴天。日曜日。午前上車田鍋を訪ふ，在らず，帰る。下午別府君来談。夜右田，藤崎，清田等来談。

六月十三日 小雨。午前別府君来る。下午右田，藤崎，牧来談。夜別府，井口，楠内来談。十時別府君来り，十一時帰る。

六月十四日 雨天。下午別府君来談。晩藤崎来談。益田帰国，幹事後任の事に付き，小山，西村等と照量する所あり。

六月十五日 雨天。午前別府君来る。下午別府，藤崎，郡島，白岩来談。四時宮崎寅藏来り，明日一寸帰国の事を告ぐ。晩餐宮崎，小浜，井深，小山，益田等と出て田辺の所に至り小飲，十一時帰る。

六月十六日 晴天。松倉善家に送るの信を小山平次郎の帰国に托す。外家大人に帰国の通知書を作り，益田に托し長崎より発す。朝白岩生来談。下午藤崎，小山平，平野等来談。小浜氏に飲む。晩別府君来談。夜根津氏に至り飲む。九時半中義君来る。出て益田三郎等の帰国を送る。帰途宮崎寅藏に至り別れを告げ，上車帰寓。時十一時半宮崎去る。

六月十七日 晴天。午前別府君来談。下午深水，藤崎来談。夜別府君来談，九時半別府君来り，十時帰る。前田彪の信来着，曾て托せし山鹿团扇を送り来る。

六月十八日 晴天。土曜日。午前藤崎来。下午別府君来談。夜右田，深水来談。

六月十九日 晴。日曜日。午前別府君来談。下午藤崎来る。西村の処に晚餐す。夜山内崑，小浜，藤崎来談。九時半三個木来り，十時帰る。

六月二十日 晴天。午前田辺，藤崎，深水来談。下午根津氏来談。二時別府君来談。晚小浜，草場と味菰園に散歩す。野中来談。是日より小試験を挙行す。

六月二十一日 雨天。下午別府君来談。西村氏に晚餐す。夜別府，井口，平山，小浜来談。十時別府君来る。是日北京中島裁之より金子受取状来る。外に家大人の信来る。

六月二十二日 晴天。午前別府君来る。下午市川，元島，別府来談。藤崎亦来る。晚小浜，西村，原，小山と張園に散歩す。

六月二十三日 陰天。下午別府，井口，深水，沢本来談。夜右田，井口，牧，岩元，別府来談。是日鳥居赫雄に発端書。

六月二十四日 雨天。下午別府，岡田晋，牧，平野，甲斐，楠内諸氏来談。夜小浜，右田，森永，猪田，土井等来談。九時半別府君来り，十一時帰る。

六月二十五日 雨天。下午別府君来談。井深，小浜と一品香に至り洋饌を食ひ，楽善堂に山内を訪ひ談話，移時而帰。降雨為注衣被悉く沾ふ。夜，杭州載愷君に寄するの尺牘及び詩一章を作る。

六月二十六日 陰天。下午別府，平野，藤城，渡辺，内田，藤崎，井口等来談。夜沢本，大熊，右田，深水，佐賀，吉原等来談。

六月二十七日 雨天。午前別府君来訪。下午又来訪。藤崎，市川，田辺，右田等来談。所員一同三池氏に晚餐す。夜別府，小浜，西村，野中等来談。九時半別府君来り，十一時帰る。

六月二十八日 晴天。午前西村と河南路に至る。下午別府君来る。夜又来談。草場，郡島前後来談。是日下午井深の室に於て中義を得たり。

六月二十九日 晴。午前別府君来，三回。下午藤崎，別府前後来談。晚餐于西村氏。夜和田，右田，森永，角田，岡部，岩崎来談。

六月三十日 晴天。午前別府君来る。下午又た来談。夜小山，右田，深水，武藤，別府，白岩来談。九時半別府君来り，十時帰る。

七月初一日 陰天。朝白岩，別府来る。九時領事館に至り，家大人に肉資四円を寄贈し，宮原義雄に一封を送る。外鹿兒島伊知地季綱に一書を寄す。十一時別府，市川来談。市川は本日より帰省する者也。下午別府君来る。小浜等と西原丸に至り市川，高柳諸氏の帰国を送る。船上虎，獅子，象，熊，山猫等の猛獸を観る。頗る状況を覚ふ。夜井口，藤崎，岡田，別府来談。碼頭より帰途，藤田捨次郎を訪ひ談話，時を移して帰る。

七月初二日 雨天。土曜日。午前別府君来る。白岩亦来る二次。下午深水，平山，牧等来談。夜別府，岩元，右田，小浜等来談。

七月初三日 晴天。日曜日。午前白岩，井口来談。九時小浜，西村と上車，田辺を訪ひ中餐し，四半帰る。夜沢本，白岩，別府，大川，右田，井口，元島等来談。夜三個木氏と約あり待て一時に至る，来らず。

七月初四日 晴天。午前別府君来談。下午別府，藤崎，深水，橋口等来談。晚和田，別府，中原，小倉等来談。九時半別府君来り，十時帰る。

七月初五日 陰天。小雨。朝西村と牟田生の病を訪ひ，隣室に高道桜雄を訪ふ。午前別府君来談。下午別府，藤崎，白岩等来談。四時古庄弘来着。共々晚餐す。右田，深水，武藤，岩崎，郡島，白岩，原田，甲斐，藤崎，井口，元島，藤城等来会。七時謹記に至り云々を商量す。別府君来る。是日山内山彦氏台湾よりの信到る。

七月六日 陰天。午前別府，西村，田辺等来談。下午別府君来談。夜九時半古庄，平山，右田，郡島，水谷，大川，和田，井口，岩崎等来談。

七月七日 晴天。午前別府君来る。九時上車古庄を常盤舎に訪ふ。談話，時を移し上車帰遇。古庄予に靴一足を贈る。下午藤崎，小山来談。郡島，和田，別府，森永等来談。草場氏に晚餐す。夜別府，平野，右田来談。

七月八日 晴天。午前小山，井深と箱子を送りて陳列場に至り配置を為す。下午別府，深水，白岩来談。夜岡田，三谷，楠内，別府，田中善之助，平山，古庄，郡島，藤崎，武藤，岩崎等来談。十一時帰る。古庄弘来り宿す。

七月九日 晴天。土曜日。朝別府，白岩来談。古

庄、小浜と昼餐す。一時半出て植木に至り古庄氏下宿の事を照会して成らず。出て本願寺に至り照量す。又た成らず。三菱碼頭に至り根津氏及び支那人に会し海軍省用地棧橋の測量を為し、上車帰遇。根津氏に至り晚餐す。夜別府、郡島前後來談、十一時半別府君来り、十二時帰る。

七月十日 晴天。日曜日。朝 下午、別府、古庄、右田、牧、武藤、岩崎、勝木等来談。西村氏に晩食す。夜土井、郡島、野中、右田、三沢、井口、牧、小野、岩崎等来談。十一時中義氏来る。

七月十一日 晴天。午前別府君及び古庄氏来談。十時半古庄と上車、青年会に至り平山、田中等を訪ふ。平山、古庄と撃剣を試む。三時去て田鍋を訪ひ、五時帰寓。夜別府、楠内、右田、野中、深水、井口、藤崎等来談。九時出て跑馬場に至り義勇兵の演習を觀、十二時帰る。

七月十二日 晴天。陳列場に至り十時半帰る。下午別府、平野、藤崎来談。西村氏に晩餐し、共に出て張園に散歩す。涼味頗る佳し。十時別府君来り、十一時帰る。

七月十三日 晴天。午前別府君来る。十時より野中、郡島、楠内、井口諸氏に会し經書を講ず。下午別府、藤崎、深水諸氏来談。是日山内崑来談。

七月十四日 晴天。午前別府君来談二次。江口音三来り別を告ぐ。明後日より帰省せんとすればなり。下午平山、白岩、中原、藤崎、別府来談。夜野中、岡田来談。

七月十五日 晴天。午前山口五郎太来訪。昨日福州より来着し、本日商用を以て帰国すと云ふ。別府、藤崎両氏来談。十時別府君亦来る。下午碼頭に至り江口音三の帰国を送り、帰途田鍋を訪ふ。小浜亦来る。五時帰所。夜日高、藤崎、隅元、深水、井口、別府、岩元、小野、右田来談。十時別府君来り、十時半帰る。

七月十六日 晴天。土曜日。朝別府君来訪二次。所員一同根津氏に中餐す。西村氏に晩餐し共に出て味藪園に散歩す。夜別府、楠内、向野、本島、右田、川村等来談。

七月十七日 晴天。日曜日。午前、白岩、沢本来

談。下午別府、野中、藤崎、深水、小浜来談。夜岡田晋、井深、元島、平山、大川等来談。十時三個木来る。十一時帰る。

七月十八日 晴天。朝青年会に至り、平山と古庄を訪ひ鰻飯を食ふ。三時半辞し、帰途樂善堂に至り藤田を訪ひ小談、帰所。夜白岩、楠内、別府、右田、井口、武藤、深水、郡島等前後來談。

七月十九日 晴天。朝別府来る。下午右田、深水、牧と蘇州河の上流に遊泳し、四時帰る。右田等来り共に氷を噛む。夜西村、小山と小山の□に談ず。十一時別府君来り、十二時帰る。

七月二十日 晴天。午前領事館に至り加藤書記を訪ひ云々を商會し、林領事を一見し、上車帰所。別府君来談、下午深水、野中、郡島、藤崎、楠内、井口諸氏と孟子を講ず。二時小浜、井深、井口、景山、藤崎、野中等と蘇州河の上遊に遊泳す。

七月二十一日 晴天。午前別府君来る三次。下午又来る。猪田及び福岡人某来談。晩食後深水等と遊泳に赴く。夜郡島、岡田、井口、平野、森永、深水等来談。

七月二十二日 晴天。午前別府来談二三次。下午藤崎、牧等来談。晩食後井口等と遊泳に赴く。十時別府君来り、十一時帰る。

七月二十三日 晴。朝別府君来る。川村来り、別を告ぐ。本日帰国するを以てなり。下午別府来る。晩食後井口、郡島と遊泳に赴く。夜右田、深水、大隅来談。十時中義来る。

七月二十四日 晴天。日曜日。朝小浜と古庄を訪ひ鰻飯を食ふ。帰途田辺を訪ひ、帰る。別府君来談。晩餐後右田、別府、藤崎等七、八名と遊泳に赴く。帰途張園の藕花を一覽して帰る。夜右田、別府、岩元、平野、甲斐、平山等来談。十時右田、牧来り、十一時半帰る。

七月二十五日 晴天。午前別府来る。下午白岩、別府、楠内来談。晩食後三沢来談。深水、別府、野中諸氏と遊泳に赴く。十時別府君来り、十時半帰る。夜別府、深水、右田来談。

七月二十六日 晴天。午前別府来る二次。下午藤崎、別府、大川来談。西村氏に晩食す。夜別府君来談。

七月二十七日 晴天。午前別府君来二次。竹田□□治、楠内、野中、深水、郡島等来り孟子を講ず。下午別府、深水来談。五時平山、武藤等を餞す。夜別府、甲斐、平野、小池等来談。

七月二十八日 晴天。午前別府君来る二次。長崎芦田恕、熊本岡本源次に寄するの信を認む。藤崎、牧来談。小浜に至り西瓜を食ふ。晩食後遊泳に赴く。夜藤崎、岡田来談。十時別府君来り半帰る。

七月二十九日 晴天。午前別府君来る。下午上車出て平山等の帰国を送る。帰途領事館に至、林領事を訪ひ談話、時を移して辞す。速水一孔を館中に訪ひ、五時帰寓。夜別府、白岩、岩元、右田、藤崎等来談。

七月三十日 晴天。午前別府君来る二次。晩食後深水、富永、井口等と遊泳に赴く。夜右田、深水、井口、藤城、本島、渡邊、楠内、野中、三谷、富永等来談。

七月三十一日 晴天。午前別府、藤崎、牧、三沢、右田来談。下午大隈、大川等来談。晩食後深水、井口、富永、倉富、野中等と遊泳に赴く。夜炎氣酷烈寒暑表百二三度に昇る。

八月初一日 晴。午前別府君来り、摘髮す。根津氏に晩食す。下午藤崎、別府、岩元、深水来談。夜右田、井口等来談。十時別府君来り半帰る。

八月二日 晴。午前岡田、別府、牧来談。下午野中、富永来談。晩食後野中、富永等と遊泳に赴かんとす。雨意を以て止む。夜別府、沢本来談。白岩龍平、漢口、南京、蘇杭等地に遊ばんとす。来て別れを告ぐ。八時半研究所を發す。予詩一首を送る。是日高橋謙の信到る。近日中来遊すと云ふ。

八月三日 雨天。朝別府来る。下午藤崎、右田、別府等前後來談。野中来談。夜古庄、和田、井口、大川等来談。

八月四日 陰天。午前別府君来談。下午別府、深水、井口来談。熊本生一同古庄弘氏を餞す。夜岡田、牧、藤崎、郡島等来談。十時中義氏来る。是日長崎芦田恕、宮原義雄、佐野直喜、天草守田愿、津野一雄に寄するの信を認め、明日帰国の古庄弘に托す。

八月五日 雨天。早朝出て古庄弘を乍浦路に訪ひ

小談、別を告て帰る。井口、野中等来談。別府来り蘇州行きを誘ふ。晩食後小浜と出て船行に至り、蘇州行の船を定む。来回四天滞在二天にて六円四十錢とす。飯料一頓三十文。薄暮帰る。野中、楠内、向野、井口、大熊等来り、常熟旅行の事を商量す。大西、吉原等来り、鎮江旅行を誘ふ。

八月六日 晴天。早起結束、小浜、別府、右田、岩元諸氏と船に蘇州河に搭じ蘇州に向ふ。船往復四天滞在二天にて六円四十錢、飯一頓三十文稀飯十五文とす。是日四江圩に泊す。

八月七日 晴。日曜日。時に雷雨至る。是日、船真義鎮に泊す。蚊軍艦を圧す。

八月八日 晴。正午船蘇州の婁門外に達、城の西北角を周りて佛邱寺に至り遊覧、楓橋に帰り泊す。寒山寺其側に在り。

八月九日 晴。船を閶門外に移し、城内に入り怡園を見る。船を婁門外に移し泊す。月色高潔。

八月十日 晴。婁門を發し帰途に就く。船木瓜橋に泊す。

八月十一日 晴。船木牌浜に泊す。

八月十二日 晴。午前十時船老閘橋下に達す。上岸研究所に帰る。川野久、田鍋、深水、藤崎諸氏来談。下午和田等来談。野中、楠内、岡田、右田、別府、大熊、郡島、井口、勝木、渡辺等来談。

八月十三日 晴天。午前三沢、別府来談。下午沢本来談。是日杭州戴愷君に寄するの信を作り、三池親信の蘇杭に遊ぶに托す。所員一同夜根津氏に晩食す。夜楠内、井口、中原、別府、藤崎、右田、岩元等来談。

八月十四日 晴天。日曜日。午前別府、平野、大川等来談。下午別府来談。夜大川、三谷、大西禹、牧来談。

八月十五日 晴。午前西村、別府、牧、藤崎、小浜来談。夜別府、右田、井口、牧、勝木、深水来談。十時別府君来り、十時帰る。是巴里池辺吉太郎の信到る。七月二日に着せりと云ふ。

八月十六日 晴。午前別府君来る。下午別府、藤崎、日高等来談。家大人及び武藤、原田等の信至る。夜隈元来談。

八月十七日 晴。午前別府君来る。下午和田、井

深、藤崎等来談。夜右田、三沢、沢本等来談。
十時中義来る。

八月十八日 陰天。午前別府、右田、土井、郡島等来談。正午勝木恒喜の離盃に赴く。夜山内崑、別府、和田、森永、平野前後来談。八時井深と出て東和洋行に至り飲む。十時過ぎ蘇州河辺の花園に至り王字花を折り、十一時半帰る。

八月十九日 晴。午前大川、坪江来談。下午楠内、郡島、中原、別府、藤崎、青木来談。夜三谷、牧、別府、岩元、青木来談。

八月二十日 晴。朝田邊等来談。夜草場、井深、深水、井口、猪田、別府来談。十時別府君来り、十時半帰。是日漢口松田、成田に発信す。藤田捨次郎の便に托する也。

八月二十一日 晴。日曜日。下午藤崎、岡田来談。夜楠内、井口、深水、大隈来談。

八月二十二日 晴天。是日より午前丈け学課を始む。下午行て火事を見る。夜藤崎、牧来談。

八月二十三日 晴天。午前小浜と出て楽善堂に至り山内を訪ひ、小談。共に出て常盤舎に至り中餐す。高橋謙の来航を迎ふ、来らず。上車帰寓。夜右田、藤崎、井口、深水、大隈来談。

八月二十四日 晴。午後楠内、井口、深水、郡島、平野来談。夜岡田、牧、大川来談。十時三個木来り、十二時帰る。

八月二十五日 陰天。下午別府君来談。

八月二十六日 雨天。午前別府来談。夜右田、深水、野中、沢本、三谷来談。右田、深水、野中十一時帰る。清国改革の事を談じ、快殊に甚し。

八月二十七日 晴天。午前別府、大熊、小浜来談。下午別府、右田、牧、大熊、平野来談。晚餐後井口、牧来談。夜右田、深水と公園に散歩し八時帰る。右田、深水、元島来談。十時中義来る。

八月二十八日 晴天。日曜日。午前下午別府、右田、深水来談。是日亡母の二十年忌辰に当るを以て、菜飯を作り生徒十余名を招き祭典の微意を表す。来会する者右田、深水、井口、牧、別府、隅元、藤崎、岩崎、野中、井深、小浜、和田来会。高道竹雄来訪。夜別府、岩元、中原、

右田、井口来談。

八月二十九日 晴天。午前別府、郡島来談。下午山内崑、井口、藤崎、西村、井深等来談。晚味範圍に散歩す。夜右田、深水、別府、大熊来談。十時別府君来り、十一時帰る。

八月三十日 晴天。午前別府君来る。下午又来訪。晚餐後船を迎ふ、来らず。夜右田、深水、平野諸氏来談。是日杭州戴愷君に寄するの信を作り三池に托す。

八月三十一日 晴。松倉善家来訪。昨夜十時着せりと云ふ。平山氏清等の信到る。江口音三亦来談。県人一同右田亀雄を離盃す。夜牧、井口、松倉、右田、別府来談。別府、右田二氏十一時帰る。

日記 明治二十五年九月初一日起 上海 熊本
北平逸人宗方大亮

九月初一日 晴天。木曜日。午前出て物を購ふ。下午藤崎、別府来談。楠内、野中、郡島等亦来る。岡田晋来訪。夜右田、松倉来談。

九月二日 天。熊本緒方二三、片山敏彦、熊谷直亮等に与ふるの書を作り、明日帰国の右田に托す。外に片山に桂丹橄欖一箱を贈る。午前西村に至り談じ、午食す。夜別府来談。十時別府君来る。

九月三日 陰天。土曜日。下午藤崎、別府、右田、深水前後来談。夜松倉来談。

九月四日 晴天。午前上車領事館に至り、金四円を家大人に郵送す。下午藤崎、別府、楠内、野中、本島等来談。七時半出て、右田亀男の帰国を送る。十時三個木来り、十一時半帰る。

九月五日 晴天。下午別府、草場、御幡等来談。下午楽善堂に至り、山内崑を訪談話、時を移し明末の遺書八家集なる者を借て帰る。夜深水来談。

九月六日 晴天。午前別府来談。夜□君、井口、別府来談。十時別府氏来る。是日家大人の信到る。予の帰るを待つ急なり。客心一片有難堪者。

九月七日 陰天。下午藤崎、深水、井口、野中、日高諸氏前後来談。晚猪飼氏の招饗に応じ所員一同到る。支那饌たり。夜別府、岡田、田鍋来

談。

九月八日 晴。午前別府、藤崎来談。白岩龍平蘇杭の遊より帰り、曲園愈樾著はす所、詩集及び日記各一冊を携来り、予に贈る。下午和田、別府前後来談。県人一同内尾直喜を餞す。明日帰国するを以てなり。同氏は予と同郡にして簿記の学に精し、性質善なりと雖不免為俗骨男児也。夜別府、岡田晋、隈元、有泉、森川来談。

九月九日 晴天。午前出て内尾生の帰国を送る。夜牧、川野、別府、松倉、野中、藤崎来談。夜頭痛殊に甚し。半夜眠る能はず。吉田松陰の伝記を読て之を終る。又た十助漂流記なる者を読む。明の末業我四国地方の者十余人、天正年間福州長楽県の石井地方に漂着せし時の記事なり。

九月初十日 晴天。午前別府来談。夜井口、楠内、深水、伊東、本島等来談。

九月十一日 晴天。西村氏に中食す。下午田鍋来り、晚餐の招を為す。余輩小山と不和の事に付き談ずる所あり。田鍋の処に至り飲む。鴨飯の饗あり。予と西村、小山なり。予は独り上車帰寓す。十時中義来る。

九月十二日 晴天。午前別府君来る。夜藤崎、井口来談。

九月十三日 晴天。別府君午前来談。

九月十四日 晴天。午前松倉来る。下午日高、和田来談。夜別府君及野中氏来談。十時別府君来り半帰。

九月十五日 陰天。午前白岩龍平来談。下午別府、深水、牧来談。五時郵便来着。家大人の手書に接し、大家の妾照子本月五日下午五時死去せりと云ふ。噫、天涯の孤客情何ぞ堪へん。右田の書到る。

九月十六日 晴天。夜別府、松倉、井口、大川、白岩来談。十時より白岩来り漢口にて新聞を創くる事を計画し、談二時に至り帰る。

九月十七日 晴。午前郊外に散歩す。下午深水、藤崎、猪田来談。晡時別府、土井等来談。土井は明後の便にて帰国すと云ふ。所員一同根津氏に会食す。夜藤崎来談。郡島来談。

九月十八日 陰天。別府、白岩来談。下午沢水、日高来談。是日家大人に発信す。夜藤崎、深水

来談。

九月十九日 雨天。是日より第二学年後半期定期試験を執行す。余輩各教場を分担監視す。夜岡田晋来談。十時三木氏来る、十一時帰る。

九月二十日 雨天。教場を監視す。是日家大人及び弟光彦の書至る。直に返書を作り、弟の□行を厳責す。黒崎漢口より帰来。小山、西村、井深、黒崎等と根津氏に晩食す。夜別府来談。十時別府君来り、十時過帰る。

九月二十一日 雨天。教場を監視す。下午上車郵便局に至り、家大人に酒資八円を匯送す。帰途楽善堂に至り高橋謙を訪ふ。昨日来着せし者也。談話、移時而帰る。夜深水、井口、牧、別府、野中、郡島前後来談。

九月二十二日 晴天。朝別府来談。秋季孝靈祭にて休業。午前高橋謙、山内崑来る。外に井深、西村、小浜、野中諸氏を会し飲む。一同御幡氏に至り飲む。

九月二十三日 晴天。試験を監視す。下午別府来談。夜深水、藤崎、松倉、井口諸氏来談。

九月二十四日 晴。試験を監視す。是日を以て終る。下午別府、日高来談。晚小山等と根津氏に飲む。夜別府君来る。

九月二十五日 晴。朝楽善堂に至り山内、高橋等を訪ひ、十二時帰る。帰途領事館に至り林領事を訪ひ小談、帰る。別府、深水、岡田前後来談。夜西村と楽善堂に高橋を訪ひ、共に出て田鍋を訪ひ飲み、十一時帰る。

九月二十六日 雨天。朝小浜、元島来談。楠内、大隈亦来る。下午藤崎、別府来談。夜猪田、三谷、大川、隈元来談。

九月二十七日 雨天。午前楠内、平野来談。研究所の事に付き云々する所あり。正午西村、小浜、御幡等と井深氏に会食す。晡時日高、別府二氏前後来談。夜楽善堂に至り山内、高橋を訪ひ、談話十一時に至りて帰る。

九月二十八日 晴。所長の信来る。東京にて計画の事頗る悪し。下午高橋を訪ひ小談、帰寓。別府、深水、岩崎来談。夜別府来談。

九月二十九日 晴天。白岩、別府来談。三時山内、高橋来訪。五時半根津氏に至る。小浜氏を餞する也。会する者、根津、猪飼、山内、高橋、井

深、小浜及予也。快談十時□□□高橋□□宿す。
小浜来談、十二時就寝。

九月三十日 晴。別府君来談。高橋、田鍋、小浜、井深諸氏と西村氏に中餐す。夜小浜氏来り、別を告ぐ。長崎佐野直喜に与ふるの信を托す。出て小浜氏を送る。煙霧江を瑣し、風色佳絶。十時半過ぎ三木氏来り、十二時帰る。

十月初一日 晴天。黎明出て小浜為五郎を神戸丸に送り、小談、別を叙て帰る。六時十五分開船。帰途楽善堂に至り高橋、山内を訪ひ、晌午帰寓。下午白岩、藤崎来談。高玉、自田等、予と山内、高橋、西村を饗す。別府君、牧君来談。鶏豚を割き飲み談論。七時に至りて散ず。高橋と味蓴園に散歩し帰る。沢本、別府両君来談。十時別府君来る。

十月初二日 晴天。日曜日。午前別府、牧、深水、松倉、藤崎来談。下午別府君来談。夜別府、高橋、藤崎、中原来談。

十月初三日 晴天。午前別府君来談。下午又来。夜深水、別府、藤崎、白岩来談。晚根津氏に小飲す。

十月初四日 晴天。牧君著述上海志の跋を作る。下午別府君来る。夜隈元、郡島、深水来談。

十月初五日 晴。別府子来る。午前藤嶋武彦来訪。水産物売販の爲め昨日来着せし者也。井深、田鍋等と飲む。下午鹿児島人池田五郎来訪。伊地知季綱の紹介状を携へ来る。別府君亦来る。夜東和洋行に至り、藤島を訪ふ。根津亦在焉。痛飲十時に至り、根津氏と共に帰る。是夜陰曆八月望、月望清朝たり。高橋謙来る。井深氏に談ず。明日より漢口に赴くと云ふ。十一時三木氏に途に逢ひ、之を強ひども終に来らず。

十月初六日 晴。午前出て高橋謙を楽善堂に訪ひ、別を叙す。藤崎と東和洋行に帰り、中餐し談話。五時に至り田鍋と研究所に帰り、井深氏の離盃に列す。八時半藤嶋、西村、田鍋、黒崎諸氏、高橋謙を郵船碼頭に益利号に送り、十一時別を叙し帰る。高橋は漢口楽善堂に赴く者也。

十月初七日 雨天。午前別府君来る二次。田鍋、井深と西村氏に中餐す。下午別府、松倉、草場来談。夜西村と上車、田辺氏に至り飲む。山内、井深来会。十時帰る。別府君来る。

十月初八日 晴。午前出て井深の帰国を送る。荒尾、中西に寄するの信を托す。外に伊地知氏に発信す。下午深水、井口、別府、本島前後来談。夜白岩、甲斐来談。

十月初九日 晴。朝別府氏来談。高橋昌、荒井第二郎来訪。高橋は農学士にて嚮きに池辺吉太郎と共に南行の途次来滬せし者。荒井はニューカレドニア移民取締の爲め該地に在りし者にして、郁之助の息也。応接所に誘ひ、小酌中餐後共に張園に散歩し、常盤舎に至り暢談。晚餐八時に至り別を告て帰る。二氏は仏船にて日本に帰る者也。十時三木氏来る。十二時帰る。

十月初十日 陰天。午前別府来談。西村氏に中餐す。下午井口、藤崎来談。大隈、別府、深水亦来る。夜沢本、森永、井口、楠内、田鍋、郡島来談。

十月十一日 晴天。午前別府君来談。正午西村氏に中餐す。夜岡田、藤崎来談。小山平次郎、武藤岩彦熊本より帰来す。小浜為五郎長崎よりの信及び野中林吉、芝罘白須直之信到る。済々黌同窓会名簿を送り来る。十時別府君来る。

十月十二日 晴天。午前別府来談。下午楠内、井口、郡島、深水来る。孟子を講ず。別府氏亦来る。夜山内崑を訪ふ。藤島亦来。八時藤島と東和洋行に帰り小飲、談十二時に至り寝に就く。

十月十三日 晴天。東和にて早食し、去て池田五郎を訪ひ小談、帰る。下午白岩、藤崎、別府来談。郡島、和田、井口、猪口、武藤来談。熊本井手三郎、片山、緒方、右田等の信到る。夜井口、深水、小山平次郎来談。

十月十四日 晴天。朝松倉来談。下午別府君及び鐘崎三郎来談。下午別府君為余摘髮す。藤崎来。夜内田、大隈、松倉、別府来談。

十月十五日 晴天。午前別府来談。正午西村氏に中餐す。下午別府、深水、小山平、藤崎来談。晚藤島、西村、黒崎等と根津氏に飲む。八時一同出て、藤島の漢口行を送りて益利号に至り、十時別を告て帰る。十時半別府君来る。

十月十六日 晴天。是日別府氏と南翔行の約あり。六時半出発新開橋に別府氏と会し、二十里鎮市に至り、茶館に投じ茶点を用ひ、又行く八里江橋鎮を過ぎ兵營に小休止、涼亭に至り休憩久之、

行八里南翔鎮に至り、街を貫て北端天主堂の下に至り、折回大八字橋周發茂醬園に於て鬱金香酒四瓶を購ふ。一瓶十錢なり。橋南の日華樓に上り、鶏糸麵を吃し汾酒を飲み休憩久之、一時小車一輛を僦ふ。上海に至る四十里二人にて二角たり。鎮市に至り茶館に投じ小休。五時研究所に達す。南翔より四時間たり。夜深水、井口、牧、中原来る。別府君亦来る。

十月十七日 晴天。神嘗祭。午前大隈、別府、岩元、西村、田辺、井口等来談。夜平野、甲斐、大川、別府、隈元、水谷、深水、井口等来談。雨。

十月十八日 晴天。午前別府君来る。下午井口、藤崎、内田来る。夜深水、牧、井口、小山、別府来談。

十月十九日 晴天。午前樂善堂に至り山内を訪ひ、正午帰る。下午別府、深水、井口等来談。夜排攤に至り、硯、茶器等を購ふ。中原、山内崑、市川、郡島、藤城等来談。是日白須に回信。

十月二十日 晴天。午前別府、藤崎来談。下午小山、松倉、藤崎、別府来談。晩西村と樂善堂に至り山内を訪ひ小談。共に出て夜店を觀、碗、硯等の件を買て帰る。別府君来談。十時半三木氏来り。十二時半帰る。

十月二十一日 晴天。午前別府君来る。下午猪膽を藕粉に和して丸藥を作る。猪田、深水、別府三氏来り助く。深水、猪田、田辺三子と晚餐す。夜藤崎氏と夜店に至り、硯、墨水壺等の件を買て帰る。平野、森永来談。

十月二十二日 晴天。午前熊本井手三郎、緒方二三及び家大人に寄するの信を作り、郵便船に至り、竹田□□治の帰国に托し、長崎より發す。帰途樂善堂に至り小談。陶器を買て帰る。藤田捨次郎と根津氏に晩食す。藤田は昨日帰滬せし者なり。夜隈元、森永、大川等前後來談。

十月二十三日 晴天。中原、松倉等来談。下午三池、中原、松倉、小山諸子と城内に至り、磁器を買て帰る。夜排攤に至り、又た磁器を買ふ。

十月二十四日 晴天。朝城外を徘徊す。下午深水、小山、井口等来談。夜深水、小山、井口三子と夜市に至り、物を買て帰る。深水、小山、松倉、楠内、井口、中原、黒崎、田鍋等来談。頭痛。

十月二十五日 晴。西村氏に中食す。下午別府、森永来談。夜深水、藤崎、井口、市川、西村等前後來談。是日家大人の信に接す。

十月二十六日 晴天。夜深水、井口等談。

十月二十七日 晴天。午後樂善堂に至り、山内崑を訪ひ金七円を借り談話。□□□□す。夜深水、井口、藤崎、松倉、西村等来談。

十月二十八日 晴天。午前川村、別府来談。郵便局に至り、金六円を家大人に匯送す。□□□□、□□等に一封を送る。帰途田鍋を訪ひ、中食して帰る。深水、小山、藤崎来談。夜牧、郡島、大川等来談。

十月二十九日 晴天。朝山内の信至る。(この後五行分不明)

十月三十日 晴天。午前別府、隈元、井口、平野来談。(この後二行分不明) 樂善堂に山内を訪ひ談話。晡時□帰る。

十月三十一日 晴。西村氏に中食。下午(この後一行分不明)来る。

十一月初一日 晴天。午後、深水、白岩、猪田、原田来談。(この後一行分不明) 夜中原来談。

十一月二日 晴。西村氏に中餐す。宮島大八来訪。荒賀直順、吉田清揚の信を携へ来る。藤崎、別府両氏□□前後來談。是日横浜□行□□□□□□發信。予の旧知に□□□□□□□□山内崑来訪共に晩餐し、出て東和洋行に至り、宮島氏□□□□西郷南洲の写真一枚を送らる。

十一月三日 晴天。是日天長の佳節たり。早起齊戒沐浴し、九時領事館に至り聖上皇后陛下の龍影を拝し、帰途西村、三池と吉昌に至り牟田を訪ひ、帰途又た樂善堂に藤田を訪て帰る。下午内田、沢本諸氏来談。晩西村、三池と味菴園を散歩す。

十一月四日 陰天。午時根津氏に飲む。宮島大八の湖北行を餞するなり。夜小山平来談。十時半三木氏来り、二時過ぎ帰る。降雨蕭条。

十一月五日 陰天。下午黒崎、藤崎と外出、藤崎と池田五郎を訪ひ小談。去て田鍋を叩く。宮嶋在焉、晩餐して帰る。青木、内田二生来りて鳳凰山行を誘ふ。之に従ふ。帰て結束す。

十一月六日 晴。午前五時青木喬、内田英治二生と研究所を發し、鳳凰山に迎ふ。残月西に傾き、

濃霧墟落を閉し、風趣佳絶。一里半徐家匯を過ぎ、又一里半紅橋に達す。人家六七十。又行一里許り七宝鎮に達す。人家三四百、舟楫の便あり。又行四里泗涇鎮に達す。泗涇河の東岸に在り、人家八九百、売買繁盛。舟楫輻輳。市街東西に延く五百米突。鎮の西端に鼓橋あり。南北に向て泗涇河に架す。河幅四十間許り、水質清浄なり。行く二里鳳凰山下の小村に達す。人家十余戸。時に一時也、茶店に投じ小休。山下に至り中餐す。韓山に登り、実竹を伐り、鳳凰山に上る。四望開豁、九山以外稻田千里に連り、平広際なく、大川巨水其中に縦横し蛛網を張るが如し。西方遙に崑山、虞山、及び蘇州の諸山を望む。予此山に登る数度、遠山を望む、這れを初となす。秋高气清きを以てなり。遠山此を距る蓋二十余里。五時夕日西崦に落つ。四辺の村落、紅楓装点緑樹水光と相掩映し、風趣画図よりも妙なり。六時半大月一輪東天の末より湧く。月を大海に望むに同じ。是夜天色清朗最も望月に可し。七時月に乗じて山を下り疾走、八時半泗涇鎮に達し、麵店に投じ食す。休息三十分、月を踏で又発す。泗涇河上月光霜の如く、光景名状すべからず。十一時七宝を過ぎ、十二時紅橋に至り小憩す。二時徐家匯に達し又小休。疲労殊に甚し。三時二十分研究所に達し、青木、内田と食し寝に就く。是行往来大約二十二三里、山上の休憩時間を除き往来十二時間を費せり。

十一月七日 晴。午前青木、藤崎来る。下午深水、仲原、川野久、青木、岡田、内田、小山平らを会し、汁子を吃す。夜深水、平野、大川、大熊、楠内、松倉、牧等来談。是日家大人の信到る。

十一月八日 陰天。下午出て宮島を田鍋に訪ひ、晩共に出て四馬路四海春に上り洋饌を食ひ、帰途山内崑を樂善堂に訪て、田鍋氏に帰り談話。深更に至りて寝に就く。

十一月九日 雨天。正午帰寓。宮島氏の西遊を送るの詩一章を作る。夜深水、白岩、郡島、西村来談。

十一月十日 雨天。下午西村、沢本、黒崎来談。夜藤崎来談。

十一月十一日 陰天、小雨。午前宮島、田鍋来る。共に中餐す。是日村橋久成を吊ふの詩一章を作

り、九州日々新聞社に寄す。忠良を題はす所以なり。下午宮島と出外。郡島忠次郎の帰国を送り田鍋氏に至る。西村在焉、共に晚餐し、八時半帰る。

十一月十二日 陰天。下午深水来る。一時字林滬教館に至り館主姚姓を訪ひ、漢報の事を商量して帰る。藤森茂一郎来訪。昨日来着せりと云ふ。深水、小山平、藤崎、本島、池田五郎来訪。晩根津氏に会食す。七時虹口に至り、深水と藤森を訪ふ。待之及時終に帰らず、九時帰る。

十一月十三日 晴天。午前白岩、深水、牧来談。下午根津氏に飲む。速水、宮島来会。

十一月十四日 陰天。下午黒崎と藤田捨二郎、山内崑等を訪ふ。帰途藤田の処に飲み、八時主人を伴ふて帰る。藤森、深水、松倉、藤崎、井口、小山、日高等在焉。藤森氏宿す。

十一月十五日 陰天。下午藤崎、別府、西村来談。是日午後三時郵便船来着。家弟及び実光の信に接す。伯母八千氏の訃に接す。野添伯父又た重病に罹ると云ふ。嗟、此の数月間何ぞ凶報に接するの如斯頻りなるや。寔に痛嘆の至りなり。西村と出て田鍋、宮島を訪ひ、会食す。速水亦来会。十時帰寓。黒崎来訪。

十一月十六日 雨天。午前白岩、深水等来る。下午深水、藤崎二子と出て深水と藤森を訪ふ。已に寧波に向へりと云ふ。帰途樂善堂に山内を訪ひ、四時帰る。夜内田、井口、牧、青木、大熊、水谷来談。

十一月十七日 雨天。下午楠内、西村来談。夜宮島大八の漢口行を送りて、田鍋氏に至る。速水、薩摩丸乗組員山本等と飲み、九時宮島を送りて招商局の江寛輪船に至る。一時帰る。降雨為濺。漢口高橋謙に一封を送る。山本氏に托し、芝罘白須直に同く一封を送る。是夜八時半荒尾東京より電報あり、曰く、事成矣今将（この後半行分不明）

十一月十八日 積陰。下午藤崎、市川来談。是日宗方実光及び光彦に発信。別に熊本片山敏彦、緒方二三、前田彪等に一封を送る。晚餐後西村、虹口に至り、帰途河南路胡開文に至り華墨を買ひ、樂善堂に山内を訪ふ。田鍋在焉。九時帰る。楠内来談。

十一月十九日 晴天。土曜日。下午牧来談。夜平野、渡辺、本島来談。

十一月二十日 晴天。日曜日。下午西村と吉昌洋行に牟田を訪ふ。佐賀の富豪古賀某及び其經手人遠近武則に会す。談話移時而帰る。夜深水、武藤、甲斐、本島来談。本氏十時半帰る。

十一月二十一日 晴天。下午藤崎、小池来談。夜沢本来談。

十一月二十二日 雨天。朝別府君来。下午黒崎と楽善堂に藤田を訪ひ、四時帰る。晩成田鍊之助、藤島武彦漢口より来着。根津の処に飲む。夜大川、武藤、本島、牧来談。是日、英国蘇格蘭品川久太郎に発信す。

十一月二十三日 雨天。下午岡田、河野久、井口、本島来談。夜白岩、深水、別府前後來談。別府氏十時帰る。風雨。頭痛、頻りに嘔気を催す。

十一月二十四日 陰天。朝別府、成田、西村来談。

十一月二十五日 陰、寒氣殊に甚し。兩三日前に比し二十度の差あり。午前藤島、西村、田鍋来る。藤島、田鍋と中食す。成田鍊之助の帰国を送るの序文一編を作り、之を与ふ。熊本右田亀男列に書を寄せ、其再遊を促す。松井敏之の授爵を祝するの書を作り、之を寄す。下午深水、和田来談。夜井口、内田、楠内、大隈、藤崎、小山、大川、隈元、岩元、池田、別府来談。池田、別府、楠内留談。十二時に至り帰る。

十一月二十六日 晴天。午前泰昌客棧に至り藤島を訪ふ、在らず。楽善堂に山内を訪ひ小談。帰途藤田を訪ひ中餐、洗澡して帰る。夜牧、小山、深水、大川来談。十時別府君来る。同氏将来の方向に付き忠告する所あり。十二時帰る。

十一月二十七日 晴。午前松倉、牧、別府来談。

十一月二十八日 晴天。下午別府、池田、藤崎前後來談。

十一月三十日 晴天。午前別府来談。藤島生又来る。本朝寧波より帰来せりと云ふ。夜山内崑を訪ふ。石川伍一北京発の信に接す。中島裁之漂然四川に赴けりと云ふ。豪胆不敵、大に賞すべき者あり。楓橋の写真を借りて帰る。去る二十一年春予と邦山と照写せし者なり。帰途佐藤を訪ひ写真の復写を命ず。十時半、別府君来る。

十一時半帰る。

十二月初一日 晴天。下午西村と出て長城、上海、李鴻章、左宗棠の写真を購ひ、楽善堂に至り小談。吉昌洋行の牟田を訪ひ小談。去て田鍋を訪ひ雁を割て食ひ、七時東和洋行に穩岐喜雄を訪ひ、九時帰寓。昨夜来熊本の生徒を招き、将来清国に対する方針に付き示談する所あり。武藤、横、松倉来る。

十二月初二日 晴天。午前別府来談。下午深水、藤崎、岡部、岩崎来談。

十二月初三日 晴。午前田鍋、黒崎、深水来談。下午松倉、井口、馮来談。晩生徒の親睦会に臨む。夜藤崎、猪田、田鍋来談。

十二月初四日 陰天。日曜日。午前福原、本島、別府来談。下午黒崎と上野に至り、上海の写真を購ふ。価二円。帰途楽善堂に山内を訪ひ、小飲。共に出て田鍋を訪ふ、小談、帰寓。深水、井口来談。十時前別府君来る。昨夜盗あり。金一円余を盗み去る。予の盗難に罹る本年に入てより茲に四回。

十二月初五日 晴天。下午藤崎、隈元、白岩来談。二時出て青年会に至り、山田良吉を訪ひ、過日石刻を贈りしを謝す。夜牧、内田来訪。原氏の処にて狸を会食す。十時中義君来る。

十二月初六日 晴天。下午藤崎、深水、西村、田鍋、草場等来談。鹿兒島小浜、漢口宮島等の信至る。

十二月初七日 雨天。下午楽善堂及び上野照相棧に至る。磯長氏に面し上海写真代価二円を交附し、帰途山内を訪ひ共に西郊に至り、義勇兵の操練を見る。五時帰る。白岩来談。夜別府君の病を訪ふ。一昨夜より赤痢再発す。

十二月初八日 雨天。下午別府氏を訪ふ。夜平野、藤崎、三沢、沢本、井口、武藤来談。此夜荒尾氏電報来る。貨物の事整ひしを以て東京に帰り、残務を終り直に再遊すと云ふ。

十二月初九日 晴天。午前別府の病を訪ふ。下午山内を訪ひ、共に田鍋氏に至り飲む。九時帰る。別府を訪ひ、十二時帰る。

十二月初十日 晴天。午前白岩、深水来談。夜別府氏を訪ふ。

十二月十一日 晴天。日曜日。下午楽善堂に至り、

山内を訪ひ飲む。留て晚餐す。田鍋亦来る。十時田鍋と共に帰り、同氏の処に至り小飲、十二時就寝。寒威凜然。

十二月十二日 晴、寒氣刺肌。田鍋氏に朝食して帰る。本島来談。下午別府氏を訪ふ。西村、牧、角田来談。晡時穩岐喜雄来談。明後日より漢口に遊ぶと云ふ。穩岐と西村氏に晚餐す。別府氏を訪ふ。三木を招く、来らず。

十二月十三日 晴。下午別府氏を訪ふ。三時黒崎と出て領事館に至り、速水を訪ひ飲む。三人出て田鍋を訪ふ、在らず。九時帰る。深水来談。

十二月十四日 晴天。午前別府氏を訪ふ。下午松井敏之の信及び上羽弥直朝鮮京城より、弟亀雄東京よりの信至る。弟は脱走して東上せしなりと云ふ。夜勝木、松倉、大熊、内田、小野等来談。

十二月十五日 晴天。午前別府氏を訪ふ。西村、田鍋、黒崎を招き中餐す。二時共に出て城内に至り、磁器を買て帰る。夜市川、小山平、牧来談。

十二月十六日 陰、夜微雪。午前別府氏を訪ふ。下午領事館に至り、家大人に金六円、弟亀雄に金五円を匯送す。家大人の分より二円半を奥村宅に返却を囑す。外に安達謙造、中西正樹、大屋半一郎に東京に発信し、亀雄身上の事を依頼す。田鍋の処に至る。晚速水、草場、西村、黒崎来会、共に飲む。十時帰る。別氏を訪ふ。

十二月十七日 晴。朝白岩、牧来談。夜別府子を訪ふ。

十二月十八日 晴天。日曜日。下午山内を訪ふ。夜小山、牧、大川、大隈、原田、甲斐、田鍋来談。田鍋と談じ、十二時共に就寝す。

十二月十九日 晴。夜大隈来談。

十二月二十日 晴。下午深水来談。別府氏を訪ふ。七時樂善堂に至り高橋謙を訪ふ。今日漢口より帰着し、今度日本に帰ると云ふ。牟田、田鍋来会、快談、十一時に至り帰る。

十二月二十一日 晴天。朝別府氏を訪ふ。午前樂善堂に至り山内、高橋と寛談。下午四時高橋と出て城内に至り、別府氏の為に磁器を購ひ帰る。帰て別府氏を訪ひ小談。去て田鍋氏の約に赴く。高橋、黒崎来会。快談、十二時に至り就寝。

十二月二十二日 晴。朝食後田鍋氏を辞し、高橋に別れ帰る。下午田鍋、深水、井口、大隈、白岩等来談。高橋、黒崎、西村等を招き晩食す。予頭痛殊に甚し。食はずして寝す。田鍋、深水、別府、藤崎等前後來訪。一時就寝。田鍋、高橋宿す。

十二月二十三日 晴天。午前別府氏来り、別を告ぐ。書籍及微物を賤す。出て樂善堂に至り、高橋を送る。上車共に出て郵船会社碼頭に至る。十二時別府、高橋小蒸気船より呉淞に向て去り、神戸丸に投ず。予、別府と交る三年情骨肉の如く約して兄弟となる。一朝分袂東西千里、黯然断腸の感あり、目送之を久して去る。領事館に速水を訪ふ、在らず、樂善堂に至る。黒崎在焉、小談、帰寓。夜松倉、井口来談。猪飼氏に至り談じ、十時帰る。

十二月二十四日 晴天。土曜日。朝白岩、小山、深水、坪江来談。藤崎、池田等来談。夜草場を訪ひ談ず。

十二月二十五日 晴天。日曜日。午前藤崎と池田五郎を訪ひ、中餐後辞て樂善堂山内を訪ふ。（この後半行分不明）晚餐後田鍋と共に出て予の寓に帰る。田鍋宿す。藤崎来談。

十二月二十六日 晴。朝小山、岩元、西村、川村、牧、楠内、御幡等来談。下午中原、小山、岩元三子を伴ひ川上諸子の為に明日杭州行の船を雇ふ。往復八日、滞在二日にて、船価八円たり。晡高道竹雄、深水、藤崎等来談。夜御幡氏に至り談ず。是日家大人及び妹佐久の信到る。一読一泣、直に回信を認む。

十二月二十七日 晴天、風大。下午武藤、本島、深水、井口、大隈来談。岩元、川村、小山等帰来。風大にして船発せずと云ふ。夜平野、三沢来談。七時所員一同根津氏に会飲す。東京荒尾の計画都合にて二便帰滬延引の事を記せし書信を見る。小飲、帰る。楠内、藤崎、橋口来談。

十二月二十八日 晴。下午沢本、深水、内田来談。夜所員一同根津氏に飲む。

十二月二十九日 晴天。下午藤崎来談。一時出て樂善堂に至り、山内を訪ひ小談。去て上野に至り、磯長海州を訪ふ。余が為に撮影す。談話移

時而帰る。夜松倉，井口，深水，岡田，平野，大隈，高橋，水谷，本島来談。是日予の不在中，中村雄介来訪。佐野直喜の信を遺して去る。

十二月三十日 晴天。下午藤崎，深水等来談。夜本年中清国の要件を印刷せし者を宇土鶴城学館，同小学校，九州学院島田数雄，同岡本源次，東京有斐学舎服部正魁，横須賀鎮守府新納時亮，仙台別府真吉氏に郵送す。外家大人に一封を送る。夜市に至り，襪子及び茶壺を買て帰る。

十二月三十一日 晴。夜和田，藤崎，白岩，松倉等来談。